姥ヶ沢

U ba ga sa wa

1983

中野市教育委員会

姥ヶ沢

U ba ga sa wa

1983

中野市教育委員会

有脚立体土偶（表）

有脚立体土偶（裏）

序

このたび発掘調査を行った大俣の姥ケ沢遺跡は、中野市には数少ない縄文中期遺跡で、多量の遺物出土と住居址1を確認する等、大きな成果を得ることができました。

その成果は、ここに報告書としてまとめたとおり、縄文中期の完形土偶をはじめ、20数点の土器が復元でき、住居址の発見等、地域の古代史に新たな一ページを加える画期的な資料を得ることができました。復元された土偶等の遺物は、歴史民俗資料館に展示され、参観の皆さんに往古の姿を語りかけています。

なお、当教育委員会では文化財の保存保護と活用を高める目的で、地域性と専門分野を勘案しながら、文化財に理解と識見のある20名の方に文化財保護協力員を委嘱して日常生活のなかで配意をお願いしていますが、今回の発見はこの制度が実を結んだものと評価しています。

文化財保護協力員である池田実男氏が、周知の遺跡包蔵地に入っていない所で、大型農機具により深耕された畑を通りがかり発見され、ただちに教育委員会に報告されて現地調査の結果作付けのために更に撹乱されるおそれがあることから発掘調査を行ったものであります。

調査は長期にわたりましたが、この間献身的な御指導御協力をいただいた金井汲次団長をはじめとする調査団の先生方、こころよく発掘作業に参加いただいた多くの皆さん、地主の皆様には調査が長びいたために作付けを延期していただくなど、それぞれ文化財への深い御理解御協力によるものと敬意と感謝を申し上げる次第です。

昭和58年3月

中野市教育委員会
教育長　菅沼　利雄

例　　言

1. 本書は、中野市教育委員会が昭和57年度事業として実施した、農業の普通畑から果樹・アスパラガス栽培への転作に伴う姥ケ沢遺跡の発掘調査である。

2. 土地所有者はA地区が大字大俣阿藤宗司氏、B地区が同阿藤安広氏であり、調査が長びいたため作付延期等格別御理解をいただいた。

3. 発掘位置はA地区が大字大俣字姥ケ沢1074、1080の1番地、B地区は同1086番地である。

4. 本報告は、金井汲次、檀原長則、田川幸生、池田実男、小野沢捷、岩戸啓一が分担執筆し文末に執筆者氏名を記した。

5. 出土遺物及び図版写真類は中野市歴史民俗資料館が保管している。

目　次

序
例　言
目　次
図版目次
Ⅰ　はじめに …… 1
1　発掘に至るまでの経過 …… 1
2　調査団の構成 …… 1
3　発掘の経過 …… 2
4　調査の整理 …… 3
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 5
Ⅲ　A地区の調査 …… 10
1　遺構・遺物 …… 10
(1)　縄文住居址 …… 10
(2)　縄文土器 …… 12
(3)　縄文石器 …… 17
(4)　古代住居址 …… 18
(5)　古代土器 …… 20
Ⅳ　B地区の調査 …… 23
1　遺　構 …… 23
2　遺　物 …… 24
(1)　縄文前期土器 …… 24
(2)　縄文中期土器 …… 31
(3)　口縁部集成 …… 75
(4)　土器の観察 …… 76
(5)　土偶及び土製品 …… 84
(6)　縄文石器 …… 91
Ⅴ　おわりに …… 102

挿　図　目　次

第 1 図　周辺遺跡分布図 …… 4
第 2 図　姥ケ沢遺跡立地図 …… 9
第 3 図　A地区グリット設定図 …… 10
第 4 図　縄文住居址図 …… 11
第 5 図　縄文住居址内出土土器位置図 …… 13
第 6 図　縄文住居址内出土土器実測・拓影図 …… 15
第 7 図　住居址土器 …… 16
第 8 図　住居址土器 …… 16
第 9 図の 1　石器実測図 …… 18
第 9 図の 2　石器実測図 …… 18
第 10 図　古代住居址実測図 …… 20
第 11 図　古代住居址内出土土器実測図 …… 21
第 12 図　土壙実測図 …… 22
第 13 図　B地区グリット設定図 …… 23
第 14 図　B地区遺構・遺物検出図 …… 25
第 15 図　土器拓影図 …… 27
第 16 図　土器拓影図 …… 29
第 17 図　土器拓影図 …… 30
第 18 図　土器拓影図 …… 31
第 19 図の 1　土器拓影図 …… 32
第 19 図の 2　土器拓影図 …… 32
第 19 図の 3　土器拓影図 …… 33
第 19 図の 4　土器拓影図 …… 33
第 19 図の 5　土器拓影図 …… 35
第 19 図の 6　土器拓影図 …… 35
第 19 図の 7　土器拓影図 …… 36
第 19 図の 8　土器拓影図 …… 37
第 20 図の 1　土器拓影図 …… 40
第 20 図の 2　土器拓影図 …… 41

第 21 図　土器展開図 …… 43
第 22 図の 1　土器実測図 …… 44
第 22 図の 2　土器実測図 …… 45
第 23 図　土器実測図 …… 46
第 24 図　土器実測図 …… 47
第 25 図　土器拓影図 …… 48
第 26 図　土器拓影図 …… 48
第 27 図の 1　土器拓影図 …… 50
第 27 図の 2　土器拓影図 …… 51
第 27 図の 3　土器拓影図 …… 52
第 28 図の 1　土器実測図 …… 53
第 28 図の 2　土器実測図 …… 55
第 28 図の 3　土器実測図 …… 56
第 28 図の 4　土器実測図 …… 57
第 28 図の 5　土器拓影図 …… 58
第 28 図の 6　土器拓影図 …… 60
第 29 図の 1　土器拓影図 …… 63
第 29 図の 2　土器拓影図・展開図 …… 64
第 29 図の 3　土器拓影図 …… 65
第 29 図の 4　土器拓影図 …… 66
第 30 図の 1　土器実測図・展開図 …… 67
第 30 図の 2　土器拓影図 …… 68
第 30 図の 3　土器拓影図 …… 68
第 30 図の 4　土器拓影図 …… 69
第 30 図の 5　土器拓影図 …… 70
第 30 図の 6　土器拓影図 …… 70
第 30 図の 7　土器実測図 …… 71
第 30 図の 8　土器拓影図 …… 72
第 31 図　土器実測・展開図 …… 74
第 32 図　土器実測・拓影図 …… 74
第 33 図の 1　土器口縁集成図 …… 76
第 33 図の 2　土器口縁集成図 …… 77

第 33 図の 3　土器口縁集成図 …… 78
第 33 図の 4　土器口縁集成図 …… 78
第 34 図　土器底部写真 …… 79
第 35 図　土偶・土製品出土状況図 …… 84
第 36 図の 1　土偶実測図 …… 86
第 36 図の 2　土偶実測図 …… 87
第 36 図の 3　土偶実測図 …… 88
第 37 図　小形土器・耳栓・土製円板実測図 …… 89
第 38 図　有脚立体土偶実測図 …… 90
第 39 図の 1　石器実測図 …… 94
第 39 図の 2　石器実測図 …… 95
第 39 図の 3　石器実測図 …… 96
第 39 図の 4　石器実測図 …… 97
第 39 図の 5　石器実測図 …… 98
第 39 図の 6　石器実測図 …… 99
第 39 図の 7　石器実測図 …… 100
第 39 図の 8　石器実測図 …… 101

表　目　次

第 1 表　周辺遺跡表 …… 5
第 2 表　柱穴表 …… 12
第 3 表　土器編年表 …… 80
第 4 表　土偶一覧表 …… 84

図　版　目　次

図版 1　姥ケ沢遺跡　姥ケ沢の湧水地　姥ケ沢Ｂ地区
図版 2　縄文住居址　古代住居址
図版 3　縄文住居址床面　炉址上の土器片　石囲炉址
図版 4　Ｂ地区　遺物出土状況（Ｂ地区）　土層（Ｂ地区）
図版 5　土器出土状況（Ｂ地区）　土偶出土状況　縄文中期土器
図版 6　縄文中期土器
図版 7　縄文中期土器
図版 8　縄文中期土器
図版 9　縄文前期末土器　縄文中期土器
図版 10　縄文中期土器
図版 11　縄文中期土器
図版 12　縄文中期土器
図版 13　縄文中期土器　口縁部集成
図版 14　土偶　打製石斧

Ⅰ　はじめに

(1)　発掘調査に至るまでの経過

昭和56年暮から正月初めにかけては暖冬で積雪もなく穏やかな年末年始であった。

中野市文化財保護協力員であり、考古学に詳しい池田実男氏は57年の1月5日に、正月料理用にと普段は行く人もない大俣字姥ケ沢の清流に群生するセリを捜しに出掛けた。その帰りに北側の丘に登ると、大型トラクターで耕起された畑の中に、当市では数少ない縄文土器片が多数散乱しており、又住居址と思わせる数ケ所の黒色土群を発見した。

このことが直ちに教育委員会に報告され、翌6日に市文化財保護審議会会長の金井汲次氏、発見者の池田実男氏、事務局の藤沢・岩戸の4名により現地調査を行い遺跡を確認した。

この地は周知の埋蔵文化財である姥ケ沢遺跡に近いがその範囲には含まれておらず、深耕により土器が掘り起こされたものであった。

地主を確認し訪ねて経過等聞いたところ、普通畑を一人はりんごワイ化栽培に、もう一人の方はアスパラガス栽培に転作するため依頼して大型トラクターにより耕起してもらったもので夜ライトをつけて作業したという事であった。

今後の栽培過程で更に遺跡破壊が考えられるので緊急発掘調査による記録保存をはかることとし、春の植付けに間に合うよう雪解けを待って調査を行う方向で地主の承諾を依頼した。

4月3日地主の同意が得られたので直ちに関係書類を提出し調査団編成をして4月6日から発掘調査を開始することになった。

(2)　調査団の構成

調査責任者	菅沼利雄	中野市教育委員会教育長
調査団長	金井汲次	日本考古学協会員　中野市文化財保護審議会会長
調査主任	檀原長則	長野県考古学会員
調　査　員	田川幸生	日本考古学協会員
	小林軍司	中野市文化財保護協力員
	池田実男	〃
	小野沢　捷	長野県考古学会員
事　務　局	土屋練太郎	市社会教育課課長
	小野沢　捷	〃　歴史民俗資料館管理係長
	岩戸啓一	〃　主事
調査協力者	阿藤英奈・古田茂・前沢久文・増田恒良・大日向千秋・湯本秀保・大塚昌克・	

小野沢時子・小林東助・原滋・飯島哲也・前島卓・中村邦光・大石和彦・斉藤英之・小野道彦・池田八七子・小林行保・阿藤宗司・阿藤政子・酒井健次・田中まさみ・守屋誠・笠原正秀・木原寅治・土屋ゆかり

(3) 発掘の経過

4月6日(火)晴、午前中発掘機材搬入、午後現地にて調査団の結団式と鍬入れ式を行い、テントを設営してA地区から発掘作業を開始する。市のブルトーザーで表土(撹乱層)の除去を行う。高坏・壷の破片多く出土、40センチメートル位の深さまでプラウの深耕により撹乱されている。

4月7日(水)小雨後曇、土壙、ピット各1を検出する。焼土群3ケ所あるうち B 14 グリットからは木炭片の出土が多い。

4月8日(木)小雨後晴、午前中雨のため土器洗い。午後石囲い炉址出土、打石斧4点のほか縄文土器片多数出土した。

4月9日(金)曇後小雨、天候悪く、強粘土のため作業難渋、石囲い炉址部から深鉢1個体分出土する。

4月10日(土)曇、 前夜雨風激しく雷鳴あり。夜半から季節はずれの雪となり朝には4センチメートル程の積雪となり作業を中止、覆いシートの点検をする。

4月12日(月)晴、 午前はグリットに溜った水の汲出し作業行う。炉址の清掃と実測。北中央部に3トレンチ入れたが遺構遺物ともなし。

4月13日(火)曇一時小雨、 炉址の実測、写真撮影し遺物取り上げ、更に掘り下げ開始、柱穴状ピット4個検出、大俣区民参観多くあり。

4月14日(水)曇後小雨、 炉址掘下げ、清掃、実測行う。西方へ拡張し柱穴状ピット7個まで確認し住居址壁の検出につとめたが確認できなかった。

4月15日(木)雨、 雨のため土器洗いを行う。

4月16日(金)晴、 更に西へ拡張、清掃して実測を行う。

4月17日(土)晴時々曇、 B地区にグリットを設定しA地区、B地区併行作業とする。

A地区－実測。B地区－B 7から縄文土器片多数出土

4月18日(日)晴、 A地区－住居址壁出始める。

B地区－B 9は60センチメートルまで掘り下げてもまだ遺物出土し遺構層に達しない。

4月21日(水)曇、 A地区－住居址の壁を検出し全体プランを確認する。実測。

B地区－A 7からC 11までの掘り下げ行うが土器片の出土あるも遺構全く検出できない。

4月22日(木)晴、 A地区清掃、写真撮影、実測。B地区－打石斧、磨石斧、凹石も出土。

4月23日(金)晴、 A地区実測。B地区－C 8は地表下110センチメートルまで掘り下げ、手製ハシゴを作って出入りする。

4月24日(土)晴、 A地区－実測終了し調査完了。B地区－縄文中期土器片が地表面から 70センチメートル掘り下げても全レベルから出土している。

4月25日(日)晴、 グリットを黒色土が表面に出ている所全体に拡張し掘り下げ行う。ほゞ完形の小型深鉢出土。土器片、石器類の出土多いが遺構全く検出されない。長野吉田高校生6名の協力参加あり。

4月27日(火)晴、 清掃、写真撮影、実測行い一部遺物取り上げる。

4月28日(水)晴、 D11、E 12から土偶片出土する。

4月29日(木)晴時々曇、土偶片・耳栓の出土続く。大俣区と分館による遺跡見学会があり、小中学生、一般の見学も多く100名を超える参観あり。

4月30日(金)曇時々小雨、 C 11、D 12、D 13、E 12からピット検出したが遺構の確認はできない。午後フェーン現象ですぐ近くに山火事騒ぎが起きる。

5月1日(土)曇、土偶の顔部分3点出土する。土器群と共に打石斧の出土も多い。

5月4日(火)晴、D 11から頭と右手を欠いた土偶出土する。他にも足部ほか数点が出土する。数個体分の土器群、石錘、石鏃、凹石、打石斧、石匙、土製円板も出土、遺物は多い。

5月6日(木)晴時々曇、午前11時にA地区住居址において、地主の要望もあり住職を招いて鎮魂法要を行う。B地区土器片多、深鉢、土偶片、耳栓、ミニ皿、器台、打石斧、獣骨片も出土する。

5月7日(金)晴、D 10から土偶の頭部と右手部分が出土、4日のD 11から出土の土偶片と合わせると高さ19センチメートルの完形品となる。出土遺物の状況から祭祀遺構との判断強まる。

5月8日(土)晴、9日(日)曇、清掃、写真撮影、実測、遺物取り上げと随時行ってきたが、8日9日実測し調査完了する。9日夕方テント撤収、資材搬出する。

5月10日(月)晴、 午前中に市ブルトーザーにより埋戻し完了する。

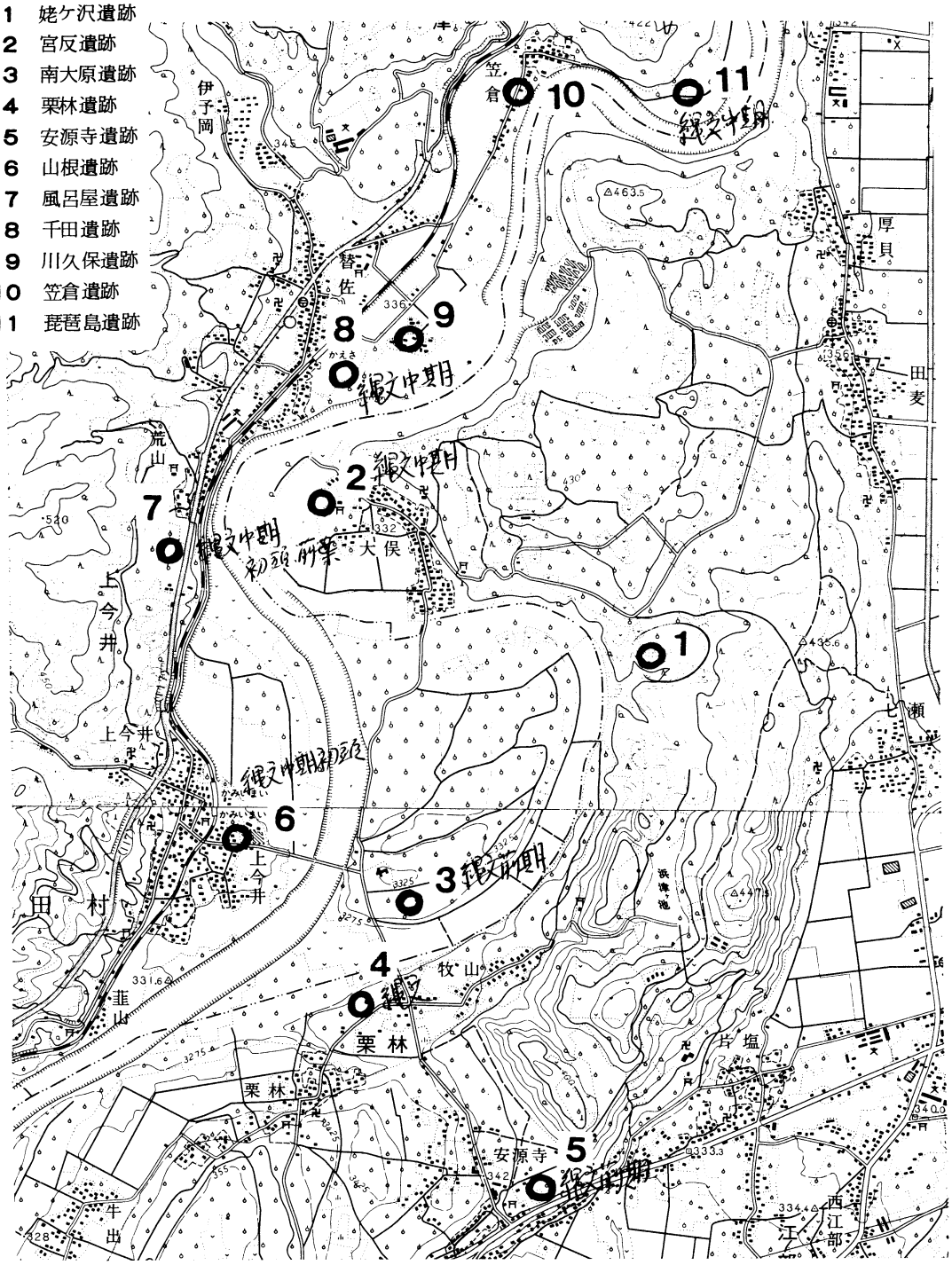
(4) 調査の整理

57年はこの姥ケ沢遺跡に引き続いて田上寺の前遺跡、第3次間山建応寺跡と発掘調査が 続いた。土器洗いは7月から10月まで歴史民俗資料館で行い、土器の復元、記録整理、報告書作成作業は10月に入ってオフシーズンの市民プール管理棟で行った。

降雪期を迎えるまで現地発掘におわれたため、記録整理作業は冬季に入り3月末ようやく報告書作業を終了した。

(小野沢捷)

1　姥ケ沢遺跡
2　宮反遺跡
3　南大原遺跡
4　栗林遺跡
5　安源寺遺跡
6　山根遺跡
7　風呂屋遺跡
8　千田遺跡
9　川久保遺跡
10　笠倉遺跡
11　琵琶島遺跡



第1図　周辺遺跡分布図

II　遺跡の立地と環境

千曲川は善光寺平の沖積地帯を蛇行し、立ケ花・蟹沢から川幅は狭められて峡谷状地形を北へ流下して、古牧・蓮で再び川幅が広がりをみせて木島平の沖積面へ向う。

姥ケ沢遺跡は長丘丘陵の西へ張り出した大俣部落の東方上の台地にあって、標高は380m～395mにわたっている。この台地西側下には、明治5年に瀬直しが行われ、現状は平坦な耕地(水田)となっている旧千曲川の河床が崖沿えに彎曲して残り、これとの比高差は約50mである。

本遺跡周辺には2か所の湧泉があって、豊野層のもろい地層のため、土砂が流出して小さな峡谷地形を呈している。地名の示すように温い姥の懐の如く陽だまりの暖い沢で各種の植物が繁茂し、鳥獣が棲息し、往古も同様であったと推定され、原始・古代人の生活の舞台として最適の場所であったろう。

本遺跡は東西約300m、巾50～150mの規模をもつものと想定され、現況は畑で粘質土壌の比較的肥沃の地域で果樹やアスパラガスが栽植されている。

周辺の遺跡(第3図)には栗林遺跡(県史跡)をはじめ著名な遺跡が多く第1表を参看していただきたい。

(岩戸啓一)

第1表　周辺遺跡表(長野県史より)

中　野　市

県史番号	番号	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	文献	備考(所蔵者)
51	6558 (77)	安源寺遺跡	安源寺宮裏		(ア)ナイフ形石器、彫器、石刃 縄前期土器、勝坂式、加曽利E式、石鏃、石槍、打石斧、石匙、凹石、磨石、石皿、敲石、玦状耳飾、土偶 (イ)竪穴住居4、土壙墓15 中・後期土器、打石斧、石庖丁、太形蛤刃石斧、扁平片刃石斧、細形管玉、ガラス玉、土錘、土製紡錘車、土製勾玉、土製丸玉 (ウ)土師平窯1 土師器、鉄鏃 (エ)竪穴住居4、トンネル式無段登窯1、土壙墓12 土師器、須恵器	Bb 27※ 〃 96※ Cb 85※ 〃 95※ Db 22※ 〃 46 〃 50※ 〃 55 〃 61※ 〃 78※ 〃 114※ 〃 131※ Eb 204※ Fb 51※ 〃 79※ 〃 84※ 〃 122※ 〃 171※ 〃 183 〃 194※	中野市教委

県史番号	番号	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	文献	備考（所蔵者）
					(中)火葬墓12、土壙墓1 古銭、鉄釘 （昭25.40.41.51.60年発掘）		
55	6559 (83)	栗林遺跡	栗林・北原	平地	(後)中期竪穴住居3、土壙墓2、集石1、中・後期土器、磨石鏃、石鋸、石庖丁、太形蛤刃石斧、扁平片刃石斧、凹石、細形管玉、勾玉、ガラス玉 (平)土師器、須恵器、灰釉陶器 (中)五輪塔、宝篋印塔 （昭23.41.52発掘）	Db 6 〃 7 〃 13 〃 15 〃 21 〃 23 〃 30※ 〃 33 〃 47 〃 53 〃 138	神田加奈登 中野市教委 県史跡
56	7931 (84)	浜津ケ池〃	〃・壷池	丘陵腹	(先)ナイフ形石器、彫器、掻器、石刃 (縄)石鏃、打石斧 (平)土師器、須恵器	Bb 6 〃 22 〃 34	
16	6554 (92)	姥ケ沢〃	大俣・姥ケ沢	段丘	(縄)前・中期土器、石鏃、打石斧、磨石斧、石匙、石錐、石皿、敲石、玦状耳飾 (後)中期土器・太形蛤刃石斧、扁平片刃石斧		神田禎治
17	7874 (93)	宮反〃	〃 宮反	〃	(縄)中期土器、石鏃、打石斧、磨石斧、凹石、石棒 (後)後期土器 (平)土師器	Cb 40	神田加奈登
18		大俣神社付近 〃	〃	〃	(縄)打石斧 (平)土師器		
19	6553 (88)	七瀬〃	七瀬・宮前	山麓	(後)後期土器、太形蛤刃石斧 (古)和泉式		
67	6551 (87)	大徳寺遺跡	〃 槻木	山麓	(後)後期土器、管状土錘、太形蛤刃石斧 (古)土師器 (平)土師器		
119	7901 (89)	七瀬双子塚古墳	〃 南原	丘陵頂	(古)前方後円（長78.0 後円径48.0 高7.5 前方巾25.0 高6.5）竪、円筒埴輪、葺	Eb 174	七瀬区 市史跡

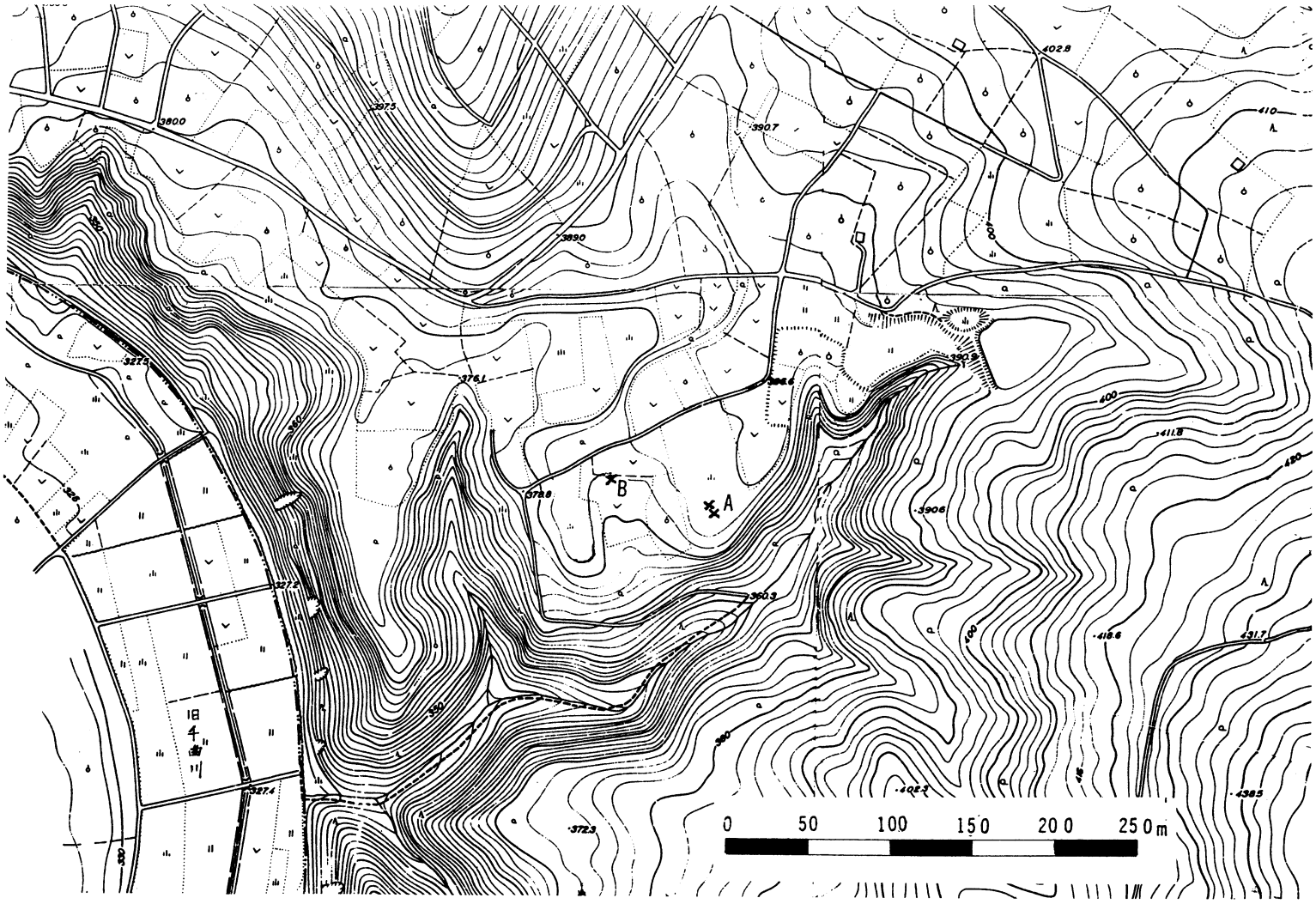
県史番号	番号	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	文献	備考（所蔵者）
					石、八乳鋸歯文鏡、直刀、矛、三角板革留短甲、土師器、須恵器		
125	7904 (91)	前山古墳	七瀬・前山	山麓	(古)円（径15.5 高2.4）粘土槨（長3.9 巾1.11 高0.1）直刀、鉄鏃、土師器（昭和50年発掘）	Eb 192 〃 203	中野市教委
126	7905 (94)	林畔1号〃	田麦・林畔	丘陵頂	(古)円(径23.0 高4.0)合掌鉄剣7、矛2、蕨手形鉄器、刀子、鉄鏃50、短甲1、馬具、砥石、ガラス小玉、土師器	Eb 61	京都大学
127	(94)	林畔2号〃	〃	丘陵頂	(古)円(径27.0 高2.7)粘土床珠文鏡、管玉6、ガラス小玉36、勾玉2、碧玉勾玉1、滑石製小玉224、櫛7、直刀1、鉄鏃20、刀子1（昭23年発掘）	Eb 65 〃 66 〃 69※	京都大学
128	7907 (97)	山の神〃	厚貝・山の神	〃	(古)円(径32.0 高4.0)、粘土床(長5.0 巾0.6)、円筒埴輪剣6、矛1、刀子1、異形刀子1、斧頭2、鏃頭1、槍頭1、滑石製小玉23、櫛25、人骨2体分）（昭23年発掘）	Eb 65 〃 66 〃 69※	京都大学

豊田村

2	6926 (2)	南大原遺跡	上今井・南大原	段丘	(縄)前期竪穴住居1 有尾式、南大原式、北白川下層Ⅱ式、上原式、加曽利E式、石鏃、打石斧、凹石、石皿、磨石斧、石錐、石匙、玦状耳飾、シカ、イノシシ、クルミ (弥)竪穴住居、溝 栗林式、箱清水式、石鏃、磨石鏃、太形蛤刃石斧、扁	Cb 37 〃 38 〃 52 〃 190※ Db 57 〃 137※	神田加奈登 豊田村教委 神田禎治 神田加奈登

県史番号	番号	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	文献	備考（所蔵者）
					平片刃石斧、細形管玉、凹石、玉砥石、植物種子 (平)土師器、須恵器 （昭 26.32.54 年発掘）		
3	6927 (3)	山根遺跡	上今井・山根	台地	(縄)中期初頭型式、勝坂式、加曽利E式、堀ノ内式、佐野式、石鏃、打石斧、磨石、石皿、磨石斧、石匙、石錐、石錘、砥石、石棒 (弥)栗林式、箱清水式、石鏃、太形蛤刃石斧、扁平片刃石斧、有孔小形石斧 (平)土師器、須恵器	Cb 6	
7	6925 (6)	風呂屋 〃	上今井・荒山	山麓	(縄)勝坂式、後期土器、石鏃、凹石 (弥)太形蛤刃石斧 (平)灰釉陶器 (中)空堀、土塁		
9	6921 (9)	千田 〃	豊津・替佐・千田	段丘	(縄)勝坂式、加曽利E式、石鏃、打石斧、磨石斧、石錐 (弥)箱清水式、太形蛤刃石斧、扁平片刃石斧 (古)土師器		飯山北高校
12 (14)	6922	川久保 〃	豊津・替佐・川久保	〃	(弥)百瀬式、太形蛤刃石斧、扁平片刃石斧	Db 13 〃 36	
18 (18)	6918	笠倉 〃	豊津・笠倉	〃	(弥)栗林式、箱清水式、石鏃、太形蛤刃石斧、扁平片刃石斧、有孔石剣、有溝石剣、細形管玉	Db 10 〃 13 〃 64	
20 (19)	9873	琵琶島 〃	豊津・笠倉・宮腰	〃	(縄)中期土器 (弥)栗林式、箱清水式 （昭 31 年発掘）	Db 64	飯山南高校

第2図　姥ケ沢遺跡立地図



III　A地区の調査

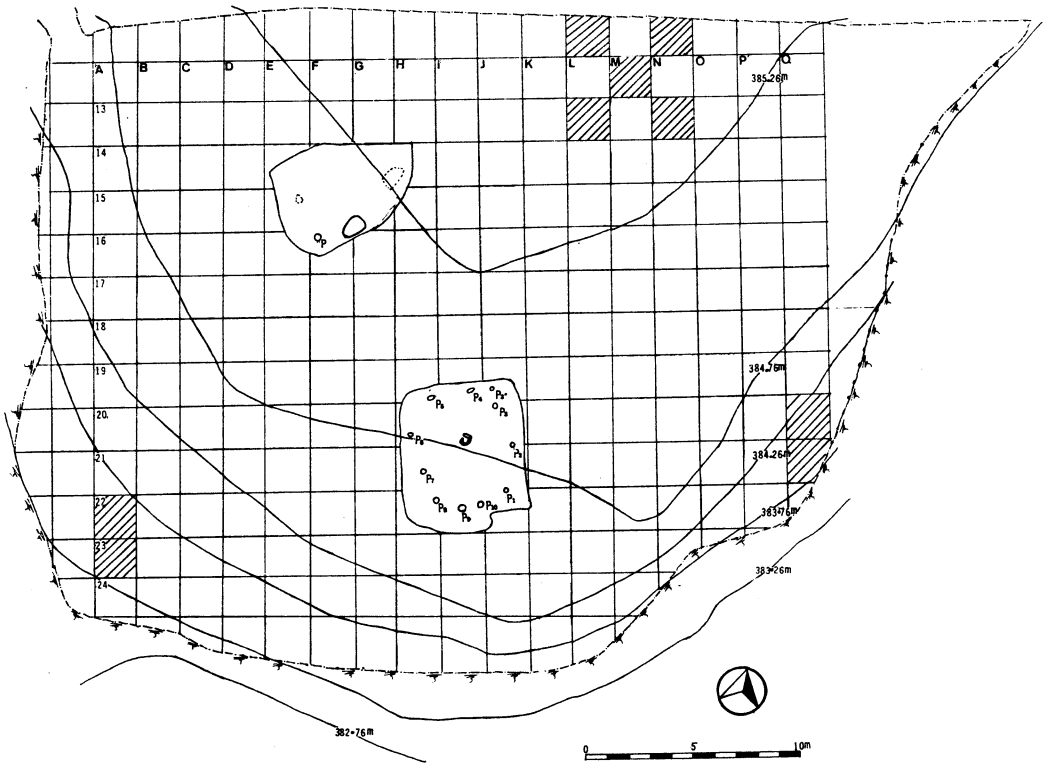
A地区は、字姥ケ沢1074・1080の1番地で、標高385～387 *m*にわたり、西へ緩傾斜する13 *a*の畑地である。西側は旧千曲川の河床が明治初期に水田化され、東側は深い谷には湧泉から流れ出す清流に山菜が豊富に育ち、良好な環境にめぐまれた遺跡は高台にあるゆえに眺望は絶佳である。

地主阿藤宗司氏はアスパラガス苗の植付けを延期して、発掘調査に御協力下され、昭和56年晩秋の深耕によって、遺物の表採をみた場所と、黒土の露出場所5か所にグリットをいくつか設け（96 m^2）調査の結果、次のような成果をあげることができた。

1　遺構・遺物

(1)　縄文住居址（4・5図）

〔位置〕　住居址の立地する台地は、南側が旧千曲川に向かって切断されて、B地区を含めた地形は、W状の起伏の台地となっており、その右側（東南）の谷頭の崖際から6 *m*程離れた位



第3図　A地区グリット設定図

置に住居址が所在する。

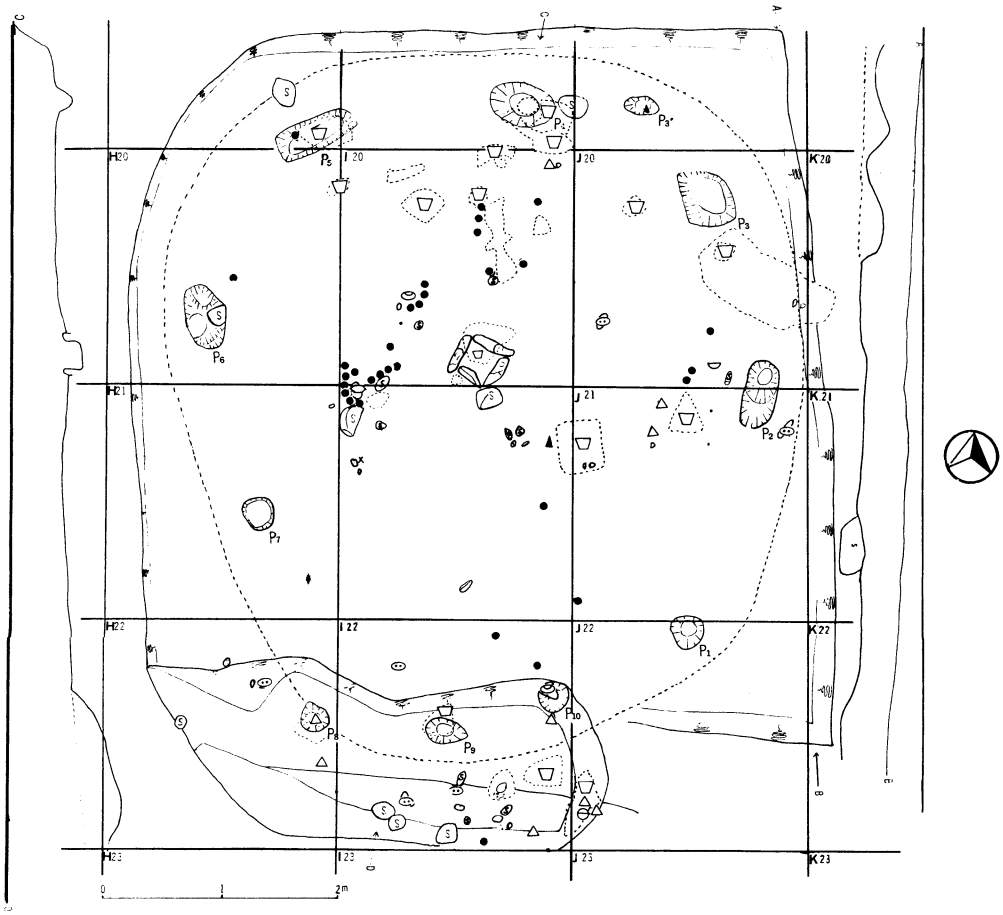
急崖の高低差[1]は24 *m*程で、谷底は湿地帯で湧水が流れ、かつて大俣集落へ引水が計画されたことがある。

〔形態〕　長軸がほぼ南北の楕円形を呈する。長軸は約6.1 *m*、短軸は5.3 *m*と推定されるが、竪穴の範囲は耕作のために撹乱されており、加えて上層の表土と新期火山灰Ⅲ・Ⅱ層の堆積土[2]と地山の層が識別困難で層序が明確に確認できなかった。また周溝も確認できなかった。

まず調査の初期に炉址が確認されたので、それに従って床面を追って行くと、南緩傾斜面をカットして住居面を造成しており、従って炉址より南半分は、張り出し床面で堅くしまり、土器の細片なども混入していた。

床面は炉址より北側部分はほぼ水平、南半分は僅か傾斜し床面上に焼土が炉址の南側附近、北東の部分に広がって検出された。

柱穴は、10個検出されたが、P_1～P_6の柱間は 約1.7 *m*、P_6～P_7は2.2 *m*、P_7～P_8は



第4図　縄文住居址図

推して入口部分にあたると推考される。P_3，P_4，P_9の柱穴は内側に向かって掘られ、土器片や石が混入していた。P_1～P_6の柱間は、約1.7 m、P_6～P_7は2.2 m、P_7～P_8は1.3 m、P_8～P_9は1 m、P_9～P_{10}は1.1 mの距離である。

第2表　柱　穴　表

ピット名	P_1	P_2	P_3	P_4	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8	P_9	P_{10}
長　軸	28	60	70	60	30	60	70	35	27	40	30
短　軸	25	35	35	45	24	40	35	30	25	22	24
深　さ（床面より）	43	30	40	40	15	57	50	35	40	45	30

〔炉址〕　炉址は屋内のほぼ中央に位置し外径45㎝×40㎝、内径30㎝×25㎝の数値で4個の細長い河原石で囲み、深さ30㎝程で小型の炉に属する。北側の炉縁石は床面に合わせてやや高く据えられていた。炉址の長軸線は住居址の長軸線より東北東にふれており、磁北線とほぼ一致する方向を示す。炉の中には焼土と土器片が落ち込んでいたが、（5号）の土器が炉址の北側部分より南に向かって倒れていた。

〔時期〕土器の出土状態は、いわゆる井戸尻パターンを示すと考えられるが、11号・12号の土器は南側の張り出し床面下から検出されたもので他の土器と時期的に遡古する様相を示すものと思われる。ほぼ原形の判明する9号の土器に焦点を当て、観察すると縄文中期姥ケ沢第Ⅳ期（曽利Ⅰ式期）頃に属し、信濃川中流域に中心を持つ馬高式文化圏の火炎土器の前駆的な要素を持った土器であり、胴部の渦巻状の施文は、新崎式の流れをくむ古府式の要素をもち、大木8 a式にも共通する様相を示している。また炉に倒れていた5号土器は復原はできなかったが、口唇部に玉だき三叉文をもち、（6図）北陸文化圏に属する様相を示しているのが注目される。

(2)　縄文遺物

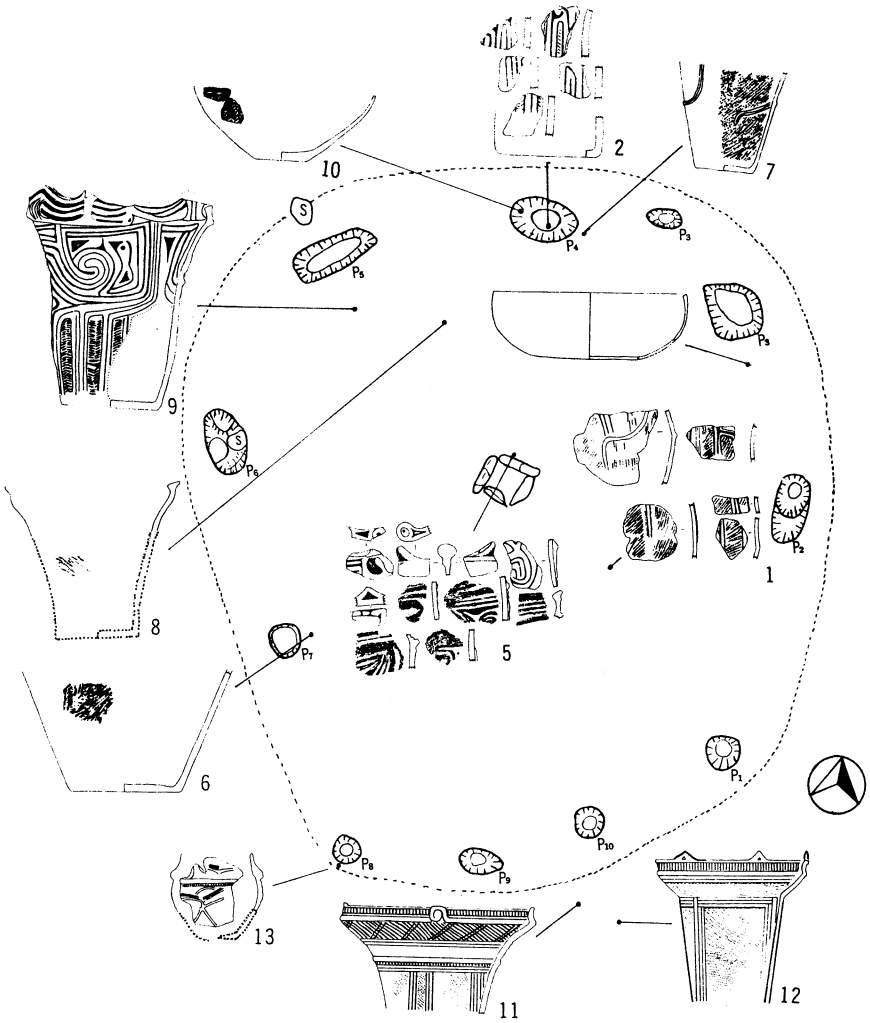
住居址出土土器（6・7・8図）

出土した土器は、器面削落して識別困難なものが多く、廃絶から埋没の時期、土器の素材や焼成、使用期間、目的、生活慣習などの要素をからむ問題と思われるが、岩石粉末（滑石？）を含有する土器が多い。

(1)は深鉢形の土器で、復原図は出来なかったが、岩石粉末を含んだ黄褐色の土器で焼成不良でもろく、口径22㎝、胴径30㎝、器厚0.8㎝、器高は不明の土器で、胴部は樽形を呈し口縁部は、やや外反している。

(2)は器面剥落して不明な点が多いが、底径16㎝、底器厚1㎝、胴部下器厚1.4㎝、外不明で、内面は煤状黒色を呈し、多面は黄褐色を呈する。文様はワラビ手状の渦巻文、竹管平行線文があり、間を篦がき状の綾杉状の刻みがあり、9号土器と似た様相を示す。

(3)は浅鉢形土器で口径37㎝、器高約12.5㎝、器厚0.4～0.5㎝の薄手の土器である。胎土に



第５図　縄文住居址内出土土器位置図

は砂粒が多く認められるが器面は粘土を塗付して磨研され、白褐色を呈し堅緻な土器である。

(5)　深鉢形土器は内外面とも赤褐色で胎土は砂粒と安山岩粉末（黒色鉱物）と思われるものを多量に含み、口縁部は入字口縁となり、口唇に玉だき三叉文が見られ、口径は 約 28 ㎝と推定されるが、外の数値は不明である。口縁部は内彎し、胴部との間に横の隆帯をつくり、小波状の下から隆帯がU字形につき、平行竹管文が、横方向に見られる。胴部は隆帯が渦巻状にめぐり、その間を篦がきの半隆起線で埋めている。この土器も９号土器に似た様相を示す。

(6)　鉢形土器　上半部分は欠損して不明だが、黄褐色を呈し、安山岩粉末と思われる黒色の砂粒を含み、底径 16 ㎝、残存胴部径 26 ㎝、器厚 1.1 ㎝、上げ底で、内面は黒色を呈し器面には、ＬＲ縄文を施文する。

(7) 小形深鉢形土器は、口縁部が僅かに欠損し、やや直線に外反した土器で底径8㎝、残存高さ16㎝、同口径15.5㎝、器厚0.7㎝で石英など砂粒多く含有し、内面煤色、外面赤褐色で阿玉台式モチーフの隆帯が2本、相対して孤状に垂下し、ＬＲ縄文で充塡している。

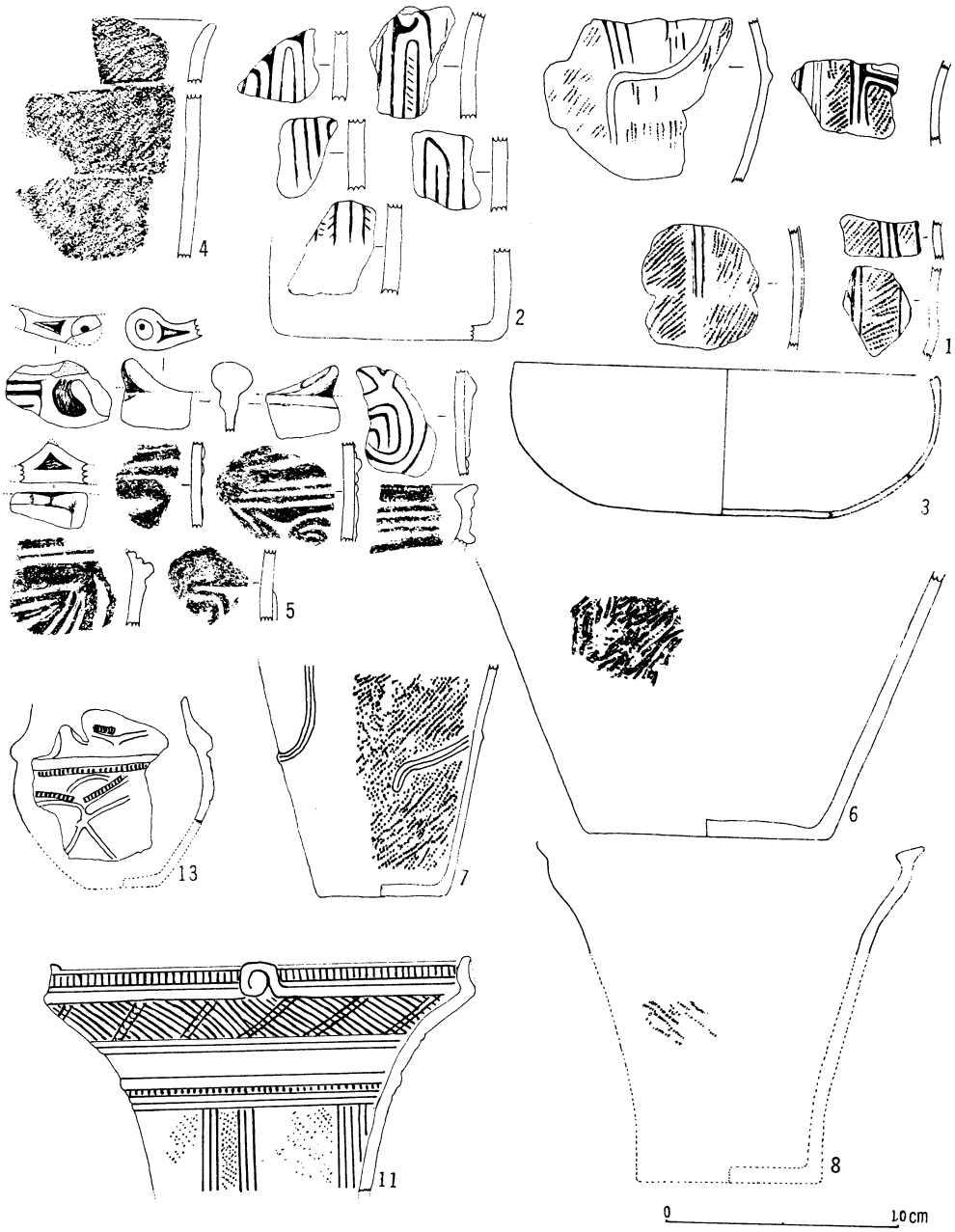
(8) 深鉢形土器は、破片から図上復原すると口径25㎝、底径約8㎝、器厚0.7㎝、高さ14.5㎝で、上半部が大きく外反し、口縁部はキャリパー形を呈する。この土器も白色粉末を（滑石？）を胎土に含み、胴部には、ＲＬ縄文が僅かに残っており、もとは全面に施文されていたらしい。

(9) 深鉢形土器は、岩石粉末（白色、滑石？）を含み、器面は褐色で粘土を塗付している。口径26㎝、高さ31㎝、器厚0.9㎝、底部径13.5㎝、正円でなくいびつで上げ底となっている。器内下部は黒褐色を呈し、煮沸用に使用されたことが判る。口縁部は、欠損部が多く不明な点が多いが、環状をなすx形の小把手が6ケ所につき、それぞれに小波状の口縁を作る。把手間を篦がきの沈線で重孤文様に結び口縁部文様帯を作り、口縁部文様帯の下に隆帯を作って胴部文様帯と2分させている。胴部文様帯は、4分割で口縁部下より基隆起線を垂下させ、斜方向に降下する入組風渦巻文は、中間で斜位となり下半部の文様帯に分かれている。これに並行する条線は、篦がきで作られ、断面は三角形状を呈する。胴部中央には、入組風渦文（ワラビ状懸垂渦巻文）をつくり、三角形の刻み、三叉文、円点などが陰刻で配される。下半部は、隆線で長方形に画され、その中に八の字状、逆八の字状などに篦がきで綾杉状に陰刻されている。

(10) 浅鉢形土器は、口径26㎝、底径7㎝、高さ10㎝程で器厚が口縁部0.5㎝、底厚0.8㎝で赤褐色の部分と煤状の附着した部分は黒褐色を呈する。底部は火熱で剥離した部分がある。胎土は砂粒少なく良質の粘土で作られている。器面には、ＬＲ縄文が施文されていたらしいが、ほとんど剥離して口縁部破片に残るのみである。

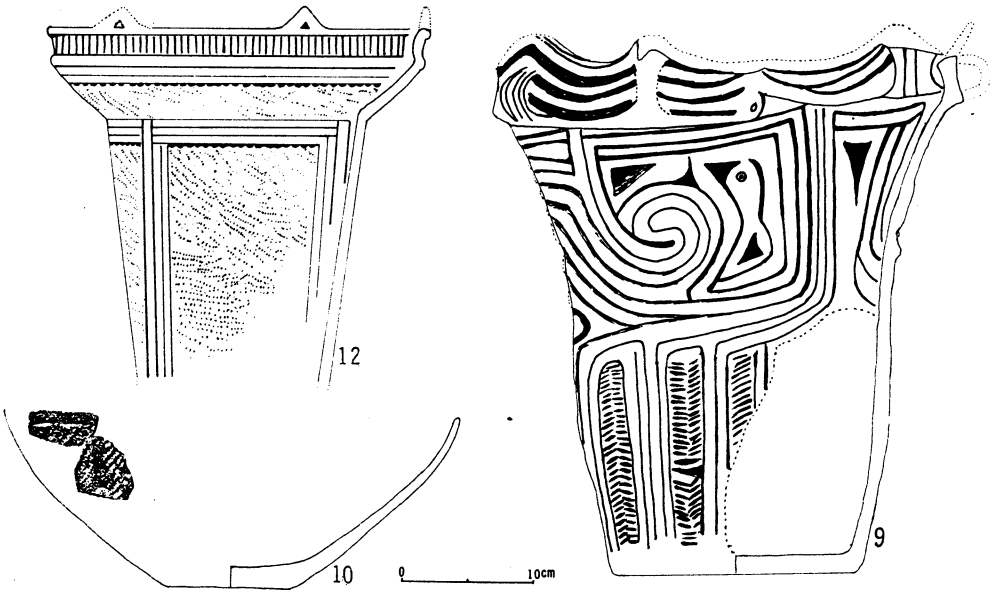
(11) 深鉢形土器　この土器は住居址下層出土で口径27㎝、器厚0.8㎝、胴部残存部径14㎝で下部は破損のため不明である。胎土には、石英などの砂粒多く含み雲母もみられる。器形は上半部大きく外反し、口縁部は、キャリパー形を呈する。屈折部の隆起帯に「の」の字状の突帯をつけ、幅太の竹管平行文をつけ、隆起帯の下は左上から右下に斜行並行させた太目の竹管文に、次は約5㎝間隔に右上から左下に斜行させ格子目状の施文をしている。その下の2条の竹管文の下は無文帯で隆起線で画している。下に突刺文を並行させる2条の竹管文で、胴部は縦位の分割となるが、破損のため不明である。竹管文の間には、ＲＬ縄文が施文されている。この土器は、斜格子状の文様「の」の字状突帯や施文部位から諏訪の踊場・梨久保系の影響をうけて中部山地で成立した土器と思われるが、新保式土器とも関連のみられる土器である。

(12) 深鉢形土器。南側、床面下から検出された土器で黒褐色を呈し胎土の砂粒は精選されて細かく、口径22㎝、底径約11㎝、推定高さ25㎝、器厚0.7㎝でやや外傾して立ち上がった胴

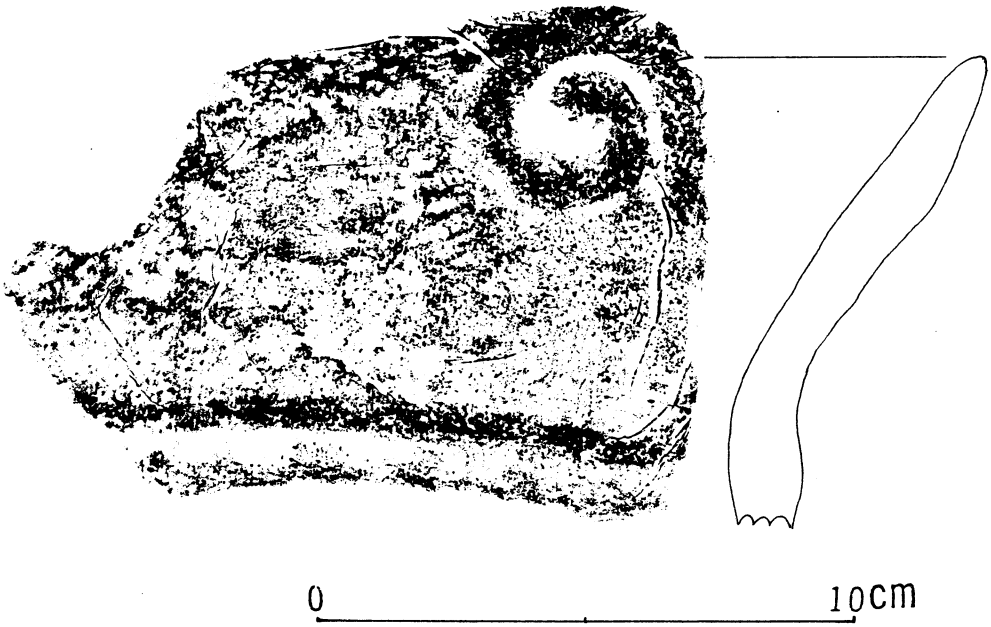


第６図　縄文住居址内出土土器実測・拓影図

部が頸部下で大きく外反して口縁部は直上して山形（三角形）の口縁が２ケ所、確認されるが個数は破損のため不明である。口唇下に竹管で横条線を引き、屈折部上に太い隆起線を引いて、その間を上下に竹管並行文を並列させている。２条の竹管文の下には、竹管の先端で突刺した文様を並列させ、胴部までの横帯はＲＬ縄文を施文し頸部には３条の竹管文を並列



第７図　縄文住居址内出土土器



第８図　縄文住居址内出土土器

させ下に竹管押引文を並列させている。胴部文様帯は、４分割で分割する基隆線は３条の竹管文をつきぬけて頸部に至っている。その両側には２条ずつ竹管文を並列させている。区画内はＲＬ縄文施文する。下部に２個補修孔があり、この種の土器の破損状況が似ているのは

注意を要する。突刺文の存在や胴部基隆線が、曲線化していないなどの特色から、器形は踊場系、胴部の基隆起線による方形区画は五領ケ台式の流れをくむものと思われる。

(13) 小形樽形土器。P_{10}より発見された土器で床面下に存在し時期に問題のある土器である。赤褐色を呈し胎土に砕粒を多く含む、口縁12.5㎝、底径不明、高さ約12㎝、器物が0.7㎝で口縁は大波状と小波状を呈すると思われるが、詳細は不明で胴部上に横隆帯をもうけて文様帯を上下に分け、胴部には突帯をもうけて隆線上は連続爪形文で、合わせて沈線をめぐらせている。（檀原長則）

(3) **縄文石器**（9ノ1・2図）

磨製石斧（23） 刃部を欠いている、比較的小形の定角式の磨製品である。表面は蛇紋岩特有の美しさを持ち、灰白色の地に黒色のすじが混入した紋様である。

打製石斧（1～18） 合計27点出土した。このうちほぼ完形品は14点で、残りは上半、または下半部の破片である。ほとんどが粘板岩や硬砂岩で、1点だけ砂岩であった。全体的に平板状の石器である。1～12までは、長さ9㎝、幅約4㎝程度で、短冊形あるいはそれに近い形で、この種のものは完形品が多い。13～18は撥形で、13を除きいずれも上半または下半部を欠く。長さ10㎝以上で、比較的大型である。このように打製石器は、形や大きさによって、保存状態の差がみられる。

小形打製石器（20・21） 2点共に扁平な小形の剥片調整石器である。まわりに刃部をもっている。

礫器（19） 扁平な河原石の部分加工した石器である。A地区からは1点出土しているがB地区からは多量の出土をみた。B地区に関係深いので、そちらにゆずり、ここではその事実のみとする。

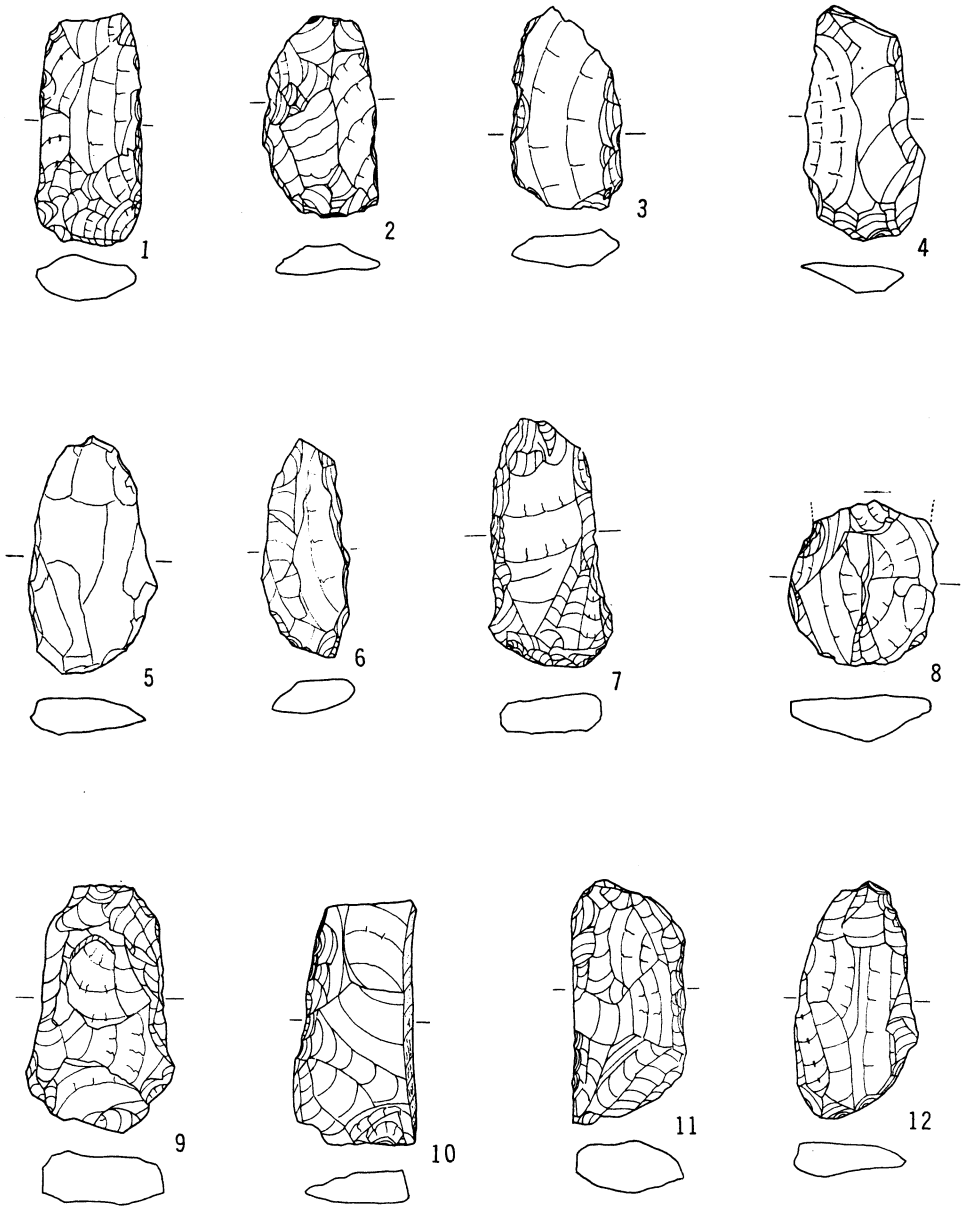
凹石 出土した3点は、いずれも河原石を利用している。共通点は扁平な長楕円形で、表裏共に平面状をなしている。大きさもほぼ同じで、長さ14㎝、幅約8㎝、厚さ約5㎝である。中央部の表と裏に2穴のものが2点（このうち1点は片面に黒煙状のものが附着しており、真黒である。）と、両面に1穴のもの1点である。

砥石状石器 いずれも破片であって、すりみがいた痕跡が認められる。共に破片であって、本来の形状は不明である。石器は砂岩質であって、かなり硬く赤味をおびている。

磨石 にわとりの卵形で卵大のもの1点と、ややそれより大きいもの1点である。いずれも河原石利用で、灰黒色と白黄色のもので、全面がつるりとした、磨かれた石である。

石棒（22） 長さ2㎝の胴部の破片の一部である。断面は2.5×2.7㎝で若干の楕円状をなす。磨製品であるが、黒灰色の荒い砂岩質のため、なめらかでない。比較的小形な部類にはいる。

以上はA地区出土の石器である。この地区は住居跡を中心とした遺構であるので、住居跡と遺物の主体である土器との関連でとらえなければならない。出土位置の特色をひろってみると、

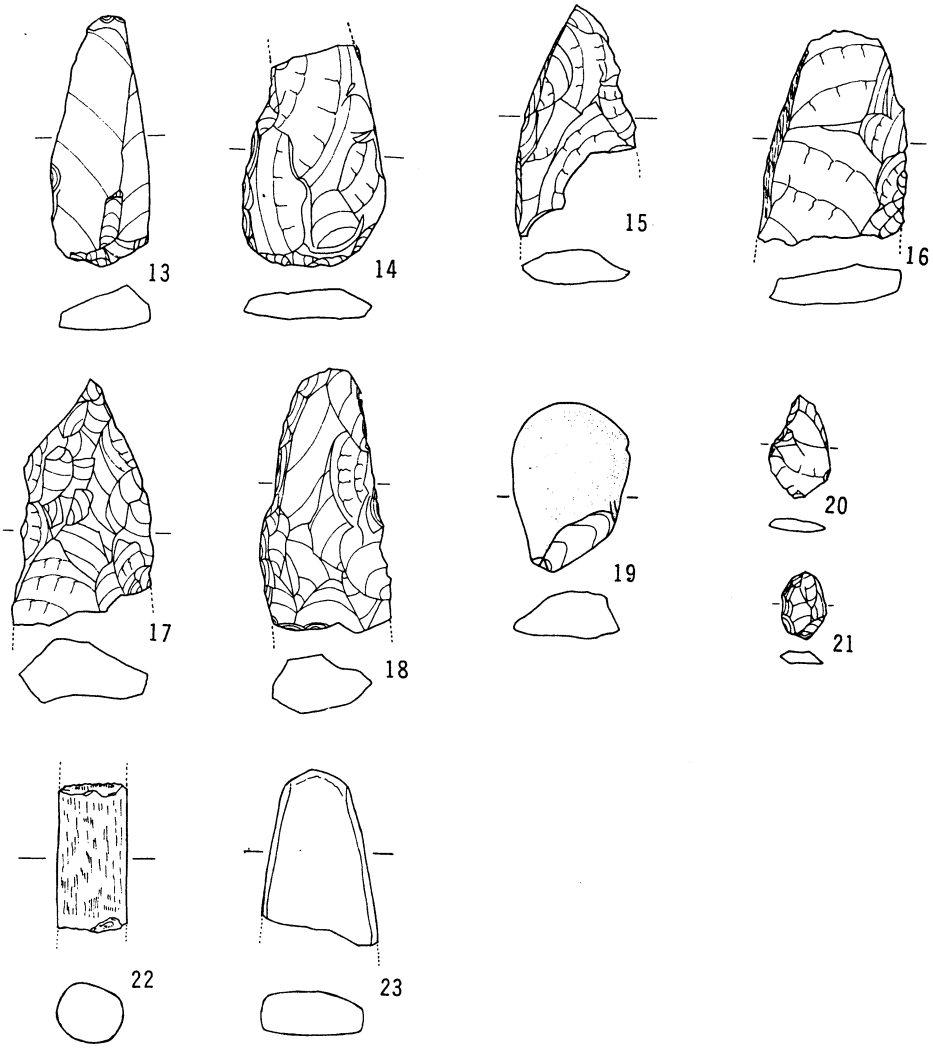


第9図の1　石器実測図

凹石は住居跡内の周辺部からである。また打製石器は炉跡の周辺部に所在していたことが認められる。　（田川幸生）

⑷　**古代住居址**（10図）

〔位置〕　A地区縄文住居址炉址中央部より40°北西約11 *m*離れた地点に位置し、標高は約

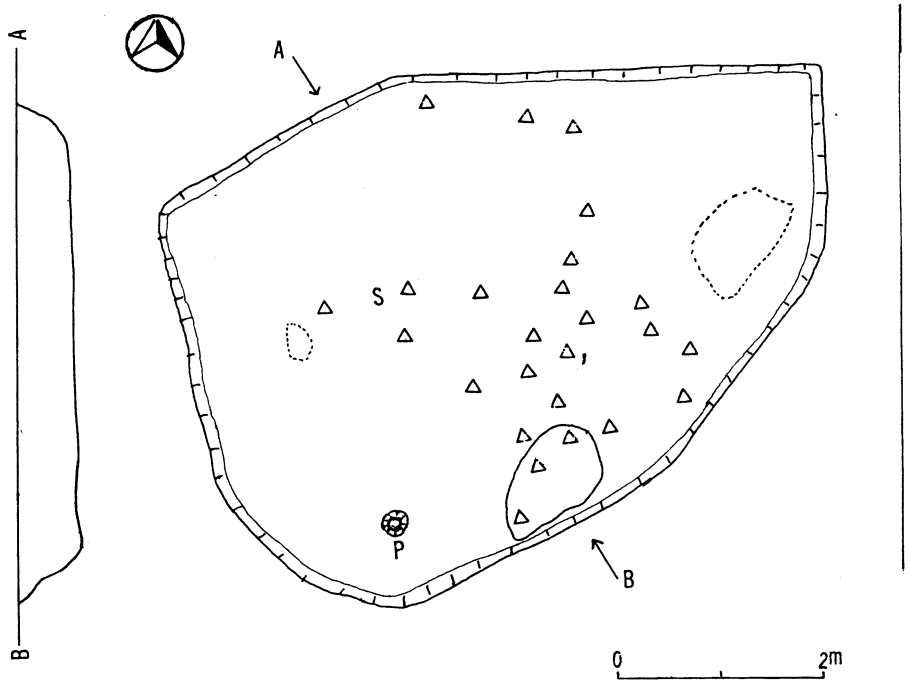


第9図の2. 石器実測図

385 *m*の地点である。表土の黒土層約50㎝下グリットE－14・H－14（3図） 面積は、約18 ㎡で、 この住居址内より土壙状遺構・柱穴状遺構と遺物は甕形土器・壷形土器・器台・坩その他の土器片が検出された。

以下これらについて説明したい。

〔形態〕 遺構この住居址は、大型機械による天地返しで破壊されたものとみられ、住居址のプランは確認出来なかったが、土壙状遺構・ピット土壙石側より約2 *m* 北東に、不定形半円の長径約1 *m*、最大幅約0.5 *m*の焼土1、ピットより北西約1.8 *m*離れた地点にも、長径約 40㎝最大幅25㎝の卵形の焼土2か所がある。焼土1・2から灰・木炭細片が出土。住居址内の床面と推定される所より土師土器片が検出された。



第10図　古代住居址実測図（A地区）

⑸ **古代土器**（11図）

⑴　甕形土器　住居址のほぼ中央部より検出。胴上半部が広く、幅22.4㎝ 器高が24㎝ 口径18㎝ 底部は5.3㎝で復元すればほぼ1個体分はあろう。器面全体の厚さは、0.5㎝～0.8㎝ 口縁部は30°角で外反しており、底部の厚さは 0.9㎝～1.3㎝で、底部外面は淡茶褐色。内面は黒色を呈している。口縁部付近はさゝら状工具で縦なで、他は斜めになでてある。外面内面共に石英小粒を含む。胎土焼成は良好とはいえずやゝもろい。色調は外面淡茶褐色、内面は黒色を呈している。

⑵　甕形土器　器形全体の約4分の1を残存、底部はなく、輪積工程にて仕上げされている。胴部最大幅17.7㎝器高残部12.6㎝口径は18.3㎝で、器面全体の厚さは0.5㎝～ 0.7㎝で、口縁先端部は約65°角で外反している。内外共に石英・砂粒・鉄分粒が含まれている。外面肩部に幅0.5㎜長さ1㎝の石1ケが露出している。内面はさゝら状工具でかるくなでてある。

⑶　壷形土器底部　器高は残存部7㎝口径は不明である。底部の径は5㎝で厚さは0.7～0.8㎝また胴部の厚さは0.4～0.5㎝、比較的薄手作りで、外面内面共にさゝら状工具で軽くなでている。胎土には石英砂粒が含まれている。焼成は良好とはいえずもろい。色調は明褐色内面は茶褐色を呈している。

⑷　壷形土器　胴下半部が残存するのみで全体の器形は不明である。底形は5㎝で底部の厚さ

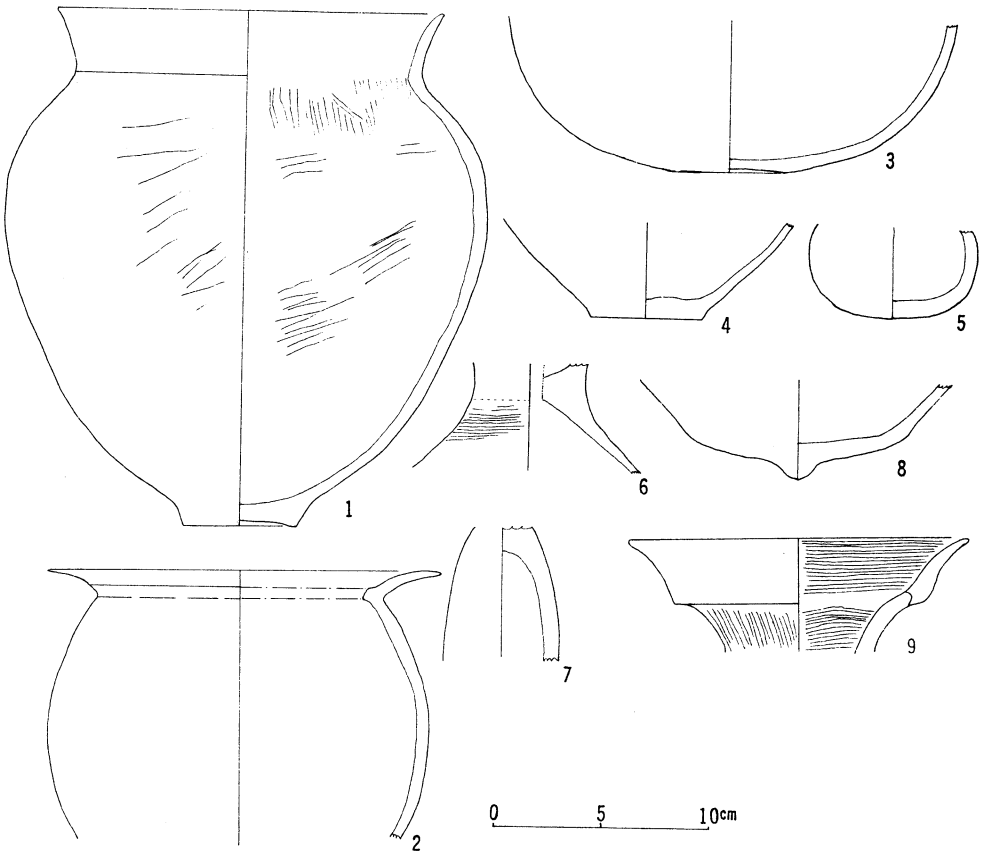
は1.2～0.6㎝外面内面共にへらなで胎土に石英雲母を含んでいる。胎土は良好であるが焼成はもろい。色調は内面外面とも薄茶色を呈している。

(5) 坩形土器　頸部以上はなく、器高残存部5㎝底部の厚さ0.9～1.1㎝、小形であるが割合厚手作りで、外面は極めて滑らかである。内面は手で強く押しなでた痕跡がある。胎土焼成は良好で色調は外面内面共に橙色である。

(6) 器台形土器　脚部のみ残存、器高6.4㎝底部の径10.5㎝、脚中央部に凹みがあり、更に1.2㎝の縦穴があいている。この穴は器受部と脚部をより密着させるためのものである。外面手なで、内面はさゝら状工具で横になでたあとがみられる。外面内面共に雲母砂粒が含まれている。

(7) 高坏脚部　残存部高さ5.5㎝脚上部2.8㎝で厚さは0.6～0.8㎝外面はへらなで後手なで、滑らかであるが内面は凸凹がみられる。外面は薄く塗彩されている。胎土焼成は良好である。

(8) 高坏　坏底部3分の1残存。底部中央部に凸出部がある。この凸出部は脚部とより密着させるためのものである。外面内面共に丁寧に手でなでてあり薄く塗彩してある。



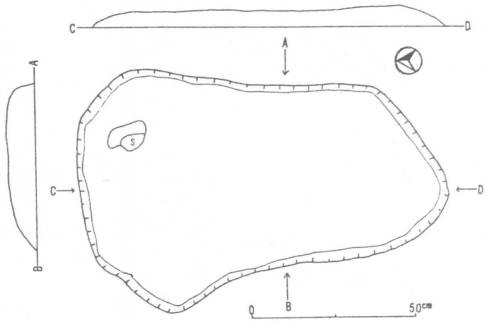
第11図　古代住居址内出土土器実測図

外面内面に砂粒鉄分粒が含んでいる。外面は茶褐色で内面は炭化して黒色を呈している。

(9) 壷形土器　二重口縁で土壙内より出土、口縁部5分の1残存、下段部さゝら状工具で外面斜めになでたあとがみられる。内面上段下段ともにさゝら状工具で横に薄くなでてある。外面内面ともに雲母石英砂粒鉄分粒を含んでいる。胎土焼成ともにやゝ良好である。色調は内外ともに茶褐色である。

〔土壙状遺構〕（12図）　住居址の南側に位置し、最長部1.1 m、最大幅0.7 mで 最深部は約60 cmで舟底形を呈していた。この中に3点の土師器片が検出された。この中の1点は二重口縁である。（11図9）

〔柱穴状遺構〕土壙の西側約1 m離れたところで、床面下深さ－20 cm、径は20×25 cmである。



第12図　土壙実測図（古代住居址内）

＜考察＞　今回の調査に於て検出された遺構は、土壙状遺構1、柱穴状遺構1であった。前述したように、大型機械による耕耘天地返しで遺構もかなり破壊されたものとみられる。住居址プランの全貌を確認することが出来なかったが、甕形土器、壷形土器、有段口縁、器台その他土器片が検出された。各々出土遺物の器形及び製作手法から編年の位置付けは、五領1式とみてよかろう。　（池田実男）

現地見学会

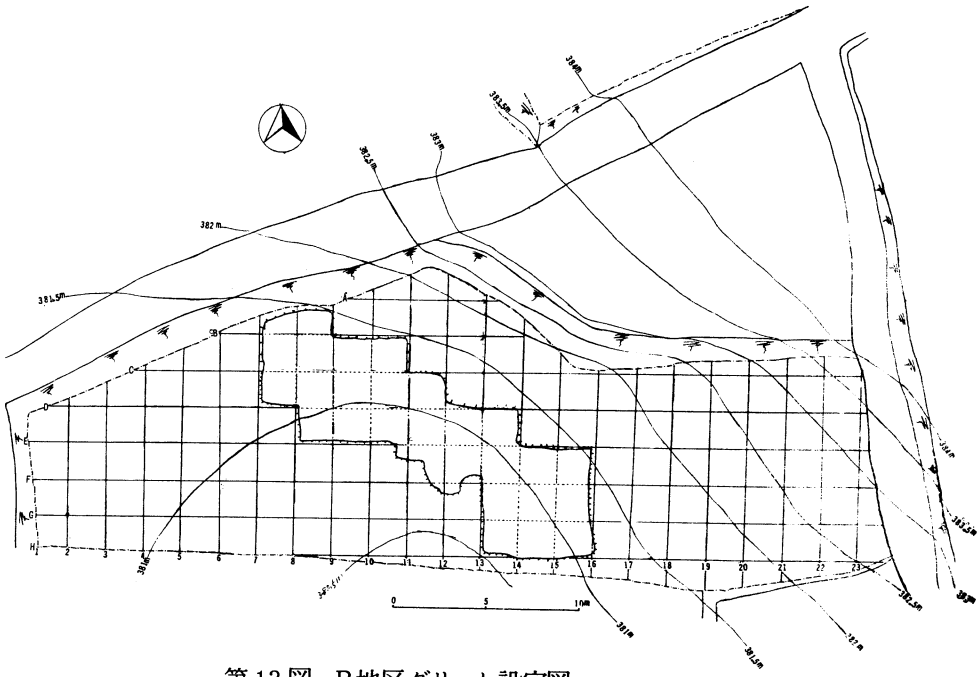
Ⅳ　B地区の調査

1.　遺　構

B調査地区は縄文A住居址より西北に約70 *m* の距離に所在し、南に開いて馬蹄形状を呈する丘頂部の起伏の基部に位置する。発掘調査面積は、約105 *m*² である。

この馬蹄形状の丘頂部には、住居址が点在すると推察されるが、A住居址を除いて現在のところ不明である。現在の馬蹄形状地形の凹状部分の落差は、2～6 *m* である。発掘所見によれば原地形は、V字形状を呈していたようである。火山灰土を含んだ黒色の堆積土（耕作土）は、50～60 *cm* の厚さで、下層が上部で0.5 *m*、下部で1 *m* の間層が遺物包含層で黒色粘土との混在層に土器片・土偶などが認められ、下部は、新期ローム層である。堆積土は、E13グリットより東方は薄くなる傾向がみられた。この様に遺物検出面は平坦ではなく、傾斜した面に等高線状に多く土器片が出土し、殊に土偶片は8 *m* 内外の範囲から大部分が出土した。

土器の時期別と層序の関係は、明確さを欠いており、縄文前期末葉の土器片が僅かに点在して出土する外は、縄文中期初頭から前葉にかけての土器廃棄の様相は、平和台パターンとして認識される。従って本炭片、骨片、焼土、柱穴、焼けた磨石や各種石器類が検出されたが他の中期初頭の遺跡、例えば、津南町上野遺跡[3]、岡谷市梨久保遺跡[4]の如く住居址は、検出されなかった。



第13図　B地区グリット設定図

またＥ11・Ｅ12グリットの深さ 75㎝の個所に阿玉台式の指圧痕文土器の底の欠けた鉢形土器が逆さに置かれた土壙状の遺構が確認された。

以上の如く位置、遺物の出土状態から、集落の特定の地域・場所であった可能性が大きいと考えられる。またＦ14グリットから検出された（22図の１）48の土器は炉体土器と考えられ、住居址の存在が推定される。今後は、層位のまとまりをもった土器群の把握が、緊急な課題として痛感され、今後の調査に期待したい。

2. 遺　物

(1) 縄文前期

(1) 第一期土器（縄文前期中葉）

今回の発掘では繊維痕のある羽状縄文土器片などは検出されなかったが、従来の姥ケ沢遺跡は神田禎治、神田五六氏の収集品から、関山式一黒浜式土器が出土すると認識され、昭和11年１月発行の第１次「信濃」に北信生のペンネームで郷土雑記として長丘村姥ケ沢の石器時代遺物として石器類の測図を載せ、繊維土器（繊維痕土器）の出土も記されている。これらは、昭和17年に藤森栄一氏の「北信濃縄文文化資料」（古代文化）にも紹介されている。昭和28年発刊の「下高井」では関山式土器の出土を記載している。昭和31年発刊の「信濃考古綜覧」では上原式として記載され、昭和56年発刊の「県史考古資料編」では、縄文前・中期土器・弥生中期土器の出土を記載されている。同じく昭和56年発刊の「中野市誌」歴史編前編では前記の資料から有尾期（黒浜式）を主体とすると記述されている。これは両神田氏の収集された資料は今回の調査でＣ地点とした場所よりの出土と考えられるので、関山式期から有尾式期（黒浜式）を姥ケ沢前期第一期土器として設定し合わせて研究史の課程を略述した。

(2) 第二期土期（前期末葉）

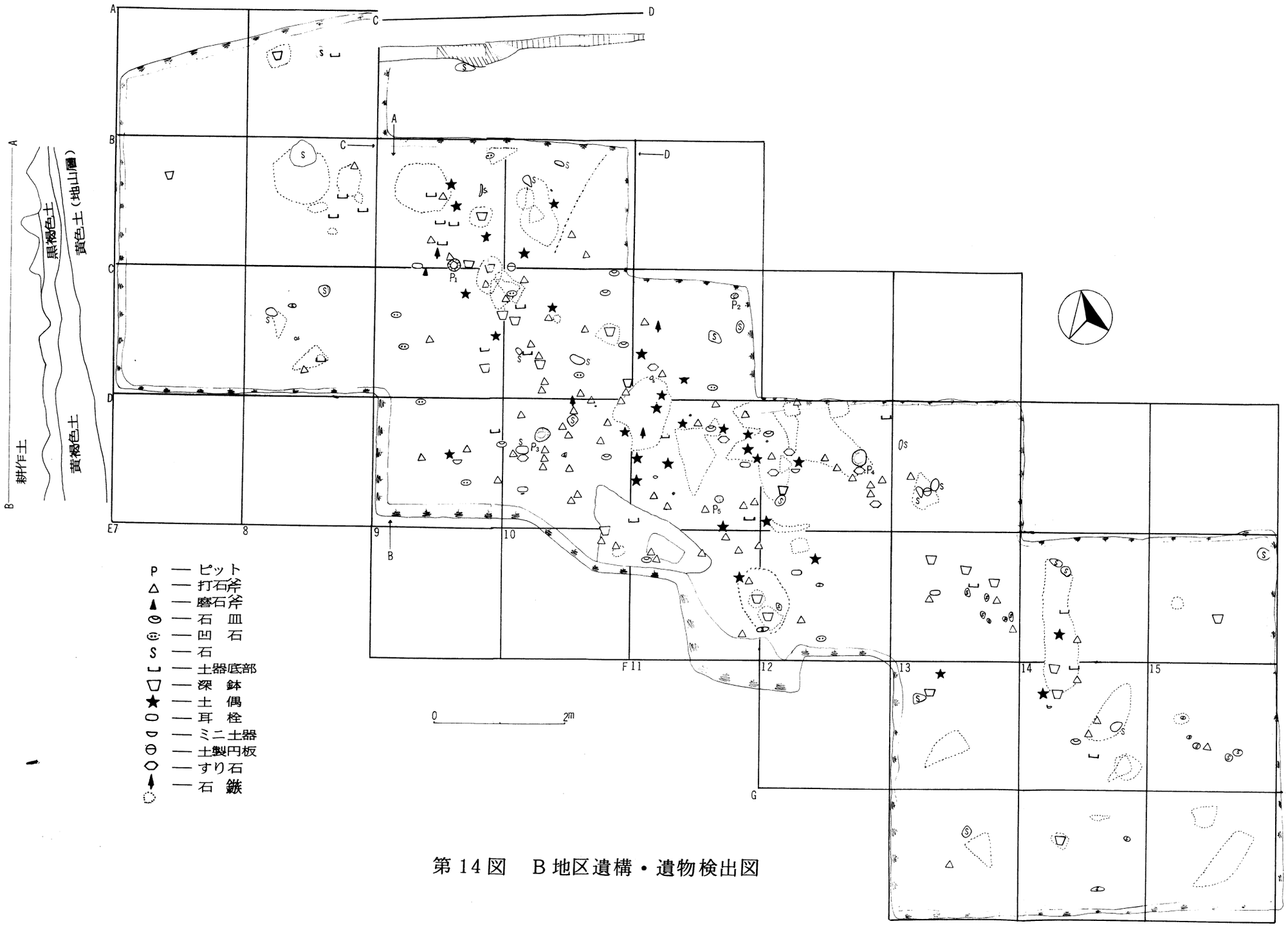
下島式（諸磯Ｃ式）→ 籠畑式（十三菩提式）

今回の発掘で検出された縄文前期末の土器片は、約50片で、器形が復原できる資料はなく、例外的に存在するとされる、縄文施文の土器片は調査者には摘出できなかった。

〔第１類土器〕（15図１～８）

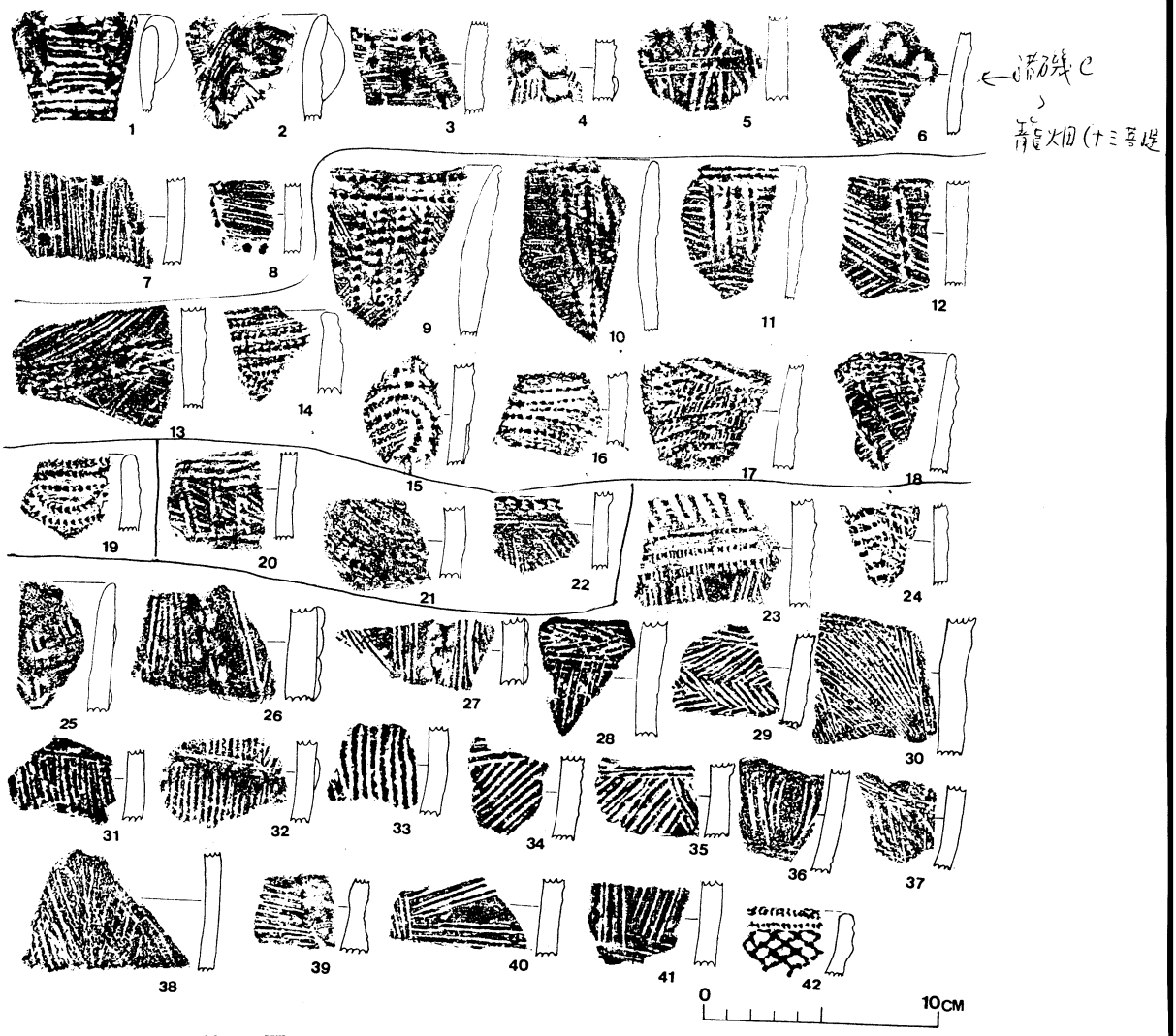
地文に沈線文があり、貝殻状の貼付文がつくものを第１類とした。１～２は口縁部に貝殻状の貼付がつくもので、２は貝殻状の部分にも沈線を引いている。１はチョコレート色、２は赤褐色を呈するが、ともに白色の岩石粉末を含有している。３は粘土を沈線の上に列点状に貼付した文様で内面は黒色を呈す。４は沈線の地文にボタン状の貼付と箆状工具の突刺文、５は突刺文のみ、６は突刺文にボタン状貼付文、７は半截竹管の平行沈線文に径0.4㎝～0.5㎝の円点のイボがつく、内黄褐色、外黒褐色で雲母微量、鉄分粒少量含有する。８は平行沈線文に爪形浮線文と径0.4㎝の円形の貼付が並列する上原第４類Ｂ種土器[5]と同種である。

〔第２類〕（15図９～18）



第 14 図　B 地区遺構・遺物検出図

平行沈線文の地文上にクリーム状の粘土を管の先端から押し出した施文手法の行われた[6]爪形浮隆起文（結節状浮線文）の土器を2類とした。浮線文は諸磯b式段階から存在し地文に縄文の無いのがc式段階の浮線文とされている。爪形浮線文は左から右へ、上から下へ押し引きされている。 9～11は口縁部破片で、波頂部のガーブはゆるい傾向にある。 14は隆線上に幅の狭い半截竹管で押し引きされている。 15は赤褐色の土器で幅太の竹管状工具で平行沈線上の隆線を爪形施文して曲線をなしている。 16は内灰色、外黒褐色の土器で細い隆線上を幅の狭い竹管状工具で爪形施文している。 17・18は黒褐色の土器で胎土に黒耀石の細片を含有しており、17は口縁部近くの破片、 18はゆるい波状口縁の土器で口唇部にも竹管状工具で刻み目をつけている。17・18ともに細い隆線に幅太の細い竹管状工具で列



第15図　土器拓影図

点状に押し引きしている。

〔第3類〕（15図19）

口縁部破片で赤褐色を呈し隆線上の竹管爪形文が幅広く1点の検出である。

〔第4類〕（15図20～22）

半截竹管の両端がやゝ尖った状態の工具（先割竹管）で押し引いた文様の土器である。

20～22は黄褐色の土器で胎土中、砂粒の中に鉄分の細粉末を含有している。20は平行沈線の地文の器面に前記の工具で刺突して押し引いている。21は竹管状工具の幅より広い隆線上を刺突を押し引いており、22も同様の土器片である。

〔第5類〕（15図26・27）

黄褐色の土器で胎土に砂粒の外、鉄分粉末を含み、地文の平行沈線にやゝ幅広い隆線に4類と同じ工具で段違いに刺突押し引いた文様の土器片である。

〔第6類〕（15図25）

黄褐色を呈する口縁部破片で径0.5～0.8㎝の円形貼付上を幅太の竹管工具を引いた「11」字状の文様で、山梨県花鳥山遺跡出土品(7)に似ており、c式段階の古い要素をもつ(8)土器片である。

〔第7類〕（15図23・24）

篦切浮線文の土器で23は赤褐色の土器片で砂粒の外、鉄分粉末を含み、器面に塗付した粘土で隆起線を作り篦で刻み目をつけた土器片で24は黄褐色の器厚0.5㎝の薄手な土器で文様は23と同じ手法の土器片である。

〔第8類〕（15図28～41）

条線文の土器で28は胎土に白色の岩石粉末を含み、黒褐色を呈する土器片で綾杉状と格子目状の文様の土器片で、29は胎土に鉄分粉末を含み、器面は篦磨きされた口縁部近くの破片で平行沈線と綾杉状沈線の土器片で赤褐色を呈し踊場式土器の胴部文様に類似している。30はチョコレート色をした大形土器の口縁部近くの破片で胎土に白色岩石粉末を含有し、方形の沈線内の左隅に斜線の条線を集合させている。31は幅広の沈線が縦横走する土器片で黄褐色を呈し荒い砂粒が見られる。32は黄褐色の雲母、砂粒の多く含んだ土器片で、隆帯上を平行文を1条引き上下に縦に竹管文を並列させた土器片である。33は黄褐色を呈する底部近くの破片で胎土に黒耀石粉末を含有し深みのある半截竹管文が並列している。34も同じような半截竹管文が並列している。35は口縁部近くの破片で文様は34と類似した土器片で29・31～35の半截竹管文の土器は、関東では諸磯b式に伴出する土器群にみられるが、姥ケ沢では本類に含めた。36は浅い平行沈線で長楕円の文様を描き、まわりを集合条線で囲み下に平行条線もみられる土器片で、褐色を呈する。37・38は黒褐色の土器片で、37は内面煤状の附着色を呈す。38は鉄分粉末を含有し共に集合条線の土器片である。39は張り出し底部の破片で横走の竹管条線の黒褐色の土器片である。

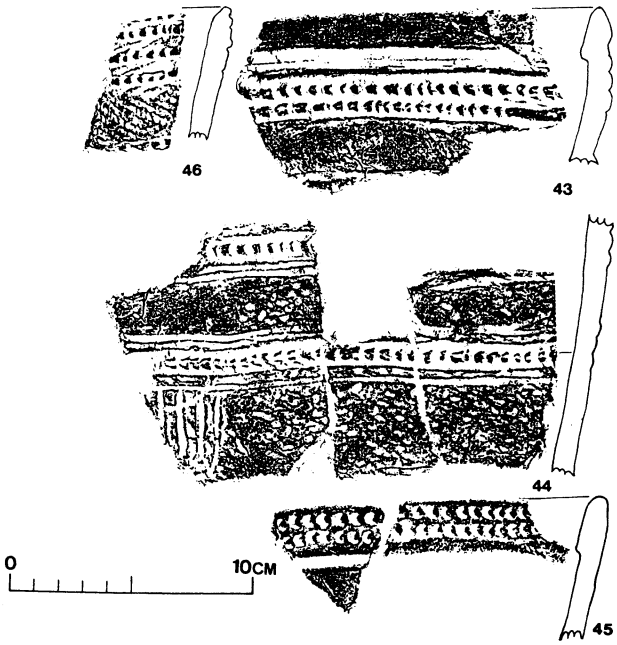
40・41は縦の横走の集合条線文の土器片で41は黒褐色の土器片で鉄分粉末・砂粒・硅石小片を含有している。

〔第9類〕（15図42）

口縁部の破片で赤褐色を呈して2条の竹管爪形文の下に粘土紐を斜格子状に貼付する土器（15図11）の頸部の斜格子文の前駆をなすもので踊場系の所産と考えられる。

〔第10類〕（16図43～46）

43・44は同体の堅緻な焼成の土器片で、大形の爪形文、U字文がみられ、地文の縄文は器面の乾燥が進行してから押捺回転されたものである。45は内面肥厚した口縁に2列の竹管爪形文を配し外面は無文である。46は縄文地文に浮線状の爪形文があり、口唇にも爪形文が施文された堅緻な焼成の土器片である。



第16図　土器拓影図

〔第11類〕（17図47～52）

半截竹管工具による施文の浅い土器を一括した、47・49は胎土に砂粒の多い土器で他は少ない土器である。47はU字状の平行施文、48はゆるい波状の口縁の土器で横帯楕円状、曲線状に描かれたもの、49は櫛歯状工具で施文した縦条線に横の条線のもの、51・52は隆起帯のみられるもので、50・52は縦の蛇行、52は網目状に施文されている。

以上の第10類、11類は他に類例に乏しく調査者の不明な判断により問題点も多いと思われるが、前期末葉形式に分類した。

〔第12類〕（18図53～61）

半截竹管による条線文の発達した、前期末葉と思われるものをまとめた。53は半隆起線の平行文内に三角形状に交互に斜状の条線、54は突起に縦横の条線、15は半隆起線に縦の条線、56は鍵状の隆帯上が斜状に刻まれて斜条線と縦横の条線のみられるもの、57は隆起線の上に握り拳状の突起があり、縦横の太い条線、58は53と同じ文様で口縁上にＲＬ縄文のみられるもの、59は口縁部の破片で横一線に対して多数の縦の条線の刻まれたもの、60は長方形区画内の斜状の条線に、1、2本の交差状の沈線のみられるもの、61は隆起線で方

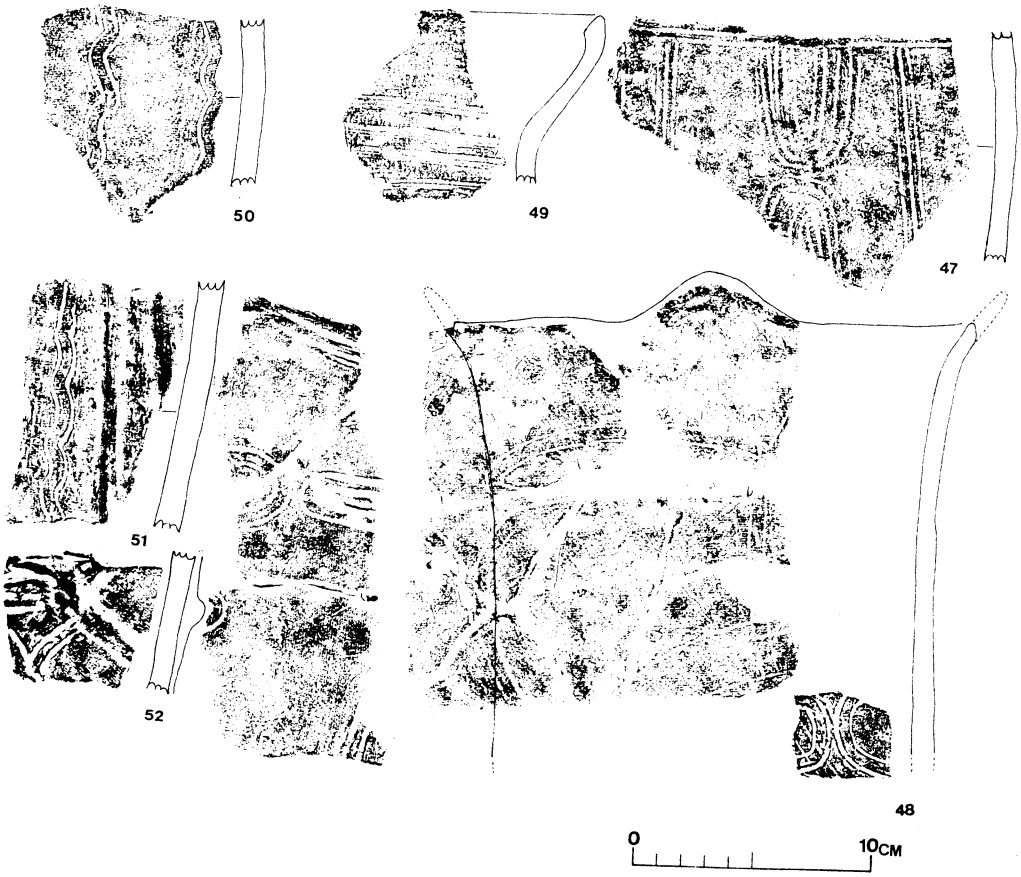
形区画された胴部の文様で内側も条線で方形に区画され、上部は縦条線のものである。

これらの文様は中期初頭型式にみられる隆起線、半隆起線文の源流とみられるもので 57 の突帯や、 61 の方形区画などや梨久保式の斜格子目文との関連を知る資料と考えられる。

考 察

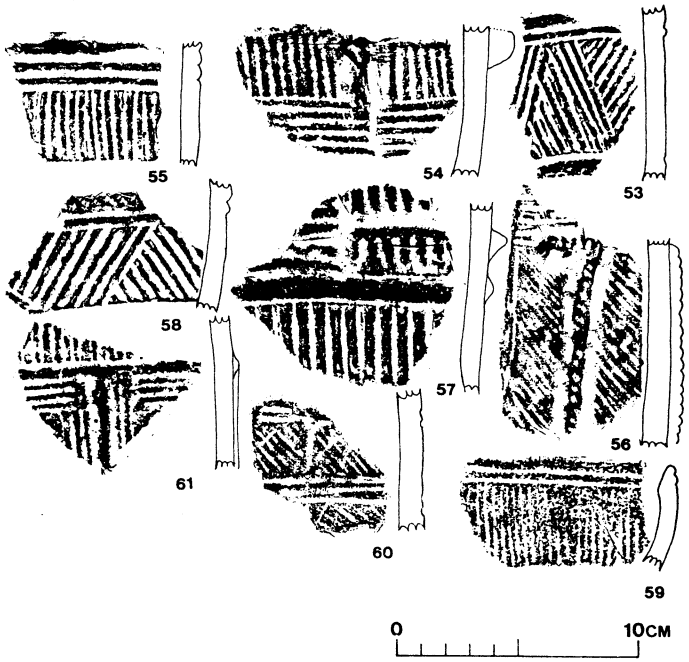
以上の土器片は、いづれも細片で多量の中期土器片に混在して発見され、層位的には最下層から出土したものであるが、器形の面と合わせて、猶不明確な点が多いのが惜しまれる。

こゝで該期の周辺の遺跡をみると、中野市立ケ花遺跡は本遺跡より直線距離で 4 km 上流で 51 年 4 月の調査では上原式（諸磯 b 式）、下島式（同 c 式）の遺物が確認されている[9]。 また南大原式（同 a 式）の標式遺跡の豊田村上今井、南大原遺跡は 1.3 km の指呼の距離に所在し[10]、ま



第 17 図　土器拓影図

た立ケ花遺跡と似た様相を示す。飯山市の大倉崎遺跡は 15.5 km の下流の左岸にあり[11]、諸磯式の遺跡が千曲川という共通したステージに立脚して展開されており、生業面から追求された神田五六氏の低地性集落と高地性集落のあり方をめぐる問題提起は学史的にも注目されている[12]。c式（新）の遺跡がことに長野県に多く発見され、本遺跡の様相も諏訪地方と共通した文化様をもち中部山地の前期末葉を知る上の知見に加え、下島式など諏訪地方に核をもった文化圏との交流が、中期初頭まで明確にされ、複雑な様相を示す。前期末から中期初頭への解明は、本遺跡と周辺地域の究明にかかっており、北信の縄文の編年に類例の増加の望まれるところである。



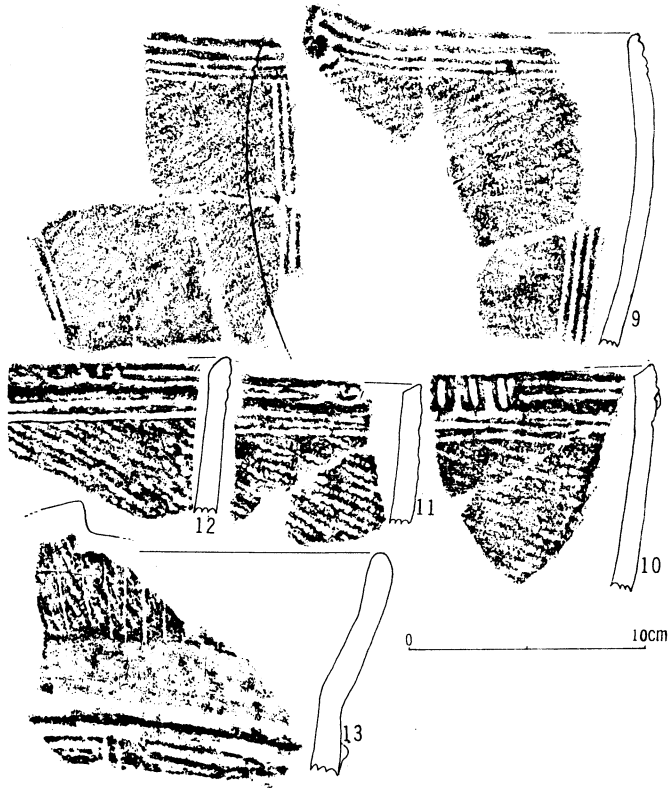
第18図　土器拓影図

(2) 縄文中期土器

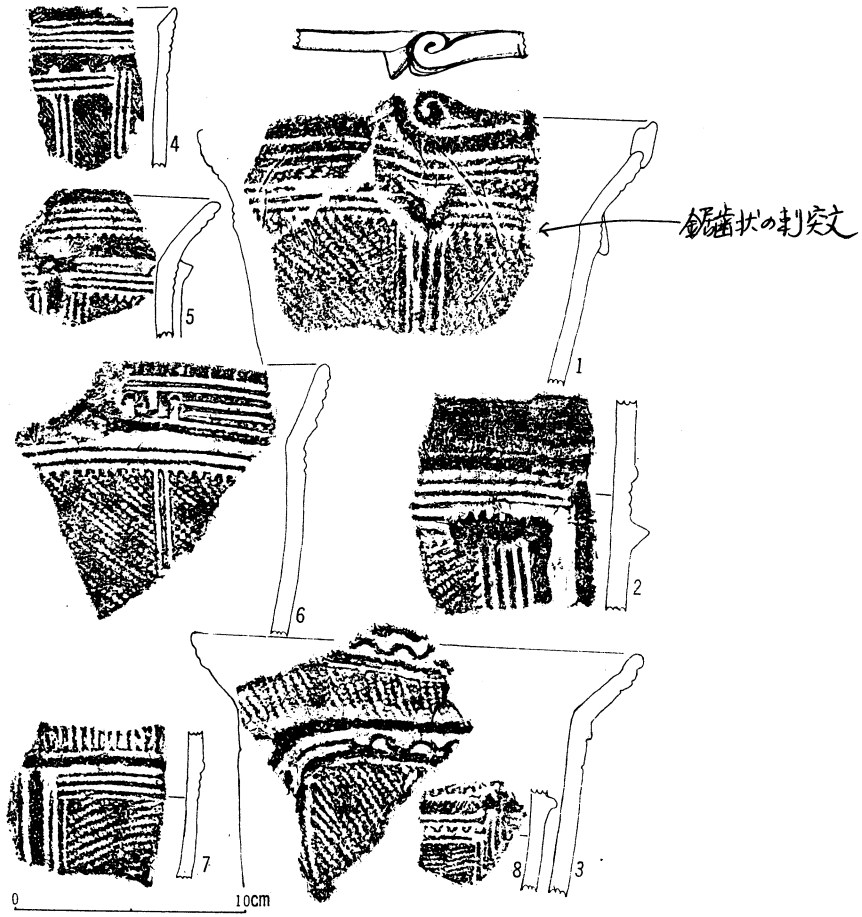
(1) 中期第1期土器

はじめに

北信地方の縄文時代中期の初頭～中葉の遺跡の発掘と報文は、56年発刊の長野県史考古資料編を参照しても類例が少なく、長野市松代町西条の稲葉遺跡[13]、埴科郡戸倉町蝶葉（ゆずるは）遺跡[14]、飯山市深沢遺跡[15]などで、上水内郡小川村筏遺跡は現在調査続行中で正式報告書に接していない。また深沢遺跡の研究概報もほぼ器形の判明した土器の説明だけで、出土土器の詳細は報告されず、県史に大要が記されているだけである。今のところ北信の縄文中期の編年は未開拓の分野で、今後の調査研究に負うところが大きい。姥ケ沢遺跡の縄文前期末は、中部高地の影響下に包括されていたが、中期初頭には北陸文化圏の強い影響をうけた在地の土器が出現し、そこに関東地方から、阿玉台式文化の強い影響をうけ、これは客体ではなく、融合された独自の文化相として現われている。これらは中葉まで関東地方や、諏訪地方とも文化の交流が、強くときには弱く現われているが、この地域に即した編年を組立てることが地域の研究者の緊急な課題と思われるが、浅学の者にとっては、至難の業で、たゝき台の捨石になればと、考察を試みた。大方のご叱正を得て正鵠を期したいと思う。



第19図の2　土器拓影図



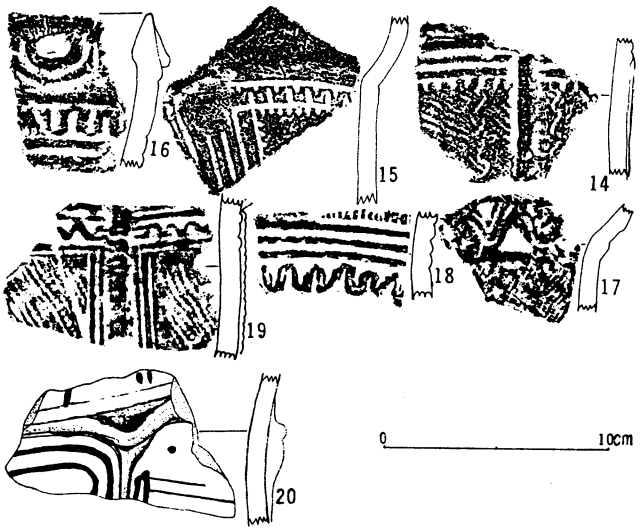
第19図の1　土器拓影図

≪第一群≫

五領ケ台式（梨久保式、九兵衛尾根Ⅰ式）の影響のみられる土器（19図の1～7）

1　頸部よりく字形に外反した器形で赤褐色を呈し渦巻状の突起を抱き合わせた口縁をもち、頸部にV字状の凸帯をつけ、胴部は半隆起線で方形区画され、鋸歯状の突刺文とＲＬ縄文で凸帯上も縄文施文されている。

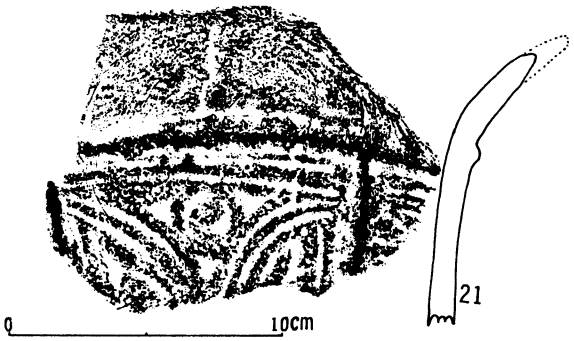
2　上部に無文帯があり、隆起線で方形区画され？　半隆起線と組み合わされ、握り拳し状の凸帯をもち、突刺文とＬＲ縄文の土器



第19図の3　土器拓影図

3　頸部で「く」字状に外反した器形で黒褐色を呈し口縁に上下交互竹管状工具の削りとり手法の文様がみられ、隆起線によって隅丸方形状に区画され、半隆起線と組み合わされ、区画内をＲＬ縄文である。

4　直立した器形の小形深鉢形土器で、口縁下に4本の竹管平行文、胴部は2本の平行文で、方形区画され、三角沈刻文がみられ、角部が三角に削りとられている。



第19図の4　土器拓影図

5　頸部よりつよく「く」字状に外反した器形で頸部から胴部に鉄釘状の隆起線をつけており、鋸歯状文、突刺文、交互突刺沈線などがみられ黄褐色の器面には雲母がみられる。

6　15に共通した点の多い土器で、頸部上の沈線に刻み目を入れており、頸部は 半隆起線、胴部は平行文で方形区画され、鋸歯状文、ＲＬ縄文のみられるものである。

7　胴部は隆起線で方形区画され、細い半截竹管（細隆起線文）が平行し、上半部にも並列し、区画内はＬＲ縄文を充塡している。

8　突起の形状は削落して不明だが、隆起線上は爪形文ｃが押引され、細隆起線で区画され交互突刺文、ＬＲ縄文のもの。

9　樽形状の器形で、胎土に砂粒の多い茶褐色から黒褐色の土器で、ゆるい波状の口縁から

「L」字状の垂下する隆帯があり、口縁部と胴部を細隆起線の平行文で方形区画してＬＲ縄文を充塡している。

10、11、12　内面に一方的に傾斜した口唇が特長で、沈線による口縁部の平行線に刻み目をもち、６の土器の頸部上の文様と一致する。

13　頸部に無文帯があり、胴部は半隆起線による方形区画と思われ、口縁部はＲＬ縄文の地文に縦の条線が平行し、口縁に段状の突起がみられ、緩い「く」字状の器形であり、10～13の胎土焼成は脆弱である。

14　縦の隆起線に横の半隆起線の方形区画で鋸歯状の突刺文、結節文（綾絡文）と縄文のみられるもの。

15　「く」字状の器形で、頸部の突起は削落して不明、箆がき沈線による平行文、連続突刺文、交互刻み目文の黄褐色の土器である。

16　口縁下に半円形の隆起線をつけ、頸部に交互刺突による山形連続文が、半隆起線で画されたもの。

17　「く」形の器形で胴部はＬＲ縄文で頸部から上は沈線で三角状に施文し、隆起の部分をつくりだし、基部に正三角形の沈刻、隣接部に逆三角形の沈刻のみられるもの。

18　竹管の平行文に削りとりによる山形文、縦の沈線のみられるもの。

19　隆起線上は、連続爪形文ｃで両側に沈線が、平行し細隆起線で方形区画し交互突刺文が横位にあり、区画内はＲＬ縄文の充塡された茶褐色の土器。

20　頸部から隆帯を鼻緒状（Ｙ字状）に垂下させ、胴部は隅丸方形に区画されると予察され１、２などの祖型となる文様と思われる破片である。

21　口縁が「く」字形に外反した器形で、波状口縁の器形と思われ、器色は黒褐色で胎土に砂粒多く雲母が多く含まれる。口縁部の縄文は僅かに残存が認められる。胴部は半隆起線で方形に区画され、沈線で円形をつくり、三方に三叉状の沈刻を於し玉抱き文様となってそれを沈線で囲んでいる。

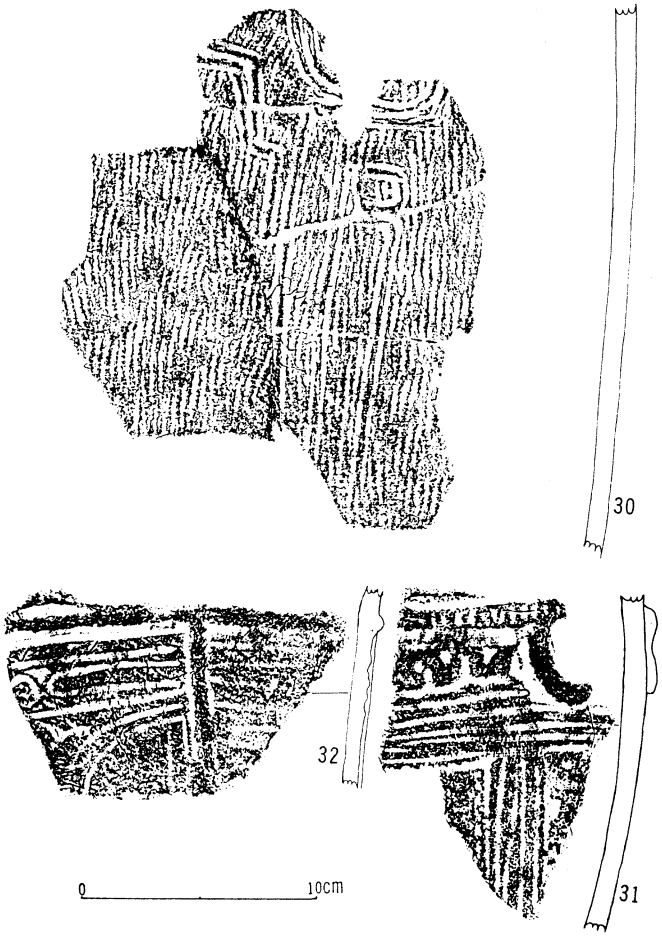
22　胴部、ふくらみ弱く、口縁部外反した器形で、口唇部にＲＬ縄文、頸部にかけて、半円の複合沈線で連孤して胴部は太いＬＲ縄文を押捺回転させている。

23　黒褐色の土器で、隆線で半円形に区画された口縁で、口縁に交互突刺文、隆線に並行した沈線があり、隆線上と区画内はＲＬ縄文が押捺回転されている。

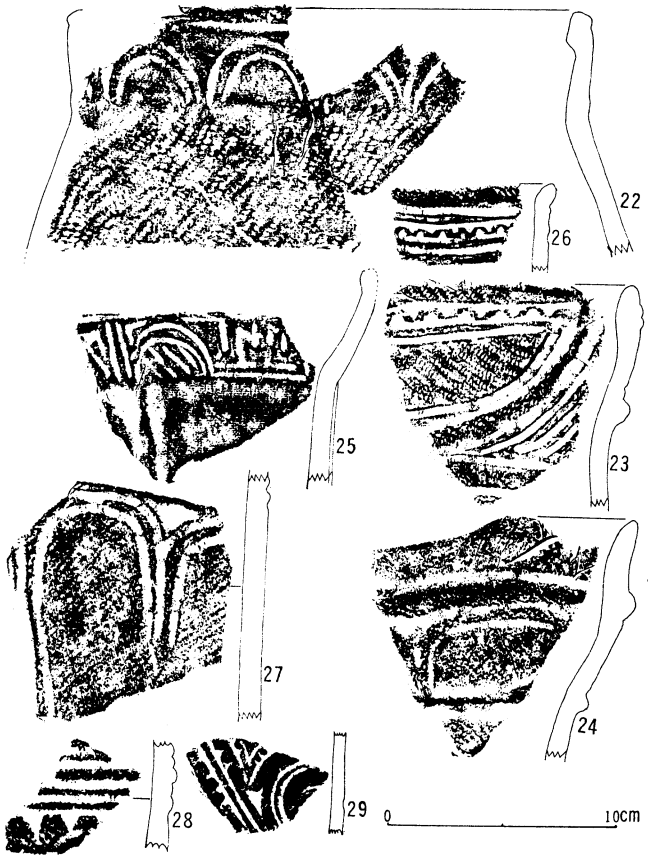
24　ゆるい波状の口縁で内湾しながら、外反する器形で、隆起線の中に半楕円をつくり、接点の空白部分を削りとって、ＲＬ縄文を施文されている。

25　「く」字形の器形で、頸部上に沈線で半円、斜状、平行、刻み目などを施文し胴部は隆起線で、方形区画され、中は無文帯である。

26　口縁にＲＬ縄文を於し爪形文ｃの２条間に交互突刺文の円筒形の小形深鉢破片である。



第19図の6　土器拓影図



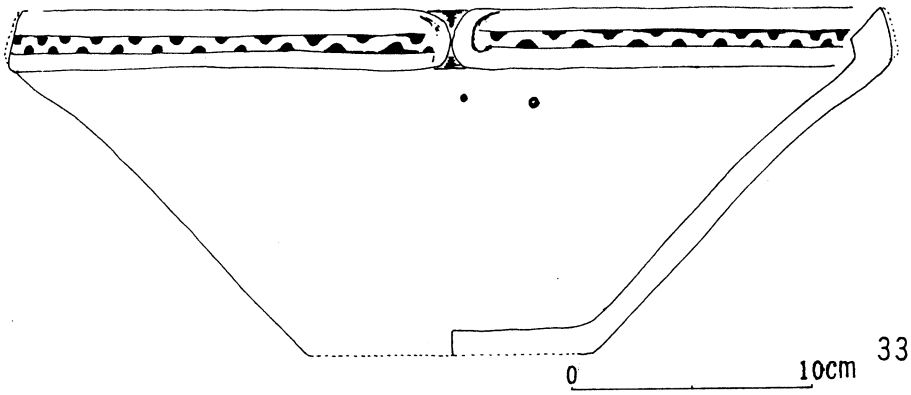
第19図の5　土器拓影図

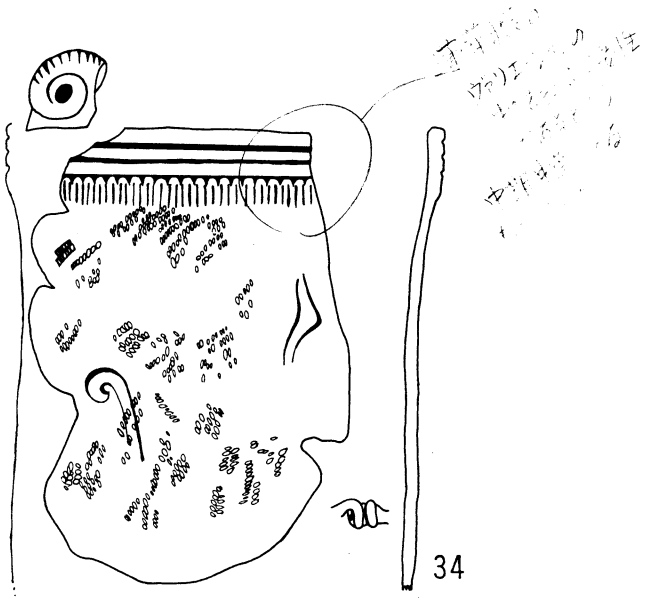
27　沈線によるＹ字状文の胴部破片で、接点を三角状に削りとっている。縦位の長楕円内に三角状に削りとって、縦位の長楕円内にＬＲ縄文を押捺回転させている。

28　半隆起線、細隆起線の平行文に三角沈刻文を組み合わせている。

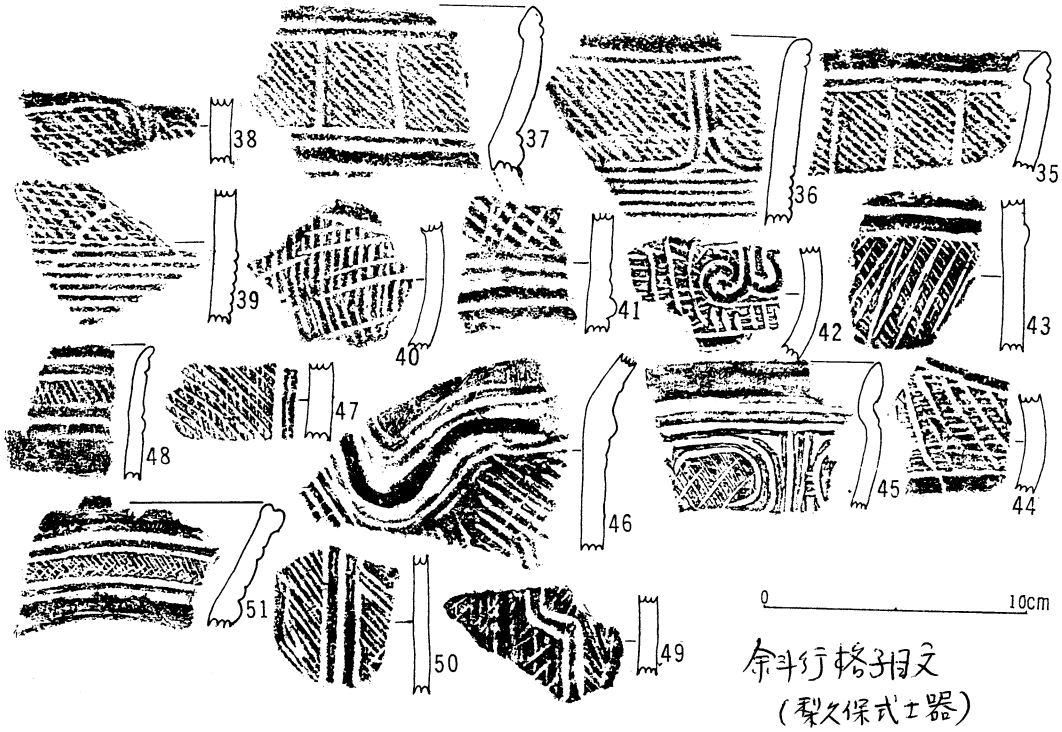
29　黒褐色の薄手の土器で、沈線上に三角の沈刻を連続させたり、空間に三叉状の削りとりのみられる土器片である。

30　黒褐色で砂粒が多い胎土で、焼成の脆弱な土器の胴部破片である。縦位の縄文の地文に





第19図の7　土器実測・拓影図



第19図の8　土器拓影図

浅い竹管平行文で曲線、直線、鍵状に描かれている。

31.32 は21と同じ胎土焼成で、31は隆起線上に刻み目を加えて「L」状に垂下して縦横の沈線が、並行して方形区画をなし、隆起線との間に三角沈刻のみられるもの、 32は方形区画の隆起線内に沈線で直線、半楕円、孤状に描かれた土器である。

33　口径36㎝、底径12㎝、高さ14.5㎝、器厚1㎝の法量で、底部より大きく外反し、口縁部が、僅かに内彎する器形で胎土に砂粒多く雲母が見られる、赤黒褐色を呈する浅鉢形土器で、胴部に補修孔があり、底部は削落し、文様は、口縁部のみで、楕円区画の中を交互刺突文で、山形状に連続させている。口縁部の器形は踊場系で、文様は五領ケ台式Ⅱb式の影響をうけた土器である。

34　口径約28㎝、器厚0.8㎝、胎土に砂粒多く脆弱な筒形をした深鉢で、口縁下に幅太の半隆起線が、3条平行し下に三角印刻文、箆切細線文を於し、口縁部に巻貝に似た突起をもち、箆切細線されている。胴部は蕨状、く字状、捻り状の隆起線をつけ、上からLR縄文を於している。在地の伝統（広義の北陸文化圏）に梨久保式（五領ケ台式）の影響のみられる土器である。

≪第二群≫

35～51　は、梨久保式土器に見られる斜行格子目文の集成である。（19図の8）

35. 37 は同体の破片で、半隆起線内に左傾斜行する格子目文で、沈線で縦に区画し、口縁部の器形は「く」字状を呈する。

36　同じく口縁部破片で、半隆起線を平行文で「U」字状に区画して、左傾斜行格子目文を充塡している。35～37は砂粒の多い黄褐色の土器である。

38. 39 楕円区画内の左傾斜行格子目文に、細い平行線を引いたもの、細隆起線と組み合わされている。

40. 41 沈線で、左右傾の斜行格子目を描き、半隆起線と組み合わされている。

42　細隆起線で、鼻緒状に施文し、横線を先に引き、縦線を後に引いた格子状文と組み合わされている。

43　半隆起線文と左傾し右傾の斜行細線で、菱形格子目文が構成されたもの。

44　半隆起線内の、平行沈線に左傾斜行沈線の於されたもの。

45　竪緻な焼成の茶褐色の土器で、口縁部は肥厚して、無文帯である。沈線で方形区画された中に複合の沈線で楕円状に描き中に斜行格子目文が描かれ、片側の楕円上には刻み目がみられる。

46　黒褐色の「く」字形に外反した器形の土器で、U字形に連なる隆起線、それと平行する半隆起線、細隆起線による左傾斜行格子状文に沈線で右傾斜行格子状に引かれたもの。

47　細隆起線と縦の沈線に左傾斜行格子目文の引かれたもの。

48　細隆起線内に左傾の格子目文の薄手な土器片。

49　半隆起線と竹管平行文に平行と斜行の格子目文の沈線がみられるもの。

50　縦の半隆起線内に左傾の格子目文の沈線が、みられるもの。

51　合わせ状の口唇で、「く」字状に外反する器物で半隆起線、細隆起線を平行させ、沈線の斜格子目文を充塡させている。

考　察

まず器形からみると、深鉢形土器は、「く」字状に外反した器形のものが多く（1. 3. 5. 15. 17. 25. 46）、直上した口縁の器形が円筒形のもの（4. 10. 26. 34. 48）、内彎しながら、たち上がった器形のもの（13. 16. 23. 24. 35）、樽形状器形（9）などで、この外、A住居址下層出土の11号土器は口縁部が、キャリパー形で、33の浅鉢形土器と同じく踊場以来の伝統の器形と考えられる。また22の如き甕形状のものは、やゝ後出的な感じをうける。口縁部は繁縟に飾られるものと簡略なものに大別される。（口縁部集成図35図参照）胴部の文様は、方形に区画され、4分割されることが多い。沈線文もこの期の特徴と考えられ、21. 31. 32は古く、22. 25. 27は新しい要素が加えられたものと考えられる。また縄文も多く使用され、これは別に集成図を作製した。隆起線、半隆起線、細隆起線に篦がき沈線のものは、上浅野遺跡[16]、豊野町出土の土器[17]などと共にこの地域の土着の土器と思われるが、石川県珠洲郡内浦町

松波の新保遺跡[18]　例をみると半隆起線上に密な爪形文ｃを押し引きしており、姥ケ沢遺跡の半隆起線のみとの相違がみられるが、該期は、中部圏と北陸圏は一体の関係にあり、結束（交流）がかたいとの指摘[19]もあり、両者の細分類は不可能であった。後章の述図の新崎式の拓影図として掲げたものと岡谷市梨久保遺跡[20]出土土器にみられる、 細い篦がきの格子目文との分離注出も同様に不可能であった。古く石川県新崎遺跡の土器が、五領ケ台式に似ているとの指摘が、高堀勝喜（昭25）によってなされている。三角印刻文4. 28. 29は五領ケ台式の古い部分に相当し交互突刺文3. 18. 19. 23. 26. 33も五領ケ台式の特徴的な文様である。 22. 25は文様が九兵衛尾根式に似ているが断定はできない。三角刻文（鋸歯状文）は前葉までの姥ケ沢の特徴的な文様である。また平行沈線に直角に刻み目を入れる6. 10. 11. 12も同様である。前期末以来、姥ケ沢中期第１期の土器は北陸文化圏の伝統の中にあって五領ケ台文化圏の影響をうけて、同じ影響下にある梨久保式や、九兵尾根式とは違った独自な文化相を持っており、北信地方の時代性、地域性の把握の確認作業が、望まれるところである。また後章の阿玉台式の影響をうけて、様相が変容する課程の究明も今後の課題と思われる。

中期第Ⅱ期土器

≪第三群≫　（20図の１～２）

20図１～44は、縄文、結節文（綾絡文）、 撚糸文などの集成で姥ケ沢遺跡の縄文中期初頭から前葉の土器の文様であると思われる。

1　結節文と区画される平行文に刻み目のみられＬＲ縄文施文されるもの。

2　Ｄ字状文が浅く押捺され、不明瞭な文様で、胎土に安山岩粉末が混入されたもの。

3　阿玉台式にみられる隆帯間に結節文とＲＬ縄文のあるもの。

4　折り返し状口縁で、口唇上にも縄文押捺され、ＲＬ縄文と結節文のもの。

5　結来のある羽状縄文で、胎土に繊維痕のみられない、口縁部破片。

6　ＲＬ縄文と結節文。

7　折り返し状口縁で、胎土に繊維痕のみられない、口縁部破片。

8　隆起線にＲＬ縄文と結節文。

9　ＲＬ縄文に結節文が、２条平行したもの。

10　ＬＲ縄文にガーブの少ない結節文。

11　縄文の施文方向が、一定でなく（樹枝状）結節文のあるもの。

12　隆起線と樹枝状の縄文、結節文。

13. 17　羽状に押捺回転された縄文。

14　折り返し袋状口縁で口縁はＲＬ、以下ＬＲ縄文に結節文のあるもの。

15　ＬＲ・ＲＬの縄文のもの。

16　肥厚した口唇に縄文が押捺され、隆起線内にＲＬ縄文のみられるもの。

18　ＲＬ縄文と結節文

19　横位の隆起線とＬＲ縄文。

20　口縁部内面が、厚く折り返し状の口縁にＬＲ、以下横位（樹枝状）縄文と結節文。

21　口縁部は、ＲＬ、以下ＬＲ縄文の断面形が、握り拳し状を呈するもの。

22.　20と同じ口縁の形状で、折り返し部分はＲＬ、以下ＬＲ縄文施文。

23　ＲＬ縄文が、口唇と器面が一体となって押捺回転され、結節文のあるもの。

24　隆起線とＲＬ縄文と結節文。

25　３条の沈線とＬＲ・ＲＬの縄文施文のもの。

26　乾燥のすすんだ器面に、押捺回転されたと思われるＲＬ縄文。

27　器体下半部の破片で、隆起線上に押捺回転されたＬＲ縄文に下部はＲＬ縄文と結節文のみられるもの。

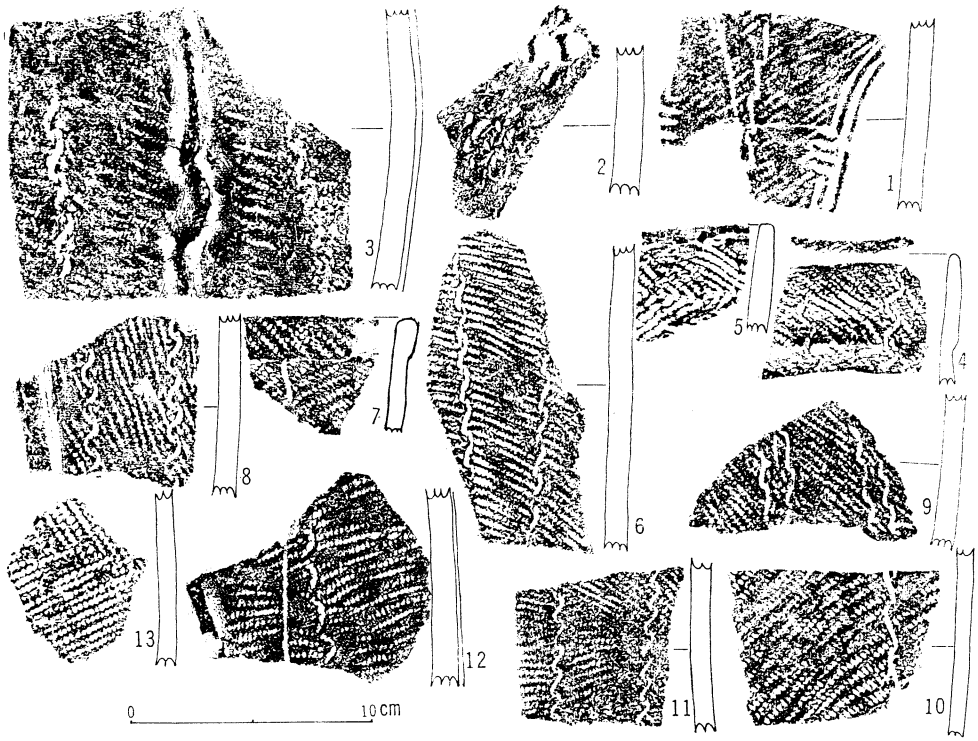
28　半隆起線にそって刻ざまれた三角列点文とＬＲ縄文に結節文。

29　隆起線の両側に平行する細隆起線とＲＬ縄文の器形下半部の破片。

30　隆起線と縦位の縄文施文。

31　原体の太いＬＲ縄文と結節文。

32　結節文とＬＲ縄文。

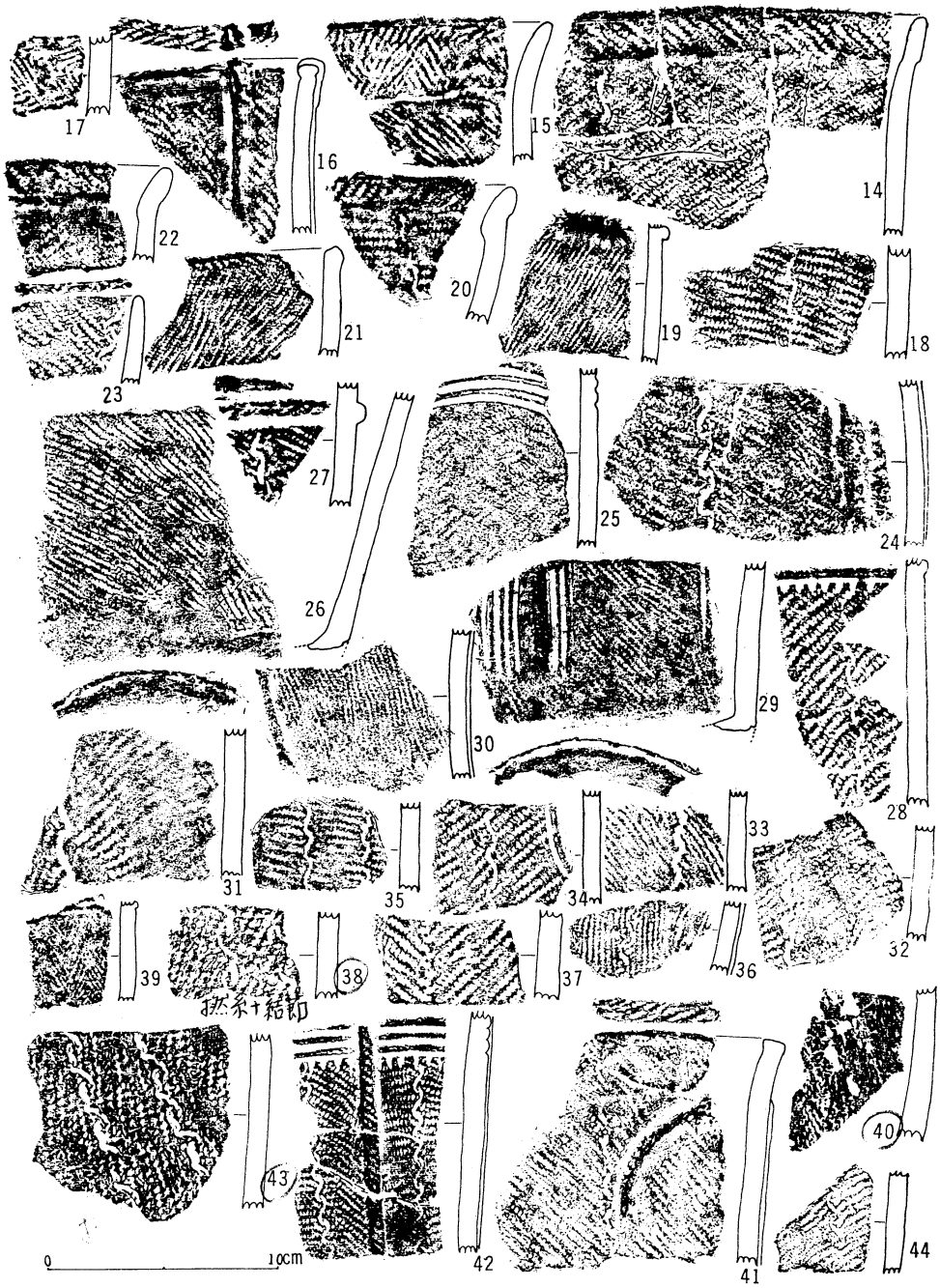


第20図の１　土器拓影図

33　結節文とＲＬ縄文。

34　竹管平行文とＬＲ縄文と結節文。

35　樹枝状の縄文施文で、結節文の平行するもの。



第20図の２　土器拓影図

36　隆起状に縦位の縄文で、結節文のあるもの。

37　結束のある羽状縄文が、縦位に押捺回転されたもの。

38　撚糸文に結節文。

39　半隆起線に羽状に押捺回転された、原体の細い縄文。

40　青白色の器色で撚糸文のもの。

41　ㄱ形口縁で、口唇上は、ＬＲ、胴部の隆帯上にＲＬ縄文施文で、結節文のあるもの。

42　横位の半隆起線と三角印刻文（鋸歯状）縦位の隆帯上はＲＬ縄文で、間は樹枝状の縄文と結節文。

43　撚糸文と撚りの弱い縄（原体）の結節文。

44　ＬＲ縄文と曲線の結節文。

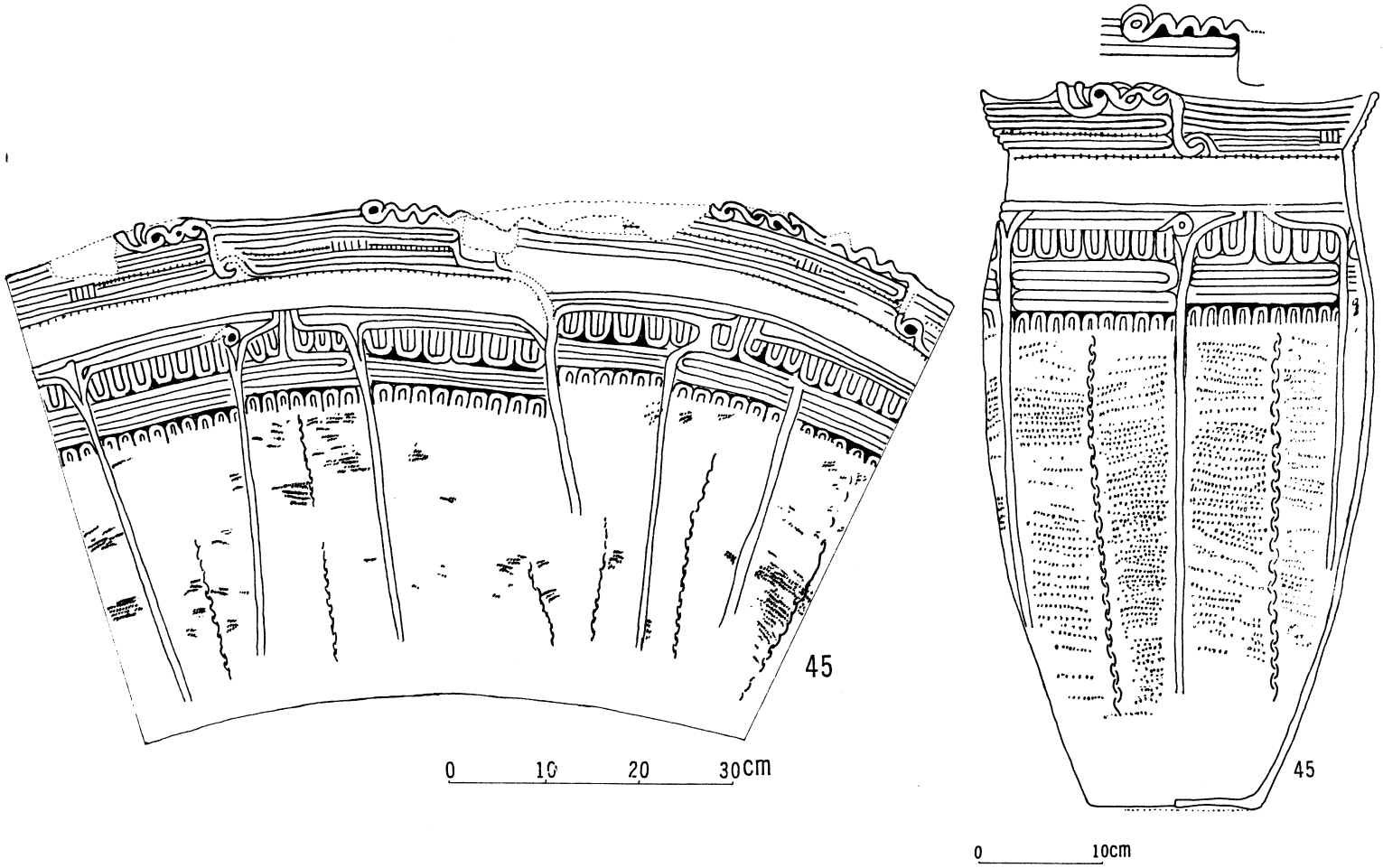
小　結

縄文は単節の原体が使用され、結節文も同じ原体を使用して、結節部のみを回転施文している。後章の阿玉台式の指圧痕文にも、施文されているのがみられる。縄文の押捺回転方向については、特に傾向は見出せないが、折り返し状口縁の土器は、口縁と胴部が、逆方向に施文され、縄文と結節文の組み合わされた文様である。また、結節文と縄文は、胴部の文様帯として施文されている。

この結節縄文は、関東の中期前半に使用され、五領ケ台の文様の一つの特徴とされ、下小野式にも影響を及ぼしている。同じ影響下の梨久保式には、帯状施文例がみられるが、姥ケ沢ではみられない。また新潟県津南町（千曲川下流、信越国境）上野（いわの）遺跡では、僅かの出土例が報告されている[21]。

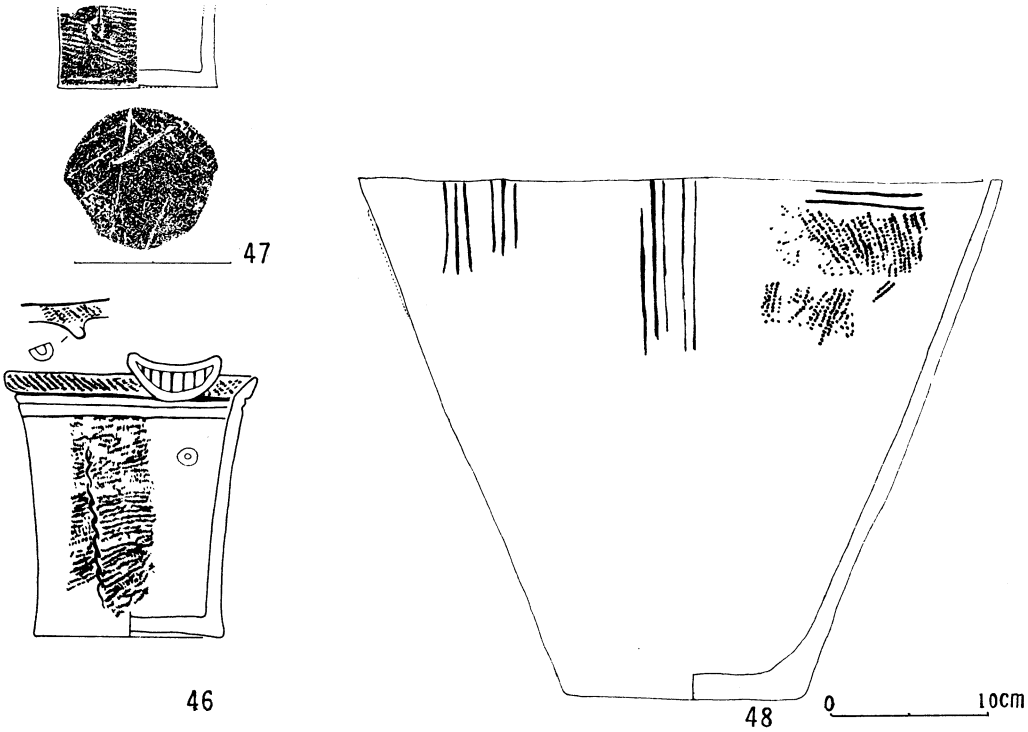
また北陸文化圏、富山、石川県方面に多いとされる該期の撚糸文について、摘出に務めたが、38. 40. 43の3例に過ぎず、結節文と逆転関係にあり、地域差として考えられる。また羽状縄文は、姥ケ沢では、初頭期に使用されたと考えている。

45　(21図)(B9.10)(出土グリット以下同じ)口径32.3㎝、底径14㎝、高さ51㎝、器厚0.9㎝の赤褐色(煉瓦色)の大形の深体で、胴部は砲弾状を呈し、口縁部は「く」字状に外反する。文様体は、口縁部文様帯と、胴部文様帯に分かれ、その間に無文帯がある。口縁部には、粘土紐貼付の突起が4箇所あり、蛇を連想させる意匠とS字状（唐草文様）の意匠が組み合わされ頸部には、継ぎ手文に、横位の半隆起線、刻み目文、突刺文などで構成されている。胴部文様体は上半部と下半部に分かれ、無文帯の下より、垂下した隆起線により6分割される。上半部は半截竹管による、大きいU字状文と逆位になった小さなU字状文が並列され、その間を半隆起線を平行させている。胴下半部は、樹枝状の単節縄文が施文され、隆起線間の中心に、結節文が縦位にみられるが、この部分は磨滅が著しい。U字状文は剣野E式[22]に、結節縄文は、前述の如く五領ケ台文化圏の中部山岳地帯にみられる文様で、両者の接点の



第21図　土器展開図

器形 2類と同じ型式のものと考える（中期 第Ⅱ期に分ける）.



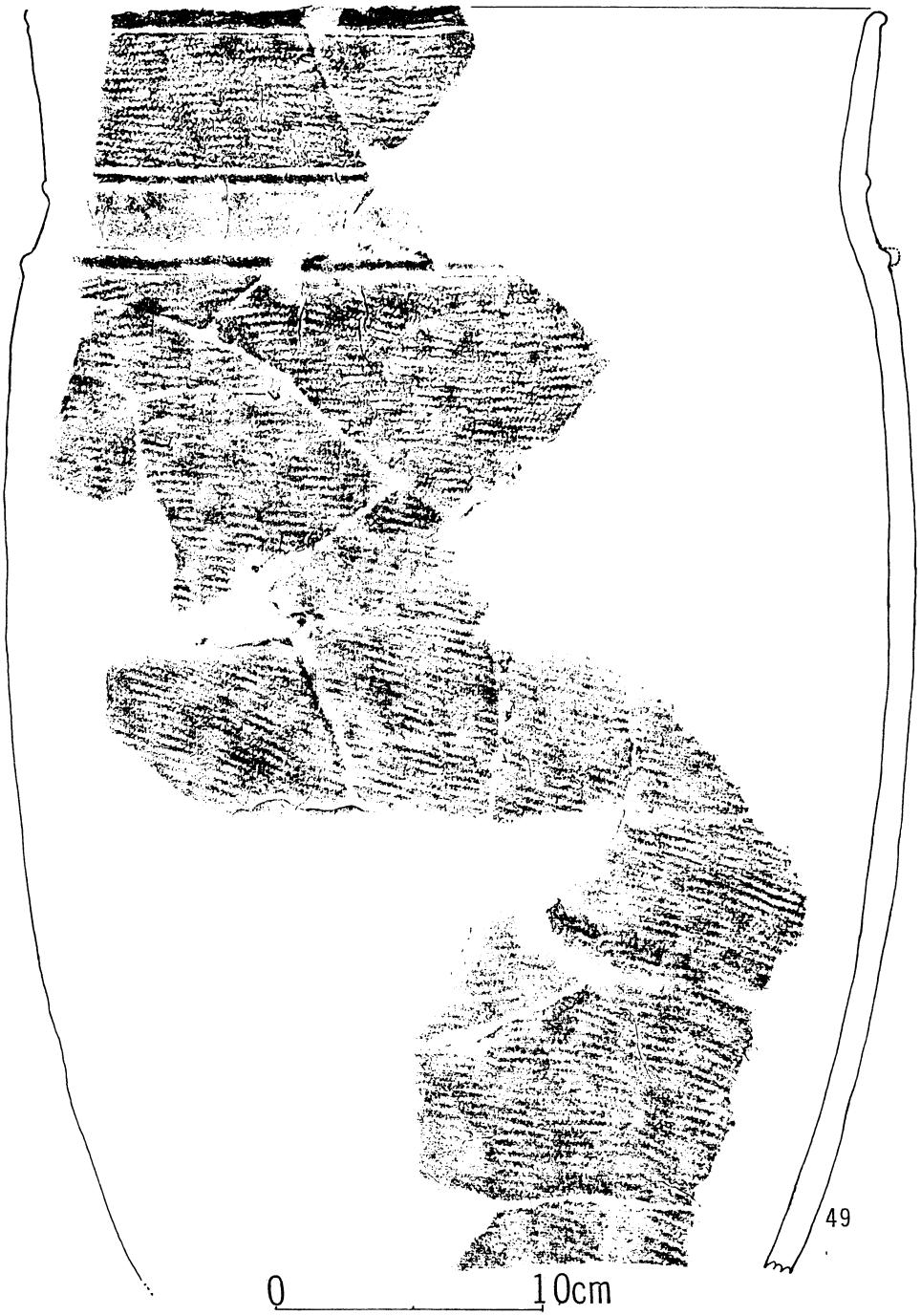
第22図の1　土器実測図

特色ある土器で、深沢遺跡出土のＮＯＩ土器[23]（県史考古資料編　深沢遺跡７の土器）と類似点の多い土器である。

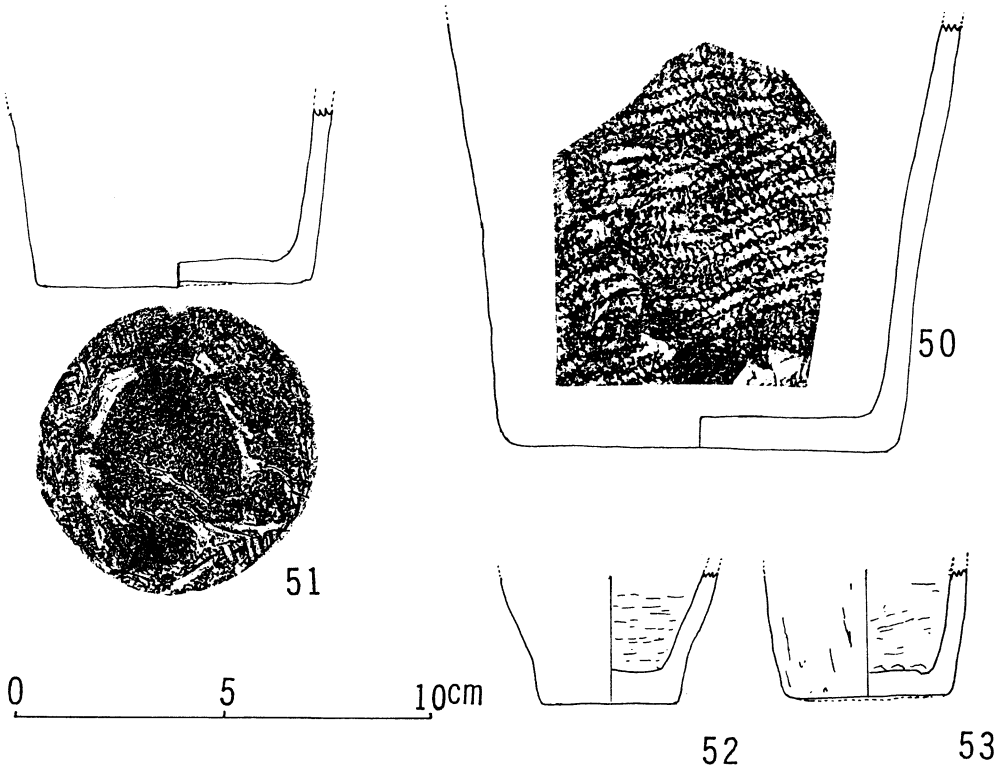
46　(22図の1)(ＢＥ13)(グリット名) 口縁上端部で外反した円筒形の器形で、張り出し底の小形深鉢で(口径16.5㎝、底径12㎝、高さ16.5㎝、器厚0.9㎝) 焼成は、堅緻で黒褐色と赤褐色を呈する。内面は篦磨きされ、胎土には砂粒が多く含まれている。口縁に半月状の突起と巻貝状の小突起が、相対して附加され、半月状の突起には、半隆起線で縁どりされ、中に縦の半隆起線が６条引かれている。口縁部と胴部の文様帯は、２条の半隆起線で分離され、口縁部は、ＲＬ縄文が施文され、胴部は樹枝状に似た縄文施文で、結節文が６条均分されている。胴部に２個の補修孔がみられる。

47　46と類似した器形、文様で、底に木の葉の圧痕がみられる。

48　(22の1図)(ＢＦ14) (現存高さ34㎝、口径42.5㎝、器厚１㎝) 底部より、直線に外反した器形で、胎土には砂粒多く含み、赤褐色を呈する。口縁は擬口縁で、もとは垂直にたちあがる口縁部であったと思われる。隆起線が２条、対称に４ケ所垂下し、その間を沈線が３本組で垂下したり、横位になったりして地文の縄文は、ＲＬ・ＬＲに押捺回転されているが、ほとんど削落して不明の部分が多い。器内面は、黒褐色の部分がみられ、折捐部の形状や、２次焼成のみられる点から炉体土器として使用されたと思われ、所属時期は、



第22図の2　土器実測図



第23図　土器実測図

中期前葉に比定したい。

49　(22図の2)(B.D 13)(口径31㎝、高さ推定50㎝)

黄黒褐色を呈する土器で、焼成堅緻で、口縁上と頸部の2条の半隆起線と、縄文で文様構成され、頸部は無文帯である。頸部の半隆起線の上に間をおいて、長さ4.5㎝、幅1㎝の突帯が附加されている。

50　(23図) L R縄文のみの土器で、口縁部は失われ、底部は、火熱をうけて削離面が多くみられる、赤黒色の土器

≪第四群≫

無文の土器

51　(23図) 底部に網代痕の残る、無文の土器

52.53　(23図) 上半部の失われた、無文の小形の深鉢形土器である。

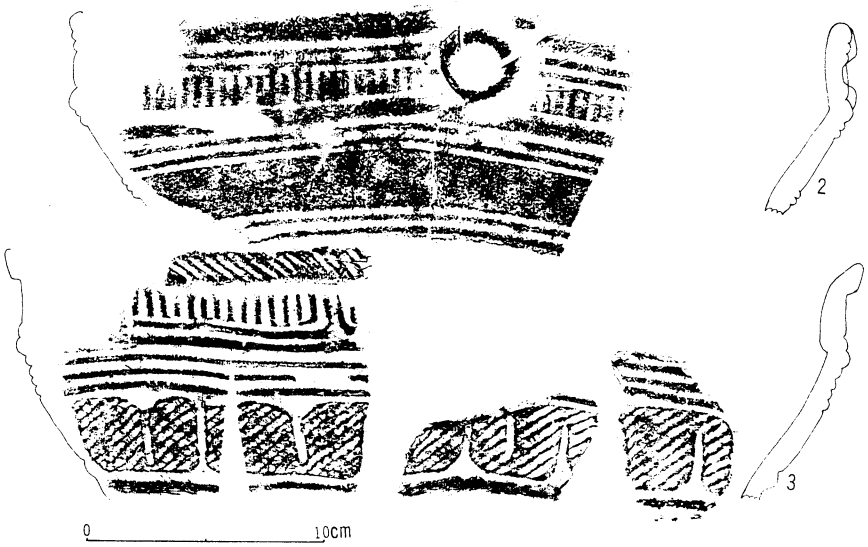
姥ケ沢遺跡は、全時期を通じて有文、無文土器の割合は、無文が10%以下の存在であると観察される。

≪第五群≫　(24図)(25図)(26図)(27図1～3)

隆起線、半隆起線を盛用し継手文、渦巻文、連子状文、U字状のみられる土器を集成した。

第24図　土器実測図

胎土赤色、雲母混入せず。



第25図　土器拓影図

1　（B 9）（口径25.5㎝、残存高さ26.5㎝、推定高さ32㎝、底径推定12㎝、器厚0.6～0.7㎝）焼成堅緻で、赤褐色の土器で、器形は、外傾して直線でたちあがった胴部で、頸部が、「く」字形に外反し、口縁下で内折して、2段口縁状をなしている。口縁には、入字状突起の退化したものと、蛇を連想させる、波うって、大きな目玉の突起が対になっている。口縁部文様帯は、横位の4条の半隆起線（半截竹管文）と口縁の1条の半隆起線の間に、縦位の半隆起線を並列させ頸部の横位の5条の半隆起線の間は、RL縄文を充填し、胴部は、継手文で縦位に4分割している。継手文は、基隆線が、5条の半隆起線をつきぬけ、これに2条或いは3条の半

第26図　土器拓影図

隆起線を平行させて垂下し、途中で、継手状に組替えて垂下し、半円の同心文が附加されている。また4分割のうち、特に広い区画に半円同心文が、上向きになった下に、同心円文と2条の半隆起線を垂下させ、正面を強調した？ともとれる。これらの半隆起線は、コンパスを使用した如く、均整がとれており、飯山北高校保管の深沢遺跡出土の類似土器の文様より、洗練されて傑出している。また継手文は右きゝの人の描き方と、描線の流れから観察される[24]。 器形については、A地区11号、12号土器と同系の踊場式の系譜を引く後出のものと考えている。

2　1と類似した器形で、大形深鉢の口縁部破片である。（25図）黄褐色で胎土に金雲母がみとめられる。口縁の下に円輪の突起をつけ、隆起線に2条の半隆起線を組み合わせ、その間に縦位に格子状に、半隆起線で施文し頸部上には、無文帯をつくっている。

3　チョコレート色の土器で、口縁にＲＬ縄文帯をもち、下に格子状文から変化したと思われるW字状の連子文となっている。2つの土器の無文帯の部分は、この土器では、ＬＲ縄文帯で、上下より沈刻、削りとられている。

器形は1と同じ形態である。

4　口縁部が、僅かに外反する器形で、胎土には金雲母が含まれる。文様は口縁部にＲＬ縄文帯、連子状文、半隆起線、隆起線で構成される。（26図）

5　入字口縁で隆起線、半隆起で構成された文様の土器。

6～9　半隆起線、隆起線の多用した文様の土器である。

W字状文（3.4）は、半截竹管で、蒲鉾型に盛りあがった隆起線、半隆起線で構成され新潟県南部や、富山県魚津、桜峠遺跡[25]、 出土品にも見られ、これら第五群の土器の文様はこの期の北陸文化圏北より地帯の代表的な施文法と考えられる。

10～16はU字状文の集成である。

10は内面に煤状炭化物が附着した黒褐色の土器で、波状口縁の下に動物意匠ともとれる。菱形の大きな突起があり、口縁下にU字状文がみられる。

11　ＲＬ縄文帯、半隆起線の平行文、U字状文、突刺文で構成される。

12　隆起線と半隆起線、細隆起線で構成されている。

13　U字状文の上下組み合わされたもの。

14　間に3条のU字状文、隆起線、半隆起線、ＬＲ縄文帯のもの。

15　横位のU字状文、突刺文、半隆起線のもの。

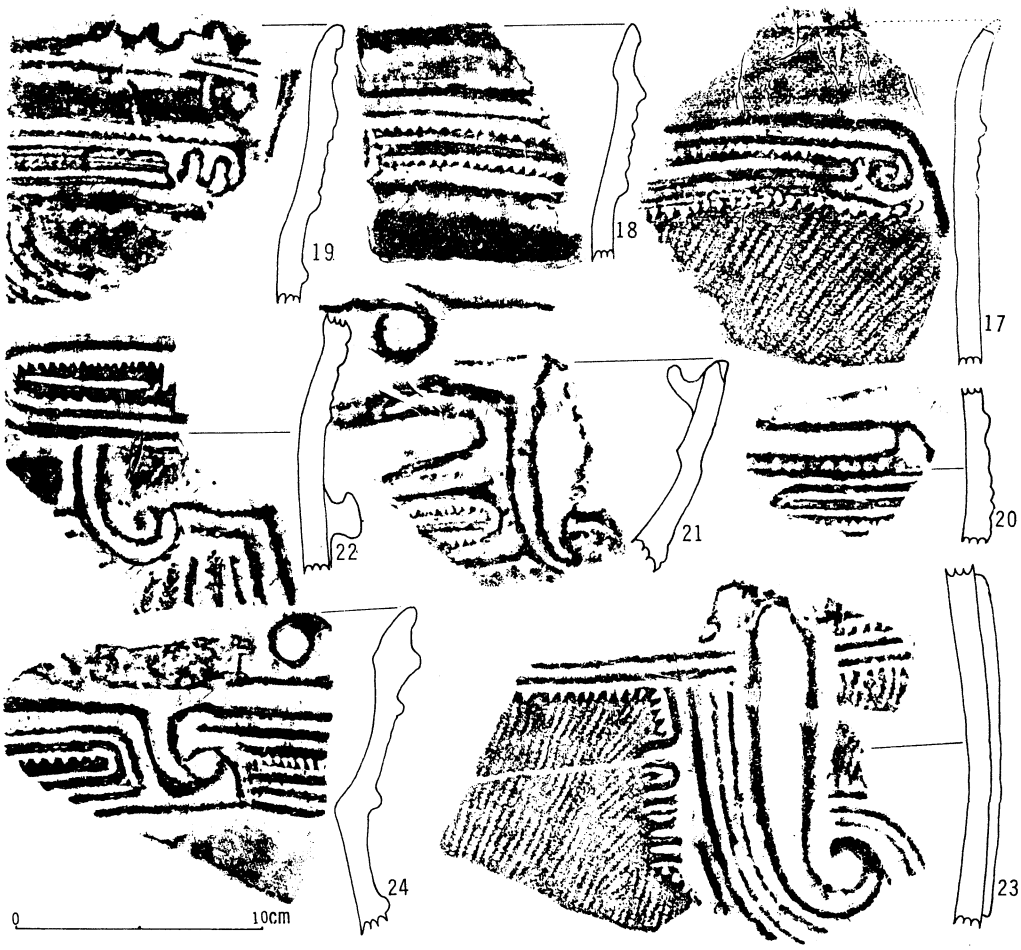
16　赤褐色の土器で、間に2条のU字状文様が長くのび、隆起線との三角形の部分が、削りとられている。

U字状文は10.12の如き細隆起線によるものから、 16の如き隆線の発達したものがあり、新保遺跡[26]や、剣野E地点遺跡[27]にもみられるが、姥ケ沢遺跡の例示した中

には、これらのものより、沈刻の蓮華文とも通ずるものをもっている。

15～38図は継手状渦巻文の集成である（27図1～3）これらの土器は突刺文と縄文を伴っている。

17　黄褐色の焼成の土器で、器形は、直上し口縁で催かに外反している。半隆起線で左巻きの渦巻をつくり、縁を突刺文で飾り、中をＬＲ縄文で施文している。

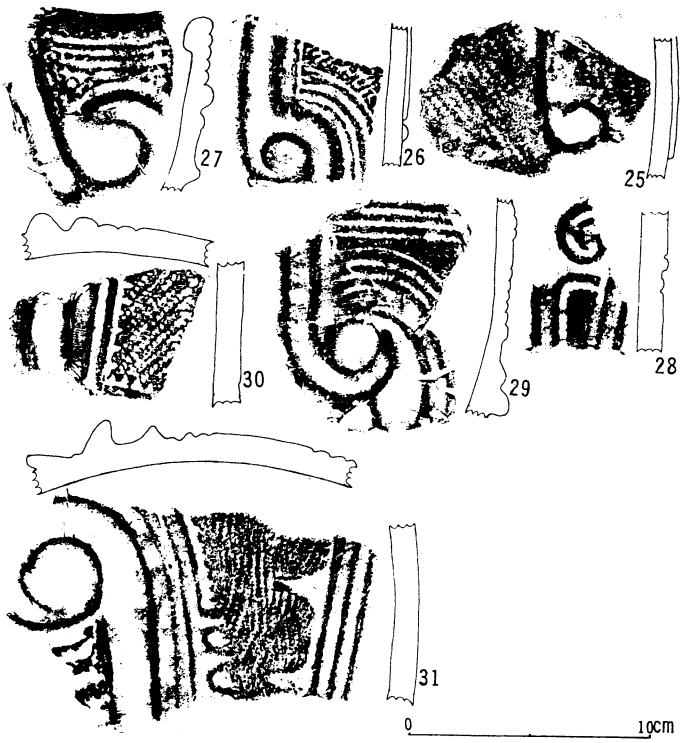


第27図の1　土器拓影図

18　渦巻はみられないが、半隆起線の間に突刺文を平行させ、縄文帯のみられないもの。

19　粘土貼付による、小波状の口縁で、半隆起線が半截竹管によらず、箆おこしによって描かれ、突刺文、交互突刺文がみられ、隅に渦巻文がみられる。第五群の土器に比べて稚拙の文様構成で、朔古の様相をもっていると考えられる。

20　突刺文と箆おこしの隆起線と竹管の半隆起線で胎土に金雲母がみられる。



第27図の2　土器拓影図

21　口縁内側に盃状の突起を附加し、その部分より、箆おこしの隆起線の楕円の区画、突刺文、紐手状の隆起線のみられるもの。

22　2本単位の隆起線の楕円区画、縁どりした突刺文、2本の渦巻の隆起帯が、突帯をつくり冂形に垂下している。突刺文は杉葉状を呈している。

23　2条の隆起帯に3本の半隆起線の伴った渦巻で、横向きのU字文、縁の突刺文、区画内のＬＲ縄文きどの大形深鉢形土器の破片。

24　口縁に加飾の円輪がみられ、ほかは無文帯で、渦巻きと細隆起平行文と突刺文がみられ口縁部の形態は、欠けて不明である。

25　ＲＬ縄文に隆起線の紐手状の渦巻文の土器片で、上野(うわの)遺跡[28]に完形品がある。

26　赤褐色の焼成の土器で、隆起線の渦巻と細隆起線が伴いＬＲ縄文のみられるもの。

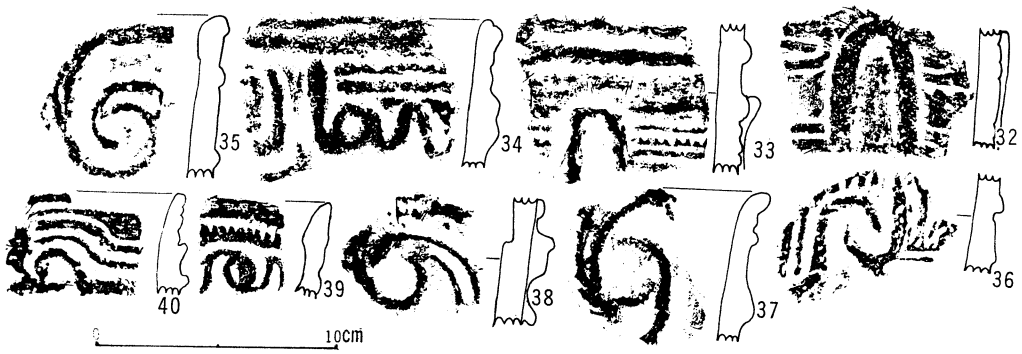
27　隆起線の渦巻に細隆起線が、縦に描かれた線は、ほとんど消えて、横の細隆起線が強調され突刺文もみられる、口縁内側に肥厚した口縁部破片。

28　半隆起線の渦巻き、沈刻などのみられる破片。

29　赤褐色の焼成で、太い隆起線に半隆起線が同調し、胎土に金雲母がみられる。

30　29と同体かと思われる、隆起線のみられるもの。

31　隆起線の断面が、三角形状に隆起した右巻渦状文で、半隆起線を伴い、区画内のＬＲ縄



第27図の3　土器拓影図

文に、三角沈刻文がみられ小形のΩ字状文もある、大形深鉢の破片。

32～40（27図の3）渦巻文の類で、32半隆起線の楕円区画にΩ状の隆起帯、33隆起線にΩ字状文、34渦巻きに波状の隆起線と並行の半隆起線のみられるもの、36箆おこしの隆起帯と沈線で、隆起帯上にＲＬ縄文の押捺されたもの、35.37～40渦巻文の破片。

第三群45、第五群1の土器は、姥ケ沢の中期初頭のメル~~ムマータ~~ クマ-ハ の土器である。

第五群（17～22.24）の土器は、隆起線の手法より、朔古の様相の土器と考えられ、第五群31の土器の如く、隆起線の発達した様式もみられ、八ケ岳編年の中葉極盛期、藤内式に並行するのではないかとも考えられる。

≪第六群≫（28図の1～6）

阿玉台式系と思われる土器、影響をうけたと思われる土器をまとめた。諏訪では、狢沢式新道式に編年されている土器である。

≪第六群≫ (A) 楕円区画に角押文、沈線波状文のみられるもの。

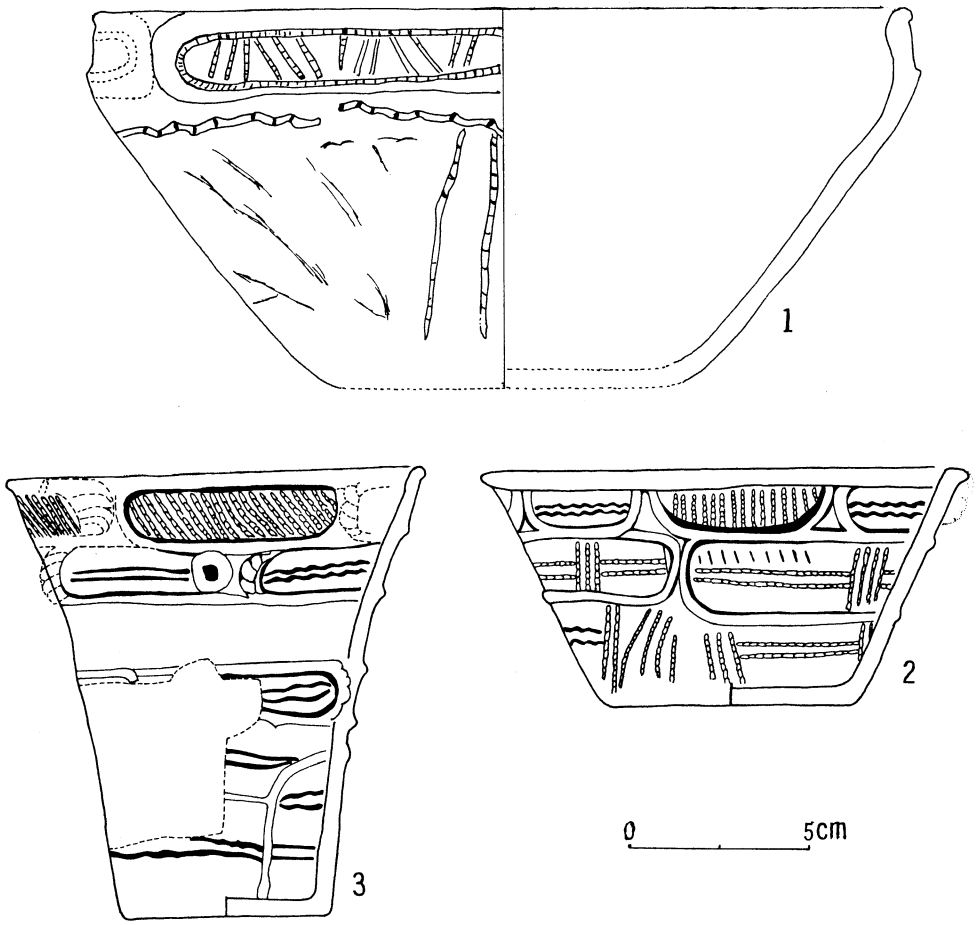
1　（28図の1）（D9）（推定口径34㎝、底径14㎝、高さ16㎝、器厚1㎝）　浅鉢形土器で胎土には、雲母、石英粒がみられる。内面は磨研されているが、外面は良く磨研されていない。口縁部が、やゝ内彎した器物で丼鉢状である。器面は黒褐色と赤褐色の斑状を呈して堅緻な焼成の土器である。文様は、口縁下に楕円区画をもち、直径0.3㎝程のU字状の小形棒状工具で押引して、区画内を縁どりした「ハ」状の角押文を作り、胴部は右下りに波状に、角押文が断続し、複列の角押文の垂下がみられる。従来、狢沢式では、浅鉢形土器は、類例が少ないとされている。楕円区画、複列の角押文、器形など、千葉市坂月町、蕨立遺跡、第9号住居址出土土器に類似している[29]。

2　（28図の1）（C9）（口縁長径27.8㎝、短径24㎝、底径24㎝、高さ14.5㎝、器厚1㎝）楕円状の平面の土器で、黒褐色と黄褐色の斑模様の器色で、器面には、削落した部分がある。胎土の砂粒は少ない。捻り把手が、口縁の楕円の長辺に対になって附されたと思われるが、

一方は欠落している、鉢形土器である。

文様は、口縁より、半楕円区画、楕円区画が、隆線で区画され、角押文と沈線の波状文で文様構成され、区画されない下半部も同文様構成されている。この土器からうけるイメージは、井戸尻2号住の鉢形土器[30]に似ているが、さらに藤野台遺跡4号住の鉢形土器にも類似し、1の土器も、群馬県三原田遺跡の浅鉢形土器に類似するから、阿玉台Ⅰb式の段階の所産と考えられる。

3　（28図の1）（c 9.10）（口径22.4㎝、底径10.8㎝、高さ24㎝、器厚0.8㎝）底部より胴部まで、ほぼL形に直上し、胴上半部は、外反する器形の深鉢形土器である。胎土精選され、内面はよく磨研されている。口縁部文様帯は、楕円区画が、2段、交互に接している。接続する個所には、粘土紐による、縄状の捻り文様とD字状の貼付がみられる。上の楕円区画には左傾の角押文列、下の楕円区画には直線の沈線と波状の沈線がみられる



第28図の1　土器実測図

が、いづれも楕円区画の内側は沈線で縁どりされている。胴中部は無文帯で、下に楕円区画一段と孤状に垂下する隆帯などがみられ、波状、平行する２組の沈線は横方向である。

4　（28図の２）隆線に沿ってペン先状の突刺文があり、その間の横帯には、角押文が左右に描かれ、三角形の空白は、沈刻されている。以下、無文帯の口縁部破片である。

5　隆線の楕円区画内は、左傾斜行の角押文で、周縁にも同じ工具の突刺文のみられる口縁部破片。

6　隆起線の楕円区画内に左傾から直上に傾いた角押文が並行し、下の横帯には交互突刺文、無文帯などのみられるもの。

7　小波状を呈する小形土器破片で、楕円区画の下の孤状、縦の沈線は、ペン先状の工具で描かれている。

8　３に似た胎土焼成の土器で、楕円区画内の左傾斜行の沈線は、角押文の工具によるもので、下段の区画の平行沈線も同じ。

9　黄白褐色の土器で、楕円区画の接点の口縁部に、４枚の粘土板を杭状の２本で、連結した（しがらみ状）隆帯が附加され、口縁の区画内は角押文、下の区画内は、２条の平行沈線がみられるもの。

10　小形の深鉢形土器の破片で、細隆起線に隆起線は横帯で、上段に大きな交互突刺文、下段に左傾斜行の角押文列の中央に小さな交互突刺文がみられる。

11　３と似た胎土焼成の土器で、楕円区画内には、左斜行のペン先状工具による沈線の中央を２条の平行沈線を引き、下の楕円区画は、上段と交互に組み合わされて、接点は捻り状の粘土紐が附加され、区画は、復列の波状沈線で、以下破損している。

12　（28図の３）（Ｃ10）（口縁径推定23.5㎝、器厚0.7㎝）

底面からＬ形に直上し、胴部より次第に外反した器形で、器厚も、口縁部先端を除いて下より上へ次第に減じている。黄褐色の土器で、胎土は砂粒少なく精選されている、残存の$\frac{1}{3}$の破片の深鉢形土器で、不明部分が多いが、縦位に垂下した隆帯内に、楕円区画文が交互に組み合わされ、区画内は２～３列の沈線波状文が見られ、胴部には楕円部の内側に鋸歯状に縁どりした突刺文があり、下半部にも波状文がみられるが、以下不明である。この土器には縦の区画線がみられるのが特長とされる。

以上は阿玉台式土器の古い様相から、次第に中部山地の影響をうけて、変容する姿相がうかがえるもので、諏訪では狢沢式から新道式に平行する土器であると考えられる。

≪第六群≫（Ｂ）

次に楕円区画文のやゝくずれた文様と指頭痕文のみられる土器である。

13　（28図の３）（Ｃ10）（口径41㎝、推定高さ60～70㎝、器厚0.9㎝）

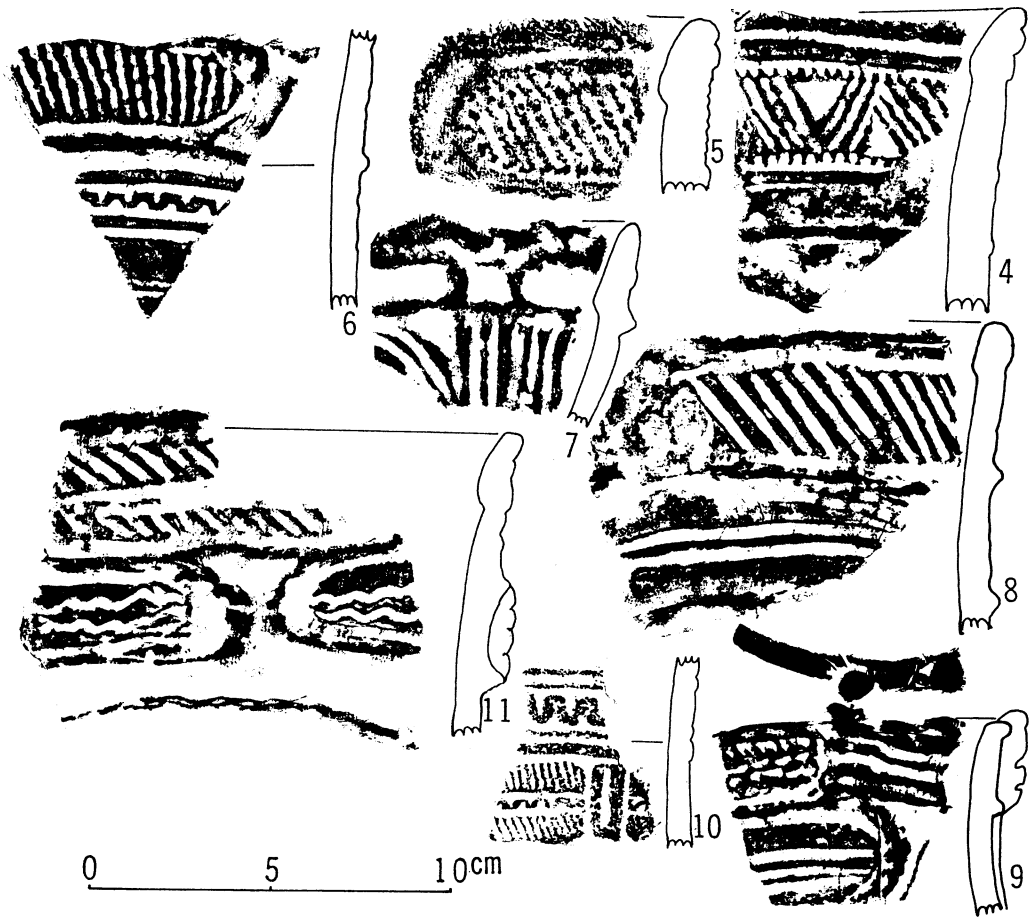
大形深鉢の破片で、胎土に滑石状の粉末と砂粒が含まれる。２次の火熱の部分もある暗褐色の土器で、台形状の突起は、扇状口縁の影響をうけたものと解される。この先端部分

を横位楕円に肥厚させて、その部分に逆位に4個の蓮華文を篦けづりで、並列させている。この蓮華文は、古式に属すると考えられている[31]。この外、口縁部には、篦による平行沈線、波状沈線がみられ、胴部は楕円区画のやゝくずれた区画内を指頭圧痕文で埋め、隆帯上の節目に2筋の刻み目を入れている。新崎式分布圏北半と阿玉台式の文化の融合した地域と、編年を知ることができる土器である。

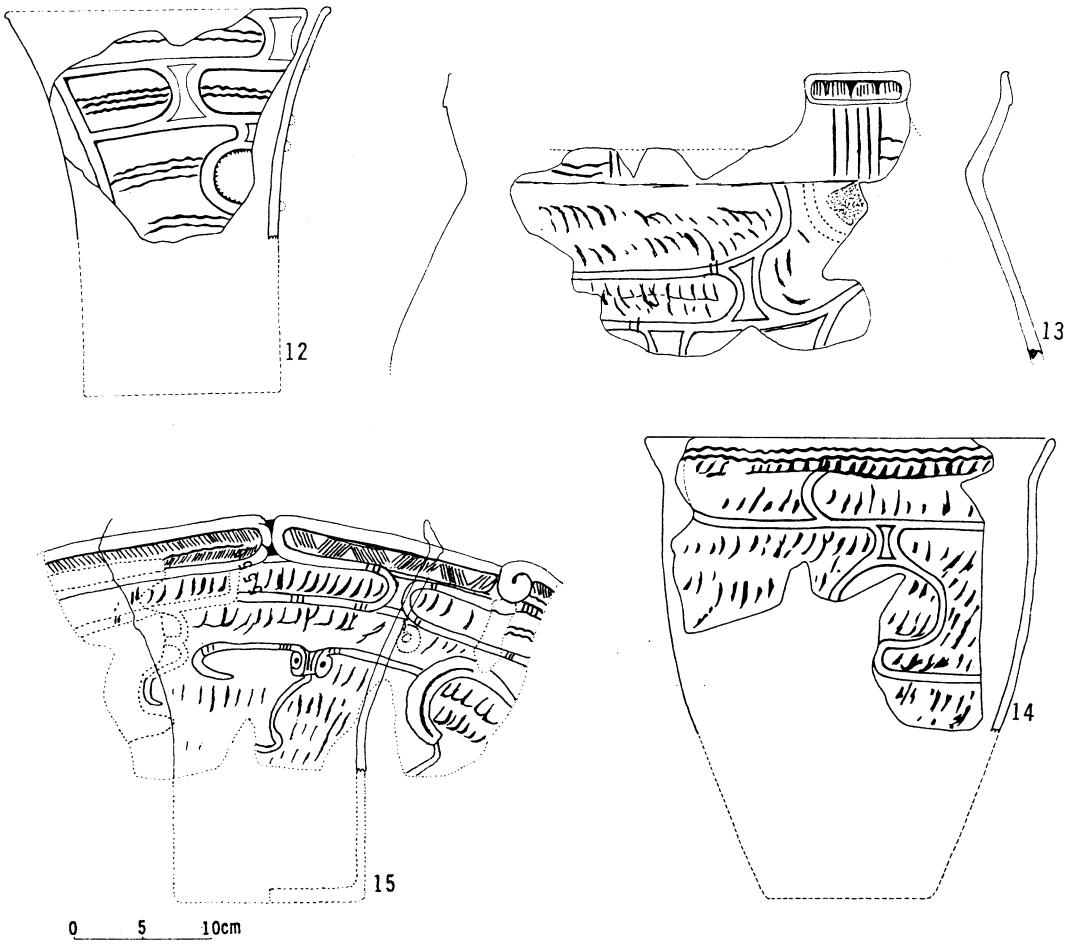
14　(28図の3)(A8)(推定口径30㎝、器厚0.1㎝)胎土に長石などの砂粒のめだつ土器で口縁部が「く」字状に僅かに外反し、胴部は内彎する器形で、茶褐色の焼成の薄手の土器である。

口縁に復列の沈線波状文と指頭圧痕文(しころ文)を密に並列させている、胴部に半楕円状の区画、孤状の区画などをつくり、区間をしころ文で埋めた平行縁の土器。

15　(28図の3)(B10)(口径23㎝、器厚0.6～0.7㎝、残存高さ18.4㎝、推定高さ28㎝)形は底部より直線上に立ち上がり？胴部で外反し、口縁部は内折している。焼成は堅緻で、



第28図の2　土器拓影図



第28図の3　土器実測図

白褐色を呈し、器面には削落した部分がみられる。口縁部には、楕円区画の連結した2横帯があり、接点には捻り文様もみられる。平行縁の口縁に、逆「の」状の隆帯をつけている。口縁の区画内に、細線で交互に斜状に平行させ、三角形、逆三角形の空白部を作っている。一方の区画内は「横ハ」状に細線を平行させ、波状沈線を入れている。胴部は、2つ目状の突帯をC字状の隆起帯があり、懸垂状の隆帯と組み合わされ隆帯の屈折部などに刻み目（裁痕）を入れている。この隆帯間は指圧痕文で埋められている。口縁部文様帯は、新道式系、新崎式系、胴部は、新道式系阿玉台式系の影響のみられる融合の所産の土器とみられる。

≪第六群≫（C）

指頭圧痕文（しころ文）の顕著にみられる土器を集成した。（28図の4～6）

1　（E 11. 12）（口径推定34㎝、底径11㎝、残存高さ30㎝、器厚1㎝）　鉢形の土器で口縁は直立している。胎土は精選され、赤褐色を呈する堅緻な焼成の土器で、我々が「し

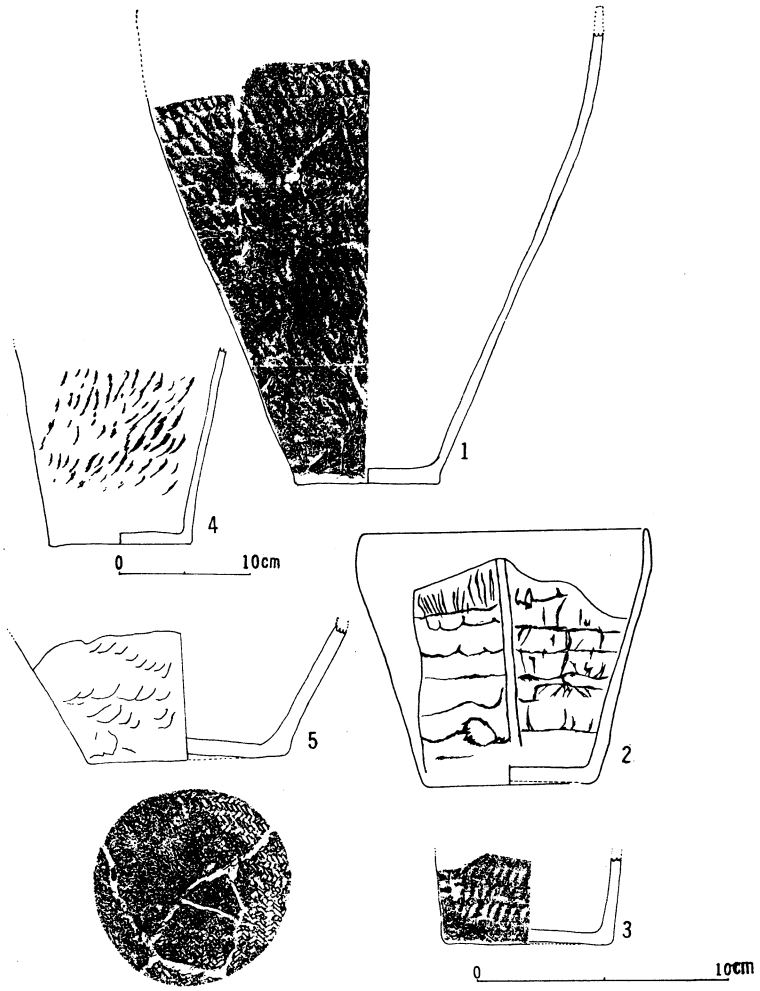
ころ文」と名づけた（鎧のしころ）指圧痕のみで文様化されたもので、内側には輪重の痕を残している。

E 11. 12 グリットの浅い土壙内に底部破損のまま倒立していた土器である。

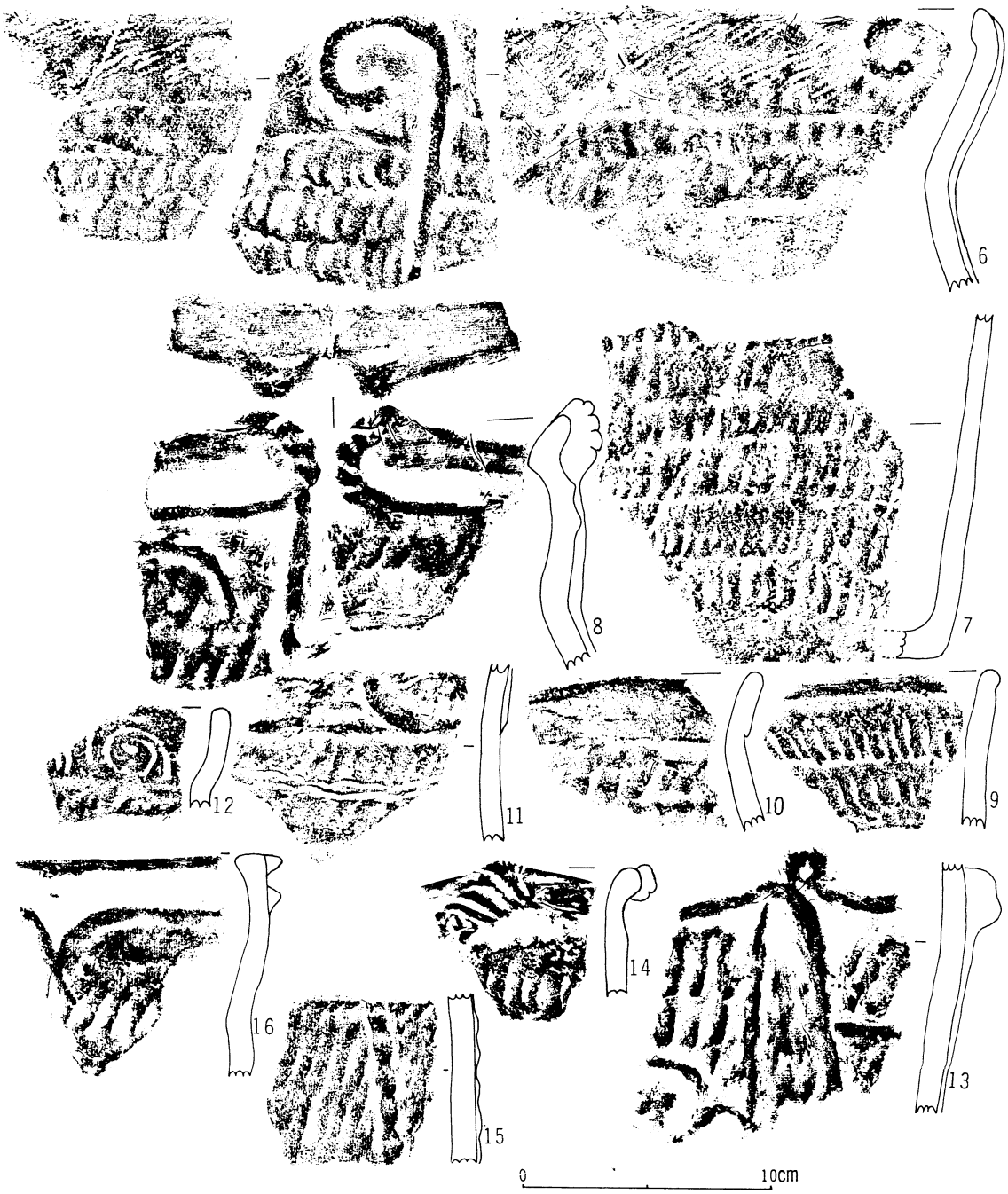
2　（D 10）（高さ約 19.3 ㎝、口径約 21 ㎝、器厚 1 ～ 0.7 ㎝）底部やゝ上げ底で、底部がやゝ広いものゝほかは 1 の土器と似た鉢形器形で、火熱をうけて、片面と下部が削落している。隆帯の垂下した不整美なしころ文土器である。

3　（底径 14 ㎝、器厚 0.8 ㎝）　やゝ上げ底のＬ形の底部器形で、右傾のしころ文のみられる土器である。

4　（Ｂ７）（残存高さ 15 ㎝、底径 10.8 ㎝、器厚 0.6 ㎝）　底部より、やゝ外反して立ち上がる器形の砂粒の少ない、器壁の薄い、焼成が中程度の灰褐色の土器である。右傾のしころ文は、やゝ不規則に並列される。



第 28 図の 4　土器実測図



第28図の5　土器拓影図

5　（底径16㎝、器厚1㎝）　上げ底で底部より大きく外反した黒褐色の焼成、中程度の土器の底部附近で、底の周囲に網代痕がある、右傾のしころ文の土器。

6　頸部よりゆるく「く」字状に外反し、口縁で内折して、やゝ肥厚した土器で、赤褐色の焼成で、二次火熱で胴部が削離した部分のみられ、口縁部より、蕨状の隆帯が垂下して、口縁はＬＲ縄文を施文し、左傾しころ文で埋めている。（28図の5）

7　しころ文の下半部の破片

8　口縁部が「く」字状に外反し、胴部の張った器形で、黄褐色の堅緻な土器で、口縁に楕円区画の変形の隆帯があり、接点に縄状（捻り状）の隆起帯をつけている。左側の接点から隆帯を垂下させ、孤状の隆帯もみえ、間をしころ文で埋めている。

9　左傾しころ文の整然と並ぶ口縁部の破片。

10　折り返し状の口縁の右傾しころ文。

11　楕円区画と思われる隆帯と右傾しころ文に復列の沈線波状文。

12　口縁部を磨消して、沈線で渦巻状文などを作り、下に右傾しころ文のみられるもの。

13　隆起帯が冂形に垂下したり、直線状、孤状、横帯などで、隆帯が特に盛り上がりの部分もみえ、右傾しころ文の土器。

14　口縁部に縄状（捻状）の隆帯で、下にしころ文の土器で、捻りは左撚りで、8の土器の捻りは右撚りで、右撚の施文の方が多い。

15　隆帯上を箆で等間隔に押え、縄状にみせかけ右傾のしころ文のみられるもの。

16　屈折の少ない口縁の器形で、口唇がT字状に肥厚し、隆帯がV字を作って平行して空白部を作り、下にしころ文のみられるもの。

17. 18. 19.　左傾、左傾、右傾のしころ文に指紋のみられる土器片。（28図の6）

20　左傾しころ文に結節文のみられる赤褐色の堅緻な土器片。

21. 22. 23. しころ文の襞が密に整然と縦に並んだもの、山ノ内町伊勢宮遺跡からも出土している[32]。

24　低い山形状口縁のしころ文土器。

25　口縁部が、肥厚して内折し、円形貼付の突帯をつけ、復列の横の隆帯上を、箆でおさえて縄状にみせ、上2段は空白部、下にしころ文の並ぶもの。

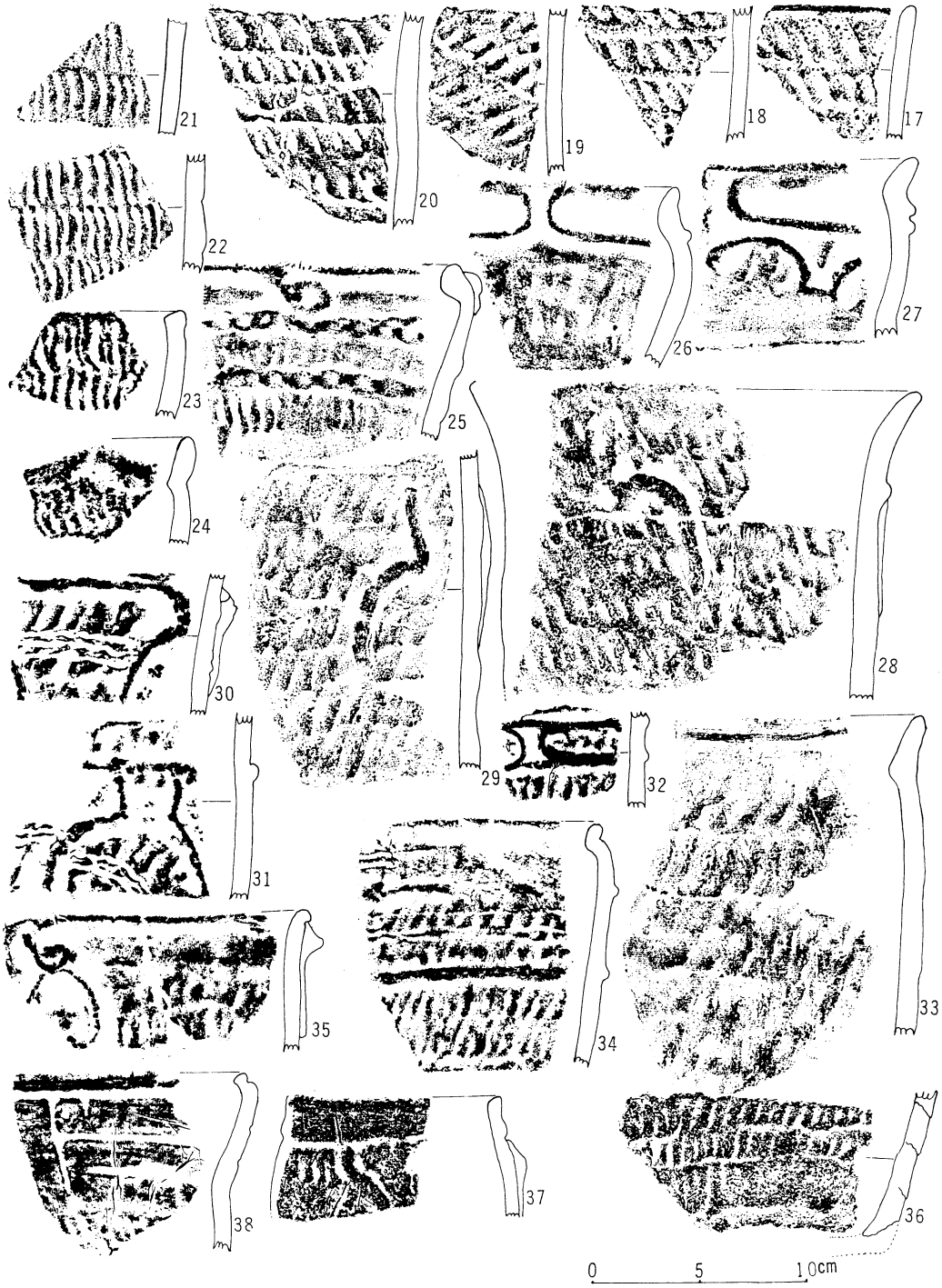
26　口縁部に楕円区画がみられ、不整形のしころ文のみられるもの。

27　楕円区画と孤状の隆帯の結ばれた中に、不整形のしころ文のみられるもの。

28　直線上に立ち上がった器形で、口縁部は外傾している。胴部に隆帯が直線と孤状を連結させて垂下して消え、左傾しころのみられるもの。

29　「〉」字状の隆帯が胴部にみられ、右傾のしころ文土器。

30　楕円区画からくずれた隆帯に右捻りの突起がつき、右傾のしころ文に3列の沈線波状文のみられるもの。



第28図の6　土器拓影図

31　隆帯が、横、縦、孤状に壷形状にめぐり、間に右傾のしころ文と復列の沈状波状文のみられるもの。

32　26と同じモチーフの小形土器。

33　口縁部に磨消を加え、凹凸の少ない右傾しころ文土器。

34　口縁が内折し横の隆帯間に右傾しころ文が充塡し復列の波状沈線文のみられるもの。

35　直線の立ち上がった口縁に口唇部が外反し、結び輪状の隆帯に、しころ文のみられるもの。

36　右傾しころ文で断面に輪重痕のみられるもの。

37　折り返し状口縁部が、無文帯で、蛇行の隆帯と右傾しころ文の小形深鉢形土器片。

38　口縁部から頸部を磨消し、3列の横の沈線に縦の沈線を組み合わせ、点と切り込みを入れ、下に右傾しころ文の土器。

小　結

第六群(A)1.2の土器は、姥ケ沢遺跡における阿玉台式土器の客体土器とみられ、諏訪の狢沢式土器と併行するものと考えられ、以後、土着の土器と融合、勝坂式系の土器、諏訪の新道式系の土器の影響をうけながら、北陸文化圏に属する、姥ケ沢の縄文中期文化が次第に変容して行く姿を現している。第六群（C）は、さらに阿玉台式文化が強く、この地域に浸透していたかを示すもので、

(1)　指頭圧痕文のみの土器は、

a　文様の粗のもの

b　爪形状に並ぶもの

c　右傾、左傾の指頭圧痕文は、造型の際の回転方向、正位倒立の製作方法の探求の資料となるもの

(2)　指頭圧痕文に結節文のみられるもの

(3)　口縁部に縄文施文のもの

(4)　指頭圧痕を磨消して沈線のみられるもの

(5)　指紋の残るもの

(6)　阿玉台式・モチーフに指頭圧痕文のもの

(7)　狢沢・新道式モチーフに指頭圧痕文のあるもの

(8)　蓮華文（新崎式）の指頭圧痕文土器

などの特色を示し、この地域の縄文中期文化は、阿玉台式系の文化の流れが、中期中葉末まで顕現された資料で、1の全面しころ文の土器は古い様相で、12.38などは、中葉末の様相を示すものと考えられる。

昭和28年発刊の「下高井」[33]　小野勝年－下高井の考古学的調査－の中で、この指頭

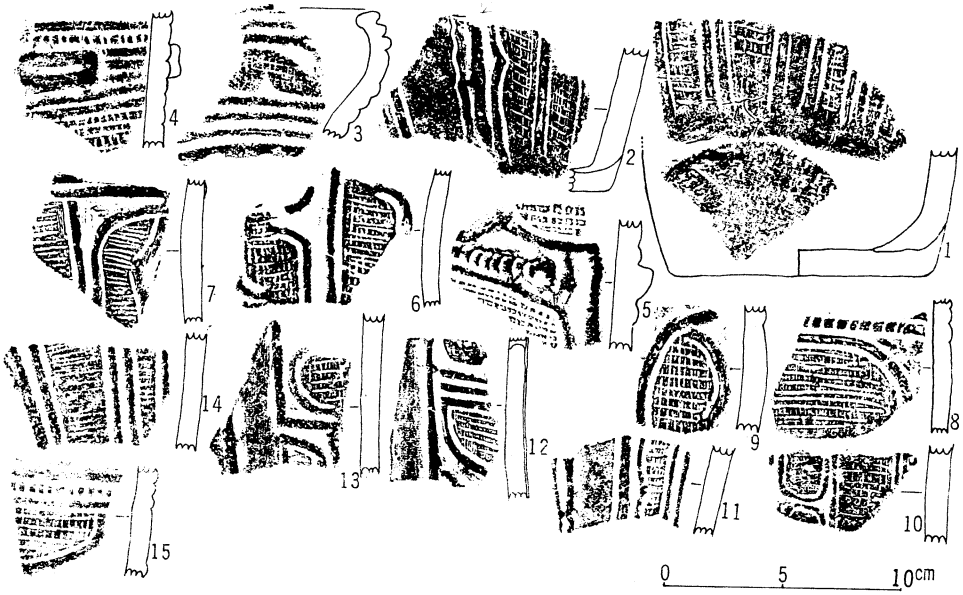
圧痕文の土器について「器の上部に半截竹管の類を使用して区画を於し腹部以下に指圧痕を現わしたものが注意を惹く、器形は鉢形で口縁は平たく、やゝ内彎している。胎土には雲母を含み、器色は黒褐色を呈する。この種のものは断片的に採集されているに過ぎないが、特に指圧痕土器の破片が、夜間瀬村（山ノ内町、伊勢宮遺跡ほか）　平穏村島崎（山の内町、島崎遺跡）　穂高村中村観音堂（木島平村観音堂遺跡）　市川村平林（野沢温泉村平林遺跡）堺村長瀬新田（栄村長瀬新田遺跡）　同野田沢（栄村十王峯遺跡）などから発見されている。これらは関東の阿玉台式との類似が考えられる。ただしこの指圧痕は土器の捲上げ製作法に伴うものであって、これを表面から指の腹で圧えていく際に現われた圧痕が文様化したものである。朝鮮出土のカームケミーク（櫛目文土器）中にも全くこれと似た手法があって興味深い」と記述されている。

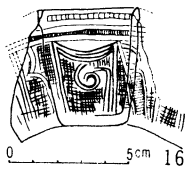
現在ではこの外に、飯山市の深沢・宮中の大遺跡でも出土が知られており、奥信濃地方の縄文中期文化に阿玉台式の関与が知られ、この流れは、富山県宇奈月、愛本新遺跡発見の阿玉台式土器[34]となって現われている。

近年、阿玉台式土器の発祥の地とされた利根川下流域より上流の群馬県、栃木県方面に古い様相の阿玉台式の遺跡が多く知られるようになり、それらの遺跡と奥信濃地方の結びつきは、後年の弥生時代の樽式土器との当地の土器の結びつきの如く、志賀高原、三国山脈を越えた交流が示唆される結果であると考えられ、これらの流れは、縄文早期・前期・中期・後期を通じて、諏訪地方と違った文化相を現わしていると考えられる。「井戸尻」において藤森は狢沢式土器について、ひとつの文化相を現わしていると記述され、新道式との前後関係が問題にされたが、谷井彪の論文[35][36]によれば、曽利遺跡の発掘調査[37]で、前後関係が逆転した。これによれば狢沢式の成立には、阿玉台式古期の影響が極めて強いとされ、井戸尻２号住、九兵衛尾根４号住、茅野和田西１７号住[38]などが例示され、伊那市の月見松遺跡[39]では、阿玉台式類似の土器はＩａ式あるいはＩｂ式の古い特徴をもち、北陸系の土器も伴出している点が注目に価いしよう。また戸倉町の蝶葉（ゆづるは）遺跡[40]は梨久保式以後、狢沢式成立以前の一時期を占めているとされ、こゝにも、北陸系統の土器が伴出している点が、本遺跡との関連から重要視されよう。

≪第七群≫

富山・石川県の縄文中期の土器は、高堀勝喜・小島俊彰両先学を初めとした研究によって編年作業が進められ、前期末の朝日下層・新保様式から、五領ケ台式併行の新崎（にんざき）式、新道式併行の上山田（古）式と変化するとされ、従来の広義の新崎式から、連続突刺文を施文する一群を分離して、上山田（古）式を設定された。本遺跡でも、この北陸文化圏の土器の影響下にある事は前述の通りである。





第29図の1　土器拓影図

≪第七群≫（A）（29図の1）

半隆起線の枠内に縦・横の順に描かれた細い沈線の格子目の土器を集成した。

1　底部に網代痕がみられ、底部の接合の間に分離痕が認められるもの。

2　これも底部は附着する際の分離痕の認められるもので、他の土器と同じく、半隆起線の枠に無文帯がみとめられる。

3　口縁部の破片で枠内に三角沈刻が認められるもの。

4. 5　新保式以来の動物意匠の突起のあるもの。

2. 6. 11.　B字状の枠に削りとりが施されたもの。

7. 14　枠内が横の細沈線のもの。

8. 12. 13. 15　竹管の爪形文に半楕円の枠内の施文。

16　（C 9）（口縁径 8.2 ㎝、底径 5 ㎝、高さ 9.4 ㎝、器厚 0.7 ㎝）　赤褐色の焼成の小形深鉢形土器で、胎土には雲母が認められる。口縁部にやゝ粗に竹管爪形文C、頸部に緻かい爪形文Cが1周し、口縁部文様帯と胴部文様帯の間に無文帯をつくる。胴部は、縦位文様帯で、N状・M状・B状の枠を隆線でつくり、M状の中に「の」字状文を入れ、枠内を細い格子目文で埋めている。

≪第七群≫（B）（29図の2）

17　（D 11）（残存口径 16 ㎝、底径 9.5 ㎝、残存高さ 10 ㎝、器厚 0.8 ㎝）　底が、やゝ上げ底で底部より外反した器形で、輪積みの接合面に沿って破損し、底面より約 3 ㎝幅、2 ㎝

幅、4㎝幅の3段に構成されている。残存の口縁は、円味を帯びて擬口縁となっている。この残存部の文様は縦位のみで、短冊形の枠内にB字状、N字状、鎖状の文様がみられ、格子目文のみられない個所は削りとりの手法が施されている。鎖状文は、後出の連孤文土器の胴部文様と似ている外、茅野市判の木山西遺跡出土土器[41]と類似する点が注意される。

18. 19. 20. 22. 23は削りとりの手法の伴うもので、18は蕨状に削りとっている。20. 21は綾杉状の沈線のみられるものである。

≪第七群≫（C）（29図の3）

分類が完璧といゝ難いが、次に上山田（古）式の影響の土器と思われるものを集成した。（29図の3、24～40）

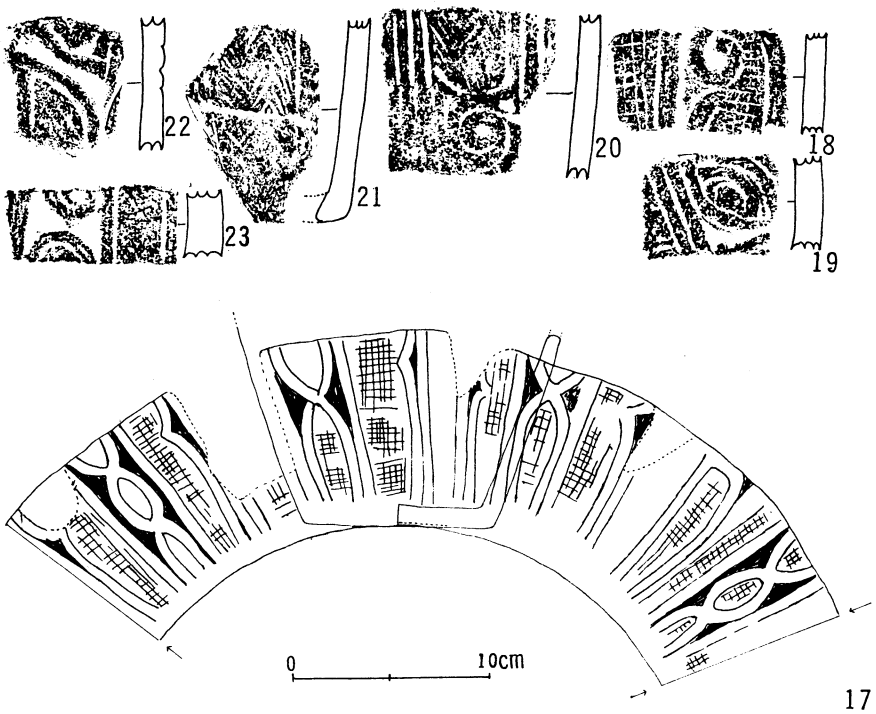
またこれらの土器には、形態の知れる土器は検出されていないが、大形の深鉢の破片であると思われる。

24. 26　連続の突刺文のみられるもの。

25. 26. 27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 37. 38. 40.　縄文地文、或いは枠内に縄文の施文されたもの。

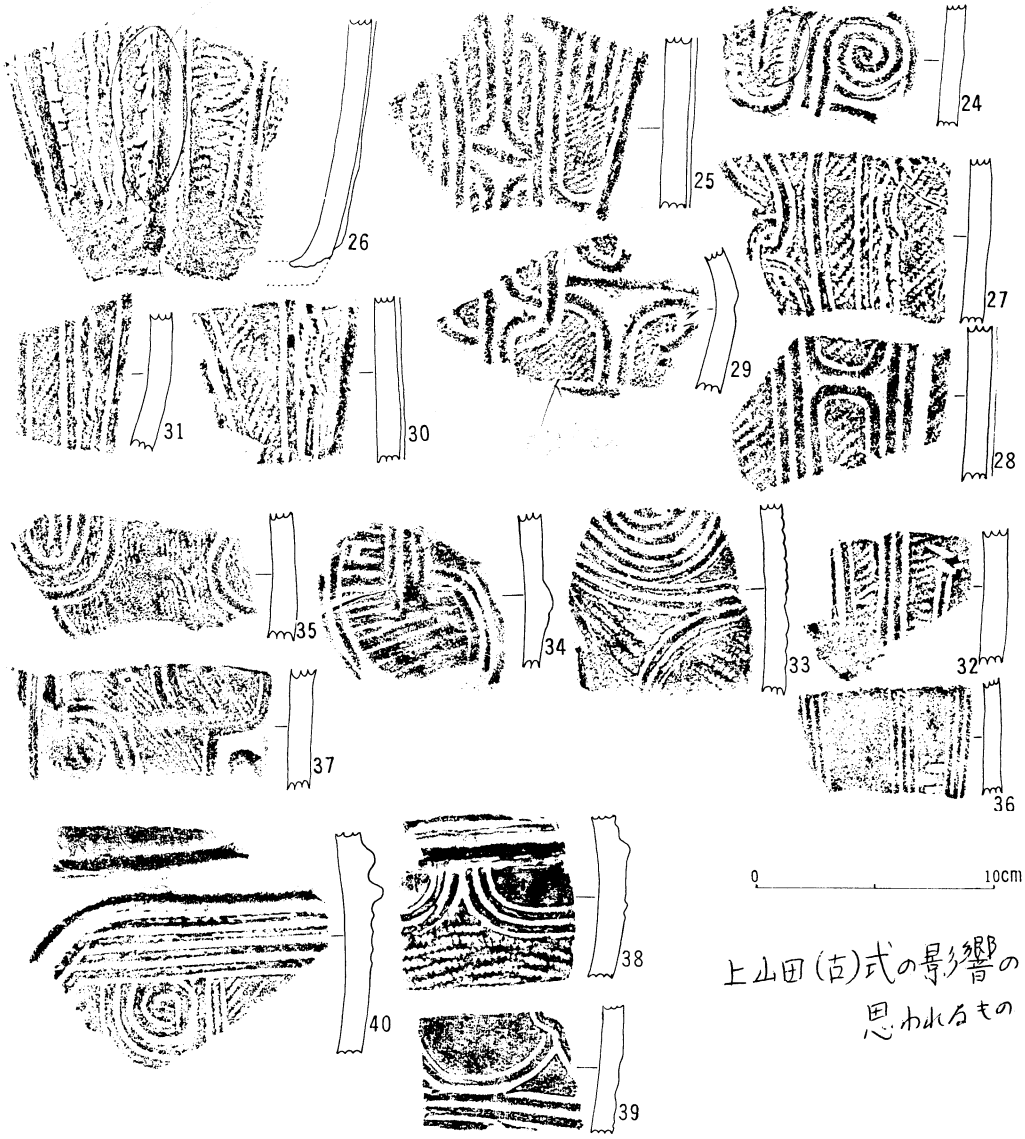
35　地文に撚糸文のもの。

25. 29　紐が組み合わされた綾とり状の文様のみられるもの。



第29図の2　土器拓影・展開図

連続刺突文



上山田(古)式の影響の土器と思われるもの

第29図の3　土器拓影図

32. 36　刻目状の裁痕の入るもの。

41～54は、小形精製土器と破片の集成である。（29図の4）

41　（C7）（口径14.7㎝、器高不明、器厚0.5㎝）ゆるい孤状に外反した器形の深鉢土器で、下半部は失われて不明である。黄褐色の器色で、胎土は精選されている。口唇に捻り状の小突起がみられるが、破損のため他の部分の形状は不明である。口縁部に半隆起線が3条横に平行し、その中より隆帯が捻り状の把手を作って、孤状と斜位に分かれて垂下している。半隆起線、隆帯の区画内の縁は、連続刺突文で、半楕円区画内は、沈線波状文が

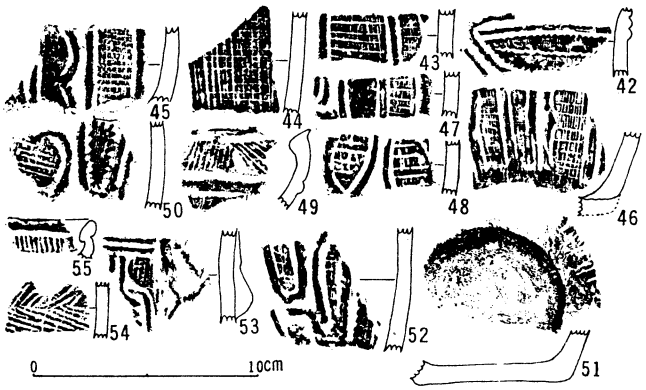
1条みられる。胴部には、突起状の把手が1対附加されている。下半部は、半隆起線で、B字状文、半楕円、方形の区画をつって、格子目文の施文された土器で、中部山地と北陸の様式の融合した土器で、新道式期の所産と推定している。

42. 48. 51. 52は 41と似た胎土焼成の土器である。

42. 52　突刺文・沈線波状文のみられるもの。

53　突起の存在から、より北陸的な土器である。

54　横位の綾杉状文。



第29図の4　土器拓影図

以上が新崎式・上山田（古）式の影響下に成立した土器文様であると考えられる。

≪第八群≫

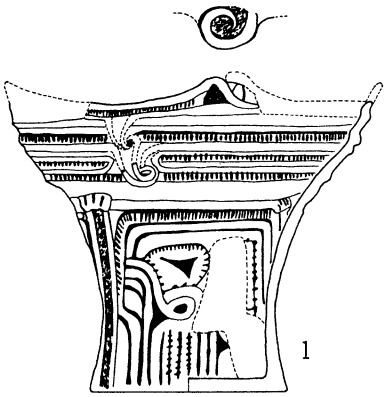
縄文中期前葉の北陸文化圏の代表的施文である、突刺文、三角沈刻文、三叉状文などのみられる土器を集成した。（30図の1～8）

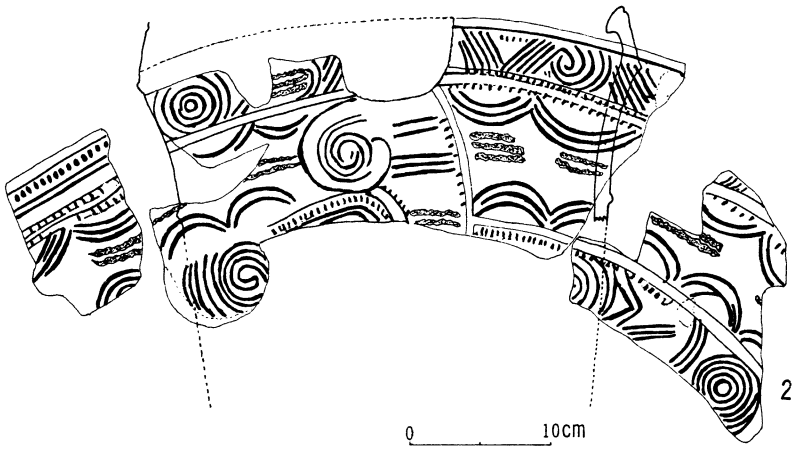
≪第八群≫（A）（30図の1）

1　（E 13）（口径 25.7 ㎝、底径 14 ㎝、高さ 22.3 ㎝、器厚 0.9 ㎝、底厚 1.5 ㎝）

胎土に砂粒、雲母を少し含み、白褐色の器色の土器で、底部は張り出し底、胴部より大きく外反し、2段口縁状を呈する深鉢で、口縁部文様帯と胴部文様帯は頸部の無文帯で分離されている。口縁部文様帯は隆起線と半隆起線で構成され、楕円状の区画が帯状に施文され、紐手状の渦巻の粘土の貼付と連結している。区画の縁には4段の連続突刺文が、めぐらされている。口縁突起は合わせ口縁状の部分に三角の沈刻を施し、内面は逆「の」字状の文様をつくり、山形状の突起と4対になると想定されるが、同体の破片が不接合のため確定できない。頸部には、握り拳状の突起がつけられ、隆起線で結ばれて、方形区画され3分割されている。区画内は、h状などの半隆起線文、三角形や三叉状の沈刻文、連続突刺文などがみられる。胴部に五領ケ台式の残影が認められる在地の北陸系の土器と認められる。

2　（C 9. 10）（口径 34 ㎝、器厚 1.1 ㎝）　黄赤褐色の大形の深鉢形土器の破片で、内部は磨研され、胎土に砂粒少なく精選されている。口縁部が僅か内折し、口唇部は肥厚してい





第30図の1　土器実測図・展開図

る。口縁文様帯は隆起線の間に太い沈線で、同心円状、渦巻状、斜状文がみられる。胴上半部は、隆起線が、縦位、横位にめぐらされ、断面三角状の隆帯の渦巻文、太い沈線の重連孤文、同心文、波状文などで充填され、隆起線の縁を連続突刺文がめぐらされている。1の土器より、かなり後出的の様相を示す土器である。

<第八群>（B）（30図の2～5）

3～10. 12　三叉文、三角状の沈刻のある土器片である。

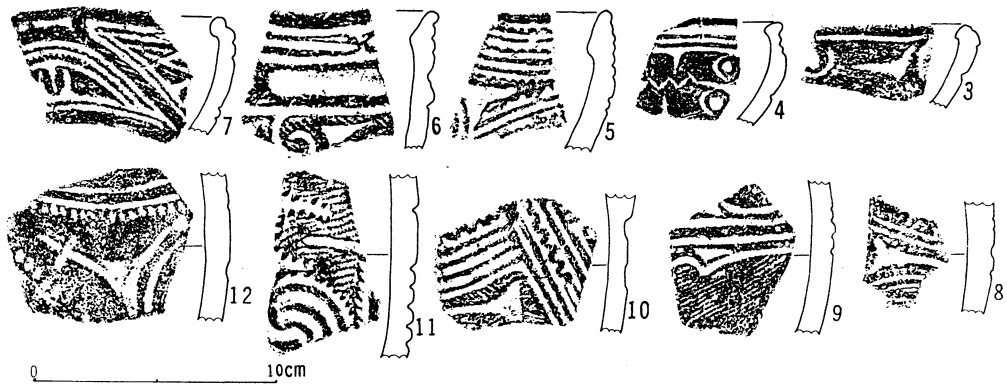
6. 7. 9. 10　縄文地文。

4　磨消して施文。

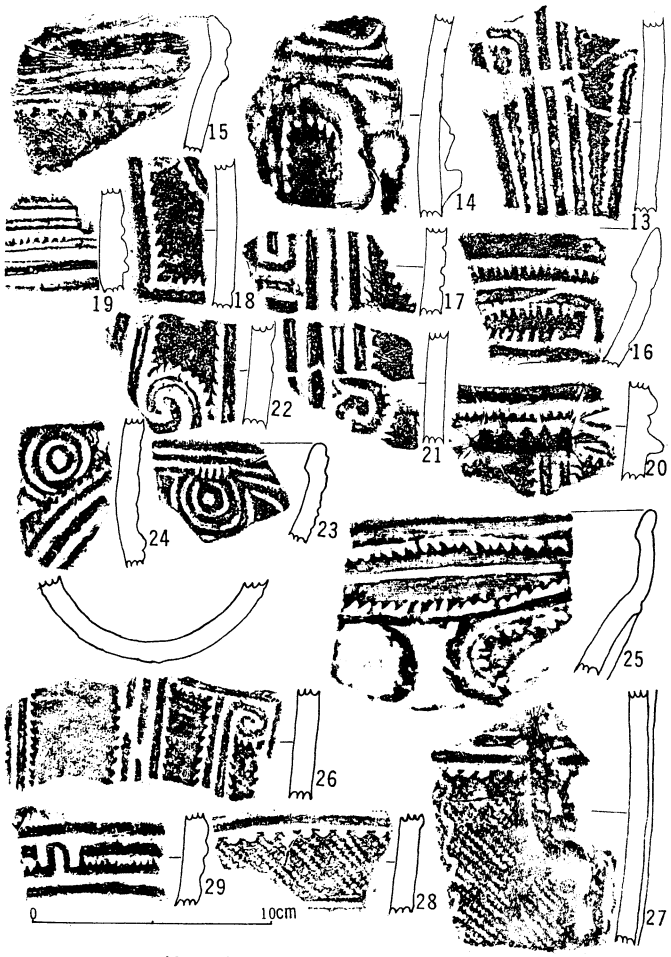
10　沈刻の上、3条爪形文D、連続三角刻み文。

12　三叉文の先端に直角に刻みを入れたもの。 10と6は、やゝ古い様相の土器と考えられる。

11. 13～50　突刺文のみられる土器片である。



第30図の2　土器拓影図



第30図の3　土器拓影図

27. 28. 35. 38. 39. 44. 49. 51　縄文地文

20　握り拳状の突起

23. 29. 33　刻み目文の入るもの

24　交互突刺文

25　楕円区画で捻り状突起のもの

27　結節文と隆起帯のもの

23. 24　同心円文

22. 26. 36　渦巻状文

45. 46. 48　半円状

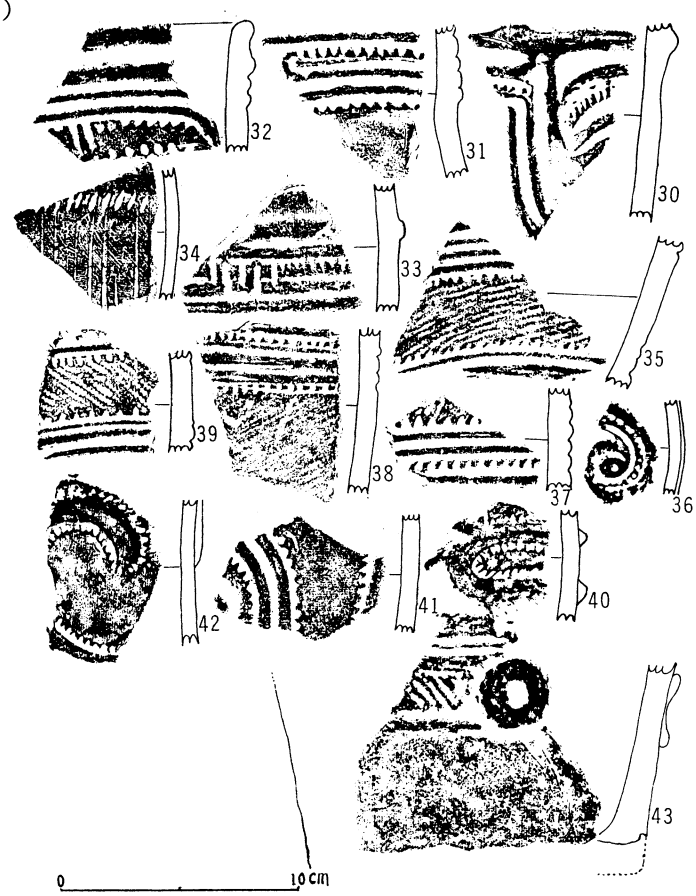
14. 43　円形状の貼付の隆起の伴うもの

34　擦痕文に沈線平行文と連続突刺文

5. 13. 16. 47. 48　半隆起線の縁を連続刺突文をめぐらせて「杉葉状に刻まれた文様」（上原甲子郎）で、新潟県中頸城郡吉川町の長峰遺跡[42]第6類D、同県中魚沼郡津南町上野遺跡[43]の第6類A～Fに分類された土器で、新潟県南部に核をもって土器文様で、縄文中期前葉から中葉にかけての地方色豊かな文様と考えられる。

≪第八群≫(C)(30図の6)

56～71 蓮華状文（蓮弁文略して蓮華文）のみられるものを集成した。A類と手法的には同じで、深く大きく削られる特色があり、第六群13の 蓮華文や、56～70の蓮華文の如く刻削されたものと71の口縁部文様の如く線書きのものの2種類がみられるが、姥ケ沢では前者が多数を占め、後者は僅かの注出にとゞまり後者は新しい様式であると（金子1967）が記述している。この蓮華文は必ず口縁部に飾られるという原則があり、広義の新崎式の代表的な施文であると考えられている。



第30図の4　土器拓影図

前述の三角状（杉葉状）連続突刺文と組み合わされたり、格子目文、爪形文Cなどと、隆起線、半隆起線に区画された枠内に描かれている。

57～60. 66. 連続突刺文（杉葉状など）と円く削られる蓮華文の中間の形式を示すもの。

59　前者の文様の中間に波状文の入るもの。

57　楕円区画内に復列の波状沈線のみられるもの。

56. 61. 62. 64. 67. 69. 刻削が円くされたもの。

67. 格子目文のみられるもの。

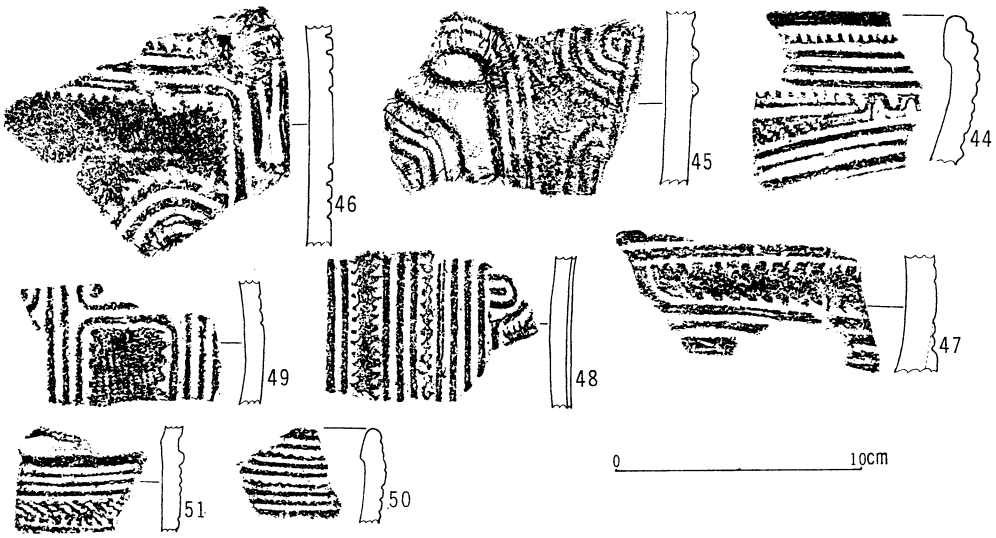
63　台形状に刻削されたもの。

58. 66 杉葉状の連続突刺文のもの。

66　橋状の把手が付されたもの。

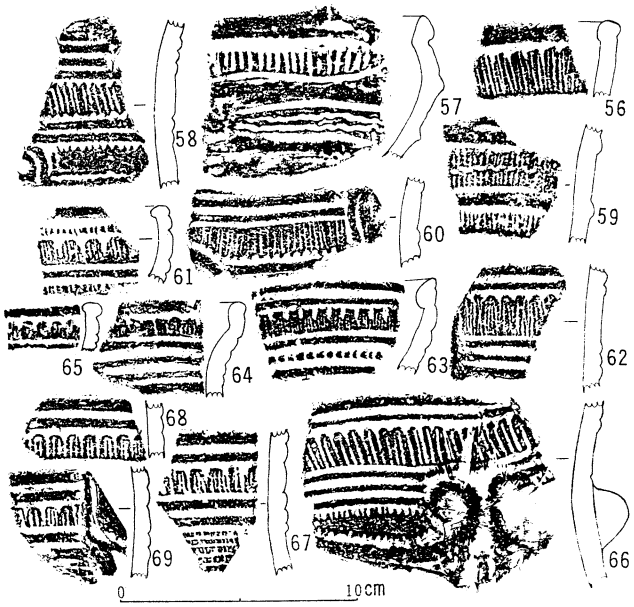
63　爪形文Cのみられるもの。

70　（D9）（推定口径26㎝、器厚0.7㎝）黄褐色の焼成の砂粒の少ない胎土の土器で、キ



第30図の5　土器拓影図

ャリパー形の器形である。上半部$\frac{1}{4}$の残存で、口縁部の隆起帯は削落している。隆起線による楕円区画？内は、左斜状の沈線で、縁を鋸歯状に沈刻されている。胴部は隆起帯によって半楕円形？に区画され、中に半隆起線、４条平行し、隅に「の」字を彫られている、三角状の区画には、鋸歯状に縁どりをめぐらせ、左側に垂下した隆帯は２帯に分かれ、先端部がスプーン状に曲っている。方形区画内？は、半隆起線の平行、円形の削彫などが施文されている。

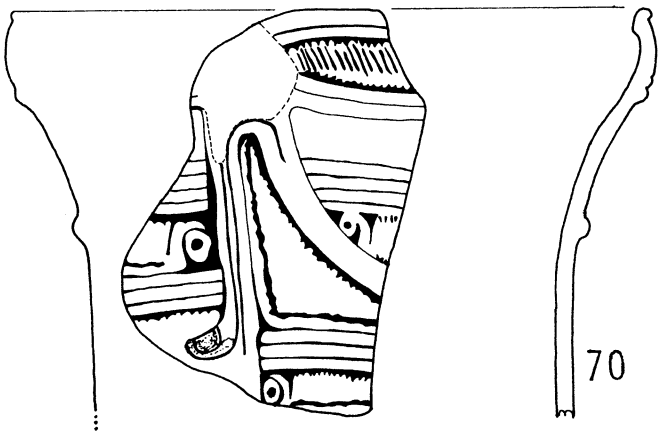


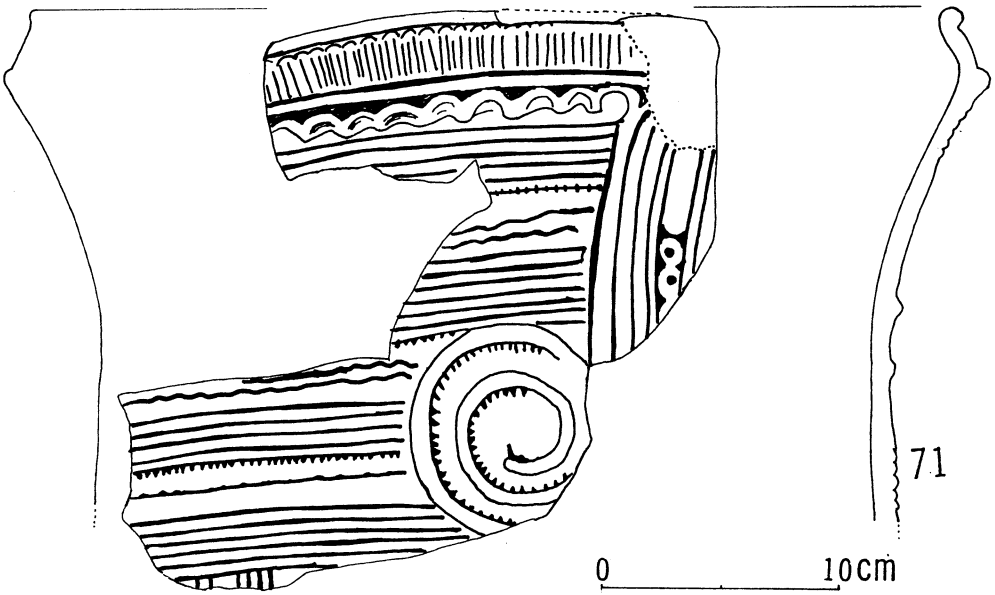
第30図の6　土器拓影図

≪第八群≫（D）（30図の7）

71　（C 10）（口径39㎝、器厚1㎝）口縁部から胴部にかけて$\frac{1}{4}$程残存のキャリパー形の大形深鉢の赤黒褐色の堅緻な焼成の破片で、口縁部の粘土貼付部分が削落した部分がある。口縁部の隆起線の間に細い沈線の蓮華文を施文し下に粘土貼付により波状文と縦の隆起帯

をつくり、隆起線が平行している。その間に８字状文を削彫している。また隆起帯が渦巻文をつくり、突刺文がめぐらされている。貼付波状文の下は、横位の隆起線、突刺文、復列波状沈線文などがみられ、下部は縦位の文様もみられる。口縁部の貼付の波状文は、阿玉台式や、新道式土器にみられるもので、編年代は、同時代に求めることができると思われる。





第30図の７　土器実測図

≪第八群≫（E）（30図の8）

横帯楕円区画内の斜状の沈線が、太い半円形の棒状工具で描かれたもので（74を除いて、左傾の斜状文で）、肥厚した口唇で器形は、キャリパー形のものが多いと思われる。

72　黄赤褐色の焼成のキャパリー形の深鉢で、口縁部は隆起線に囲まれて左斜行の沈線文に縁は波状沈線文がめぐらされている。下の区画は3条の波状沈線文である。

73　斜状の沈線文の下の楕円区画文の半円形の接点は縄状の捻りの突帯が附加されている。

74　楕円区画内は右斜状の沈線文で、下の区画は、左斜行に描かれている。

75　隆起線と突刺文。

第30図の8　土器拓影図

76　連続突刺文、復列波状沈線文、左斜行沈線文、楕円区画。

77. 78　キャパリー形器形、隆起線の下の左斜行沈線文は、連続突刺文を刺突してから描かれている。76は逆の手法。楕円区画の縄状捻り文、沈線波状文がみられる。

79　口縁が僅かに外反した器形で、刻みのある小波状の口縁で、渦巻状の突帯、楕円区画の突刺文と左針行沈線文と突刺文の連続文がみられるもの。

80　キャリパー形の器形で、口縁が三角状に肥厚して、縄状捻りの把手がつけられている。口唇の三角の中は沈刻されている。下の区画内は、突刺文と左斜行の沈線文が1体となって描かれている。

81　隆起線の楕円区画、半隆起線の方形区画隆起線の縁の連続突刺文、縦位復列の波状文斜行格子文のみられるもの。

82　隆起線、楕円区画、波状沈線文、左斜状格子文、突刺と左斜行格子文が連続で描かれたもの。

83　連続突刺文と半隆起線、突刺と左斜行格子文の一体に描かれたもの。

84　口縁部が僅かに内彎した器形で、口唇は外反して肥厚している。隆起線間に、左斜行格子沈線文のみられるもの。

85　斜行格子沈線文、波状沈線文、連続突刺文、楕円区画のみられるもの。

86　隆起線と左斜状沈線格子文、波状沈線文、突刺と左斜行格子文の一体文。

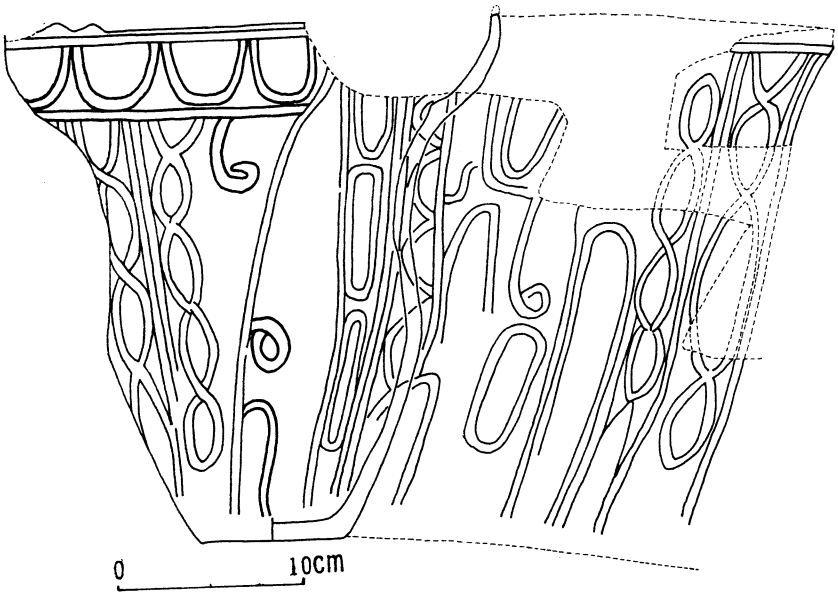
これらの土器は、器形の形態、繁縟に飾られた文様などから縄文中期中葉、八ケ岳編年の新道式から、藤内式期に刻当する編年を設定したいと思われる。

(4)　中期第四期土器

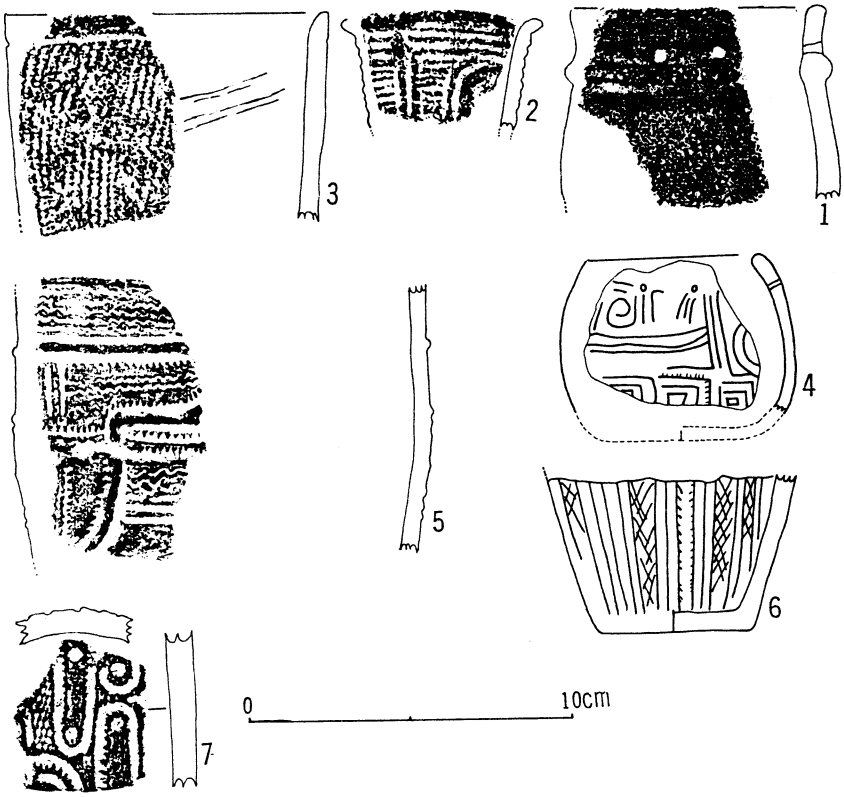
《第九群》

31図（G 14）（口縁径26㎝、底径7.8㎝、高さ27.3㎝、器厚0.8㎝）焼成は中程度、胎土に金雲母が認められ、器色は赤褐色と黒褐色を呈し、内面底部には、煤状の附着物が認められた。口縁に小波状の突起が認められるが、破損部が多く、全容は不明である。器形は胴部でくびれ、外反した上半部が、口縁部で、内彎するキャリパー形を呈し、曽利式土器に多い深鉢形を呈する。文様はすべて、竹管状工具で描かれ、口縁下には、連孤文（U字状文）が並び、胴部文様帯と結ばれた部分もみられる。胴部文様帯は、3分割で、竹管沈線文の間に、鎖状、蕨手状、O字状、C字状の文様を充塡させている。鎖文は、（29図の2）17の土器の鎖文と共通する。

この土器について、縄文文化の研究Ⅲ「連孤文土器」の桐生直彦の分類、A形式に属し、氏の教示によれば、連孤文モチーフがU状を呈するものは連孤文土器自体でも古い段階にしか使用されないもので、器形から推して広義の咲畑タイプ（Sタイプ）に属し、曽利Ⅰ式あたりの段階の土器と考えるのが妥当であると考えられ、関東地方に最も主体的にみられる連孤文土器（A・B・C型式）は曽利Ⅱ式頃に出現しⅢ式に並行するものが最も多く、そ



第31図　土器実測・展開図



第32図　土器実測・拓影図

の先駆の形態が先の咲畑タイプであり、このような土器が北信から発見される事は、分布圏的にみて注目される。前述の土器（第七群（B）17）と合わせて、今後の類例の増加に待ちたいと思う。また（E 12）グリットから加曽利E I式土器の破片が検出されている。

小形土器の集成（32図）

1　有孔鍔付土器、黄褐色の焼成で、胎土脆弱、その他、2点の赤褐色の焼成の鍔付土器の破片があった。

2　竹管の平行沈線文で構成され、横位の格子状の沈線で構成される、赤褐色の焼成の北陸様式の土器。

3　折り返し状の口縁をもった黒褐色の焼成の全面に縄文施文された小形深鉢形土器。

4　壷形状の土器の破片で、黄褐色で脆弱な焼成の土器で、細い沈線で、コの字重ね、渦巻など、方形区画の中にみられ、突刺文もみられる。

5　胴部の破片で、黒褐色を呈し、やゝ堅緻な焼成の土器で、細隆起線の縁を連続に刻み沈線波状文を多数並行させたり複数の区画・波状を並行させ組み合わしている。

6　細隆起線の間に無文区間、斜格子目文、縁を連続刺突するなどの赤褐色の焼成の北陸様式の土器。

7　縦位の楕円区画を爪形文Cで施文し、楕円の両端を円形刺突した、堅緻な焼成の黄褐色の土器片。

その他、しころ文・無文のミニチェア土器が4点程検出されている。

(3)　口縁部集成　（33図の1～4）

こゝに集成した口縁部の実測図は、姥ケ沢遺跡B地区より検出した口縁部破片のうちから選定し、時期別は考慮せず記載したものである。これらをみると縄文前期末葉より、中期初頭にかけての変遷がめまぐるしく変化し、北陸様式の流れの中にあって、中部山地、関東東北部との交流の中に変化して行く様相が読みとれる。そして僅か、中葉にかけての土器の口縁部も含まれている。抄出して拙稿を記してみる。

11に代表される嘴状の口縁は、縄文中期初頭の形式である。

48. 4. 7. 41などは、北陸では入字口縁と呼ばれるもので、48は踊場の土器に似て前期末葉に位置づけられ、文字通り入字の隆起を作っている。これが4.7の如く北陸様式で変化したのだろうか。

47　動物意匠の把手をつけるのも北陸の初頭の特長で、この資料は、発掘に先だって表採されたもので、土器の様相が不明なのは惜しまれるが、この意匠は、猿面を擬しているように思われる。

1.2.5　前期末葉に朔古する口縁とも思える。

34～37　合わせ口縁状を呈している。

3.4.7～10.15.22.31などは　北陸様式の口縁で、10は 突刺文から新崎式の特長のみられ

るものである。

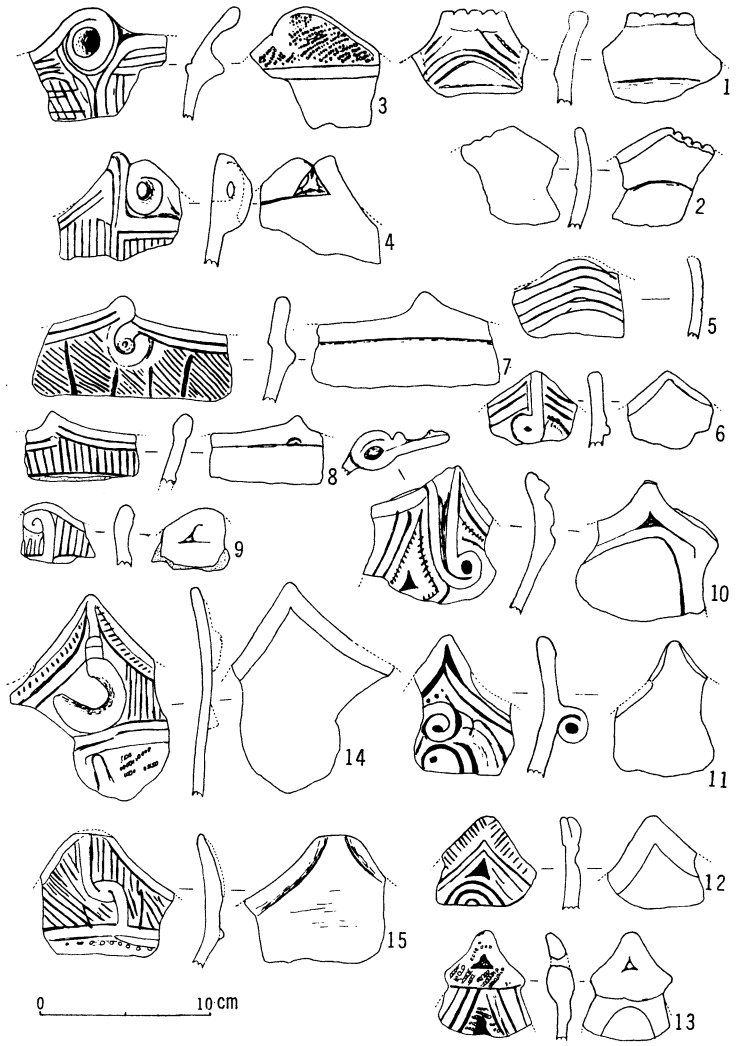
⑷ 土器の観察

(1) 底部の圧痕

綱代文様と木の葉文様（朴の葉などの広葉樹類）の２種が認められた。（第34図）

(2) 剥離の土器底面について（34図）

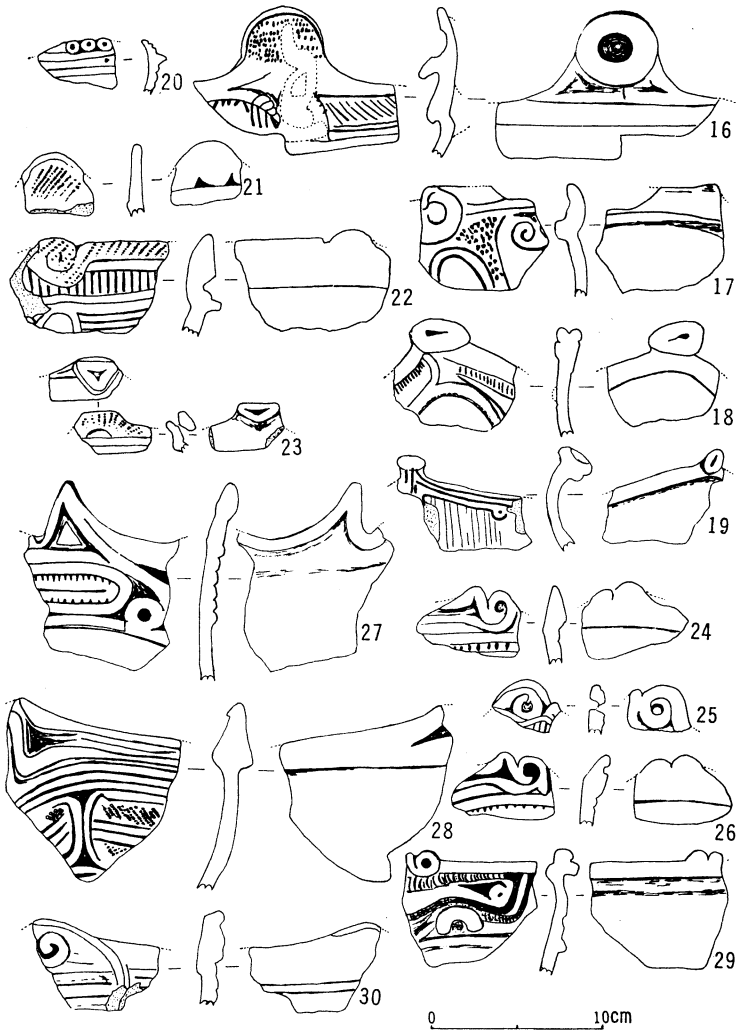
姥ケ沢遺跡では、土器の底部の剥離したものが、小形の土器から大形の土器まで認められた。これは成形の時点で、底部と土器の下部が、どちらかが乾燥が進んだ状態で接合されたことを示すもので（円板状貼付底）、これらは新崎式系の土器や、結節文のある土器、指圧痕文のある一部の土器などの底部破損部から観察される。新崎式土器を研究された、桜井仁



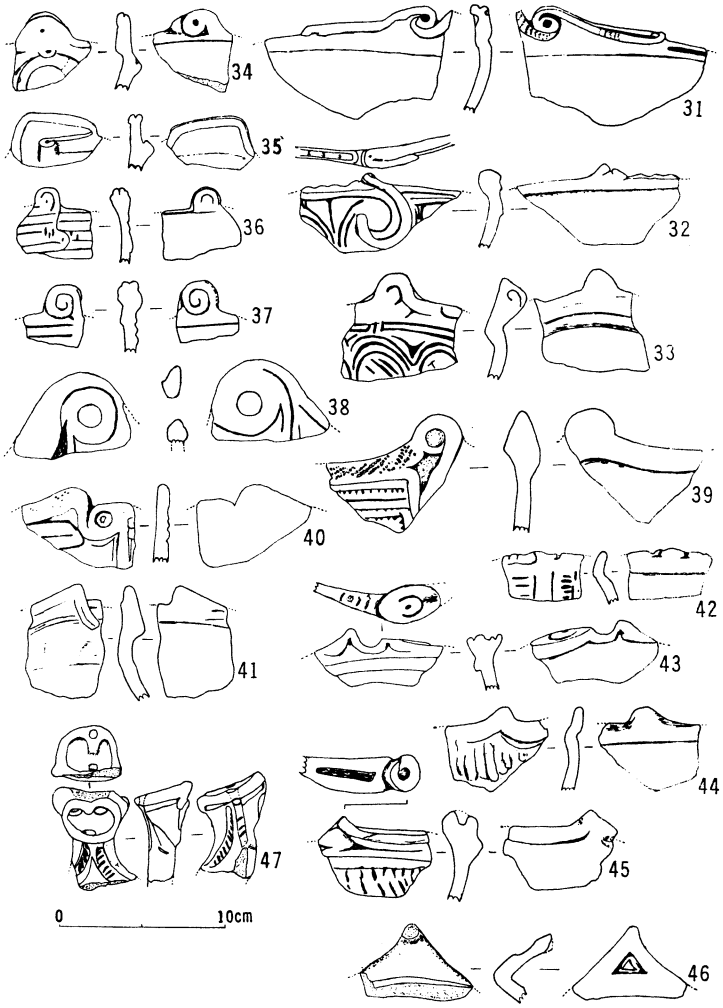
第33図の1　土器口縁集成図

吉は（1981）は、胴部と底部は倒立造形により、製作されたものである[44]とされ、―縄文中期、前葉期は、底部から造形する正常位の方法と早前期からの倒立造形の交代期に当り、新崎式土器もまれには正常位の造型も見られるが、大部分は倒立造型の製作である ―。とされ詳細な観察結果を発表されている。しかし製作実験から、早期の尖底土器でさえ倒立造型では製作不可能であるとの見解が、後藤和民・伊藤晋祐・増田修の「製作実験Ⅰ・Ⅱ」[45]の論文によって示されている。尖底土器については、乾燥・亀裂を防ぐための収縮に適した器形であり、煮沸の効率がもっともよいとされ、底部に厚く粘土を附着して巻上げ、整形後、残存部を切削したもので、これらは正位の造形でなくては考えられないとされた。

土器の製作には、粘土の選定からはじまって、多くの工程を経て、製品化されるわけだが

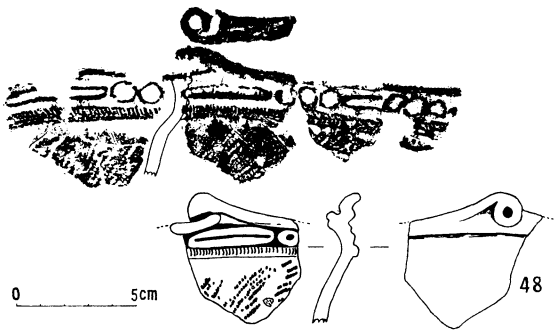


第33図の2　土器口縁集成図

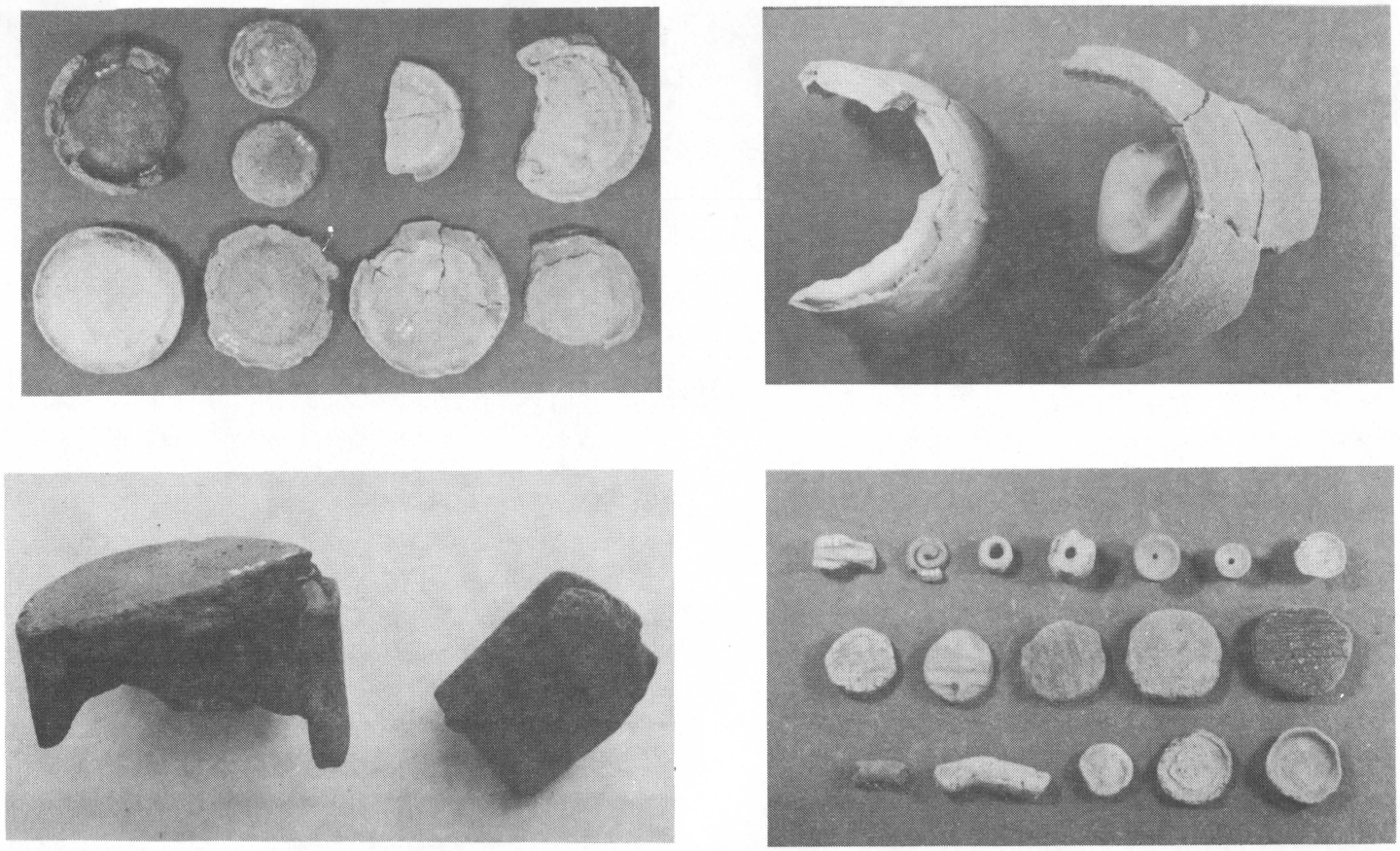


第33図の3　土器口縁集成図

これらの背景となる事象を姥ケ沢遺跡の土器は、垣間を見せてくれる。前述の二者の研究を更にふまえて、今後さらに分析を進めたいと思う。



第33図の4　土器口縁集成図



第34図　土器底部写真

第3表　土器編年表

	関　東	長　野	姥　ケ　沢	石川・富山	新　潟	東北南部
前期	花積下層 関　山 黒　浜 諸磯　A 〃　B 〃　C 十三菩提	中　越 神ノ木 有　尾 南大原 上　原 下　島 籠　畑	（前期） ○第一期土器 ○第二期土器	福浦上層 朝日下層	布　目 刈　羽 泉竜寺 鍋屋町　Ⅰ 〃　Ⅱ	大木1 大木2a 大木2b 大木3 大木4 大木5 大木6
中期	五領台（下小野） 阿玉台Ⅰ勝坂Ⅰ 〃　Ⅱ〃　Ⅱ 〃　Ⅲ〃　Ⅲ 加曽利E　Ⅰ 〃　Ⅱ 〃　Ⅲ	梨久保九兵尾根 狢　沢 新　道 藤　内 井戸尻 曽　利　Ⅰ 〃　Ⅱ 〃　Ⅲ 〃　Ⅳ	（中期） ○第一期土器 第一群　第二群　第七群A ○第二期土器 第三群　第五群　第六群A.C ○第三期土器 第六群B　第七群B 第八群A.B.C.D.E ○第四期土器 第九群　A　地区住居址床面出土土器 B　連孤文土器	新　保 新　崎 上山田古 上山田天神山ab 古府牛滑 古串田新	剣野　E 上　野長者ケ原Ⅰ 千石原　〃　Ⅱ 古屋敷　〃　Ⅲ 山　下 馬　高 栃倉（沖ノ原） 大　平 並　松	糠　塚 大木7a 大木7b 大木8a 大木8b 大木9 大木10

ま と め

まことに繁雑な資料呈示を行なってきたが、こゝで、姥ケ沢の土器編年について概観してみると、縄文前期末葉期の土器は細片で僅かの検出だが、中部山岳地帯一帯の様式を見出すことができた。中期初頭から前葉は、この地方は、ことに複雑な様相を示す土着の北陸文化圏のベースに踊場以来の伝統の土器を見出すことができた。

次に五領ケ台式（梨久保式など）の影響が（主として２式）強く現われて一時期を画したと思われる。そして前葉の早い時期に阿玉台式の強い影響をうけるⅠｂ式の古い様相の土器の検出は僅かだが、諏訪地方の狢沢式土器と共通する点が注目され、以後、抽象文で代表される勝坂式の影響は顕著にみられずに、中葉に至ると思われる。こゝでは、中心になる部分と周辺地域の違い、隣接した地域の土器の影響をうけて両者の特長の混ざり合って独特の土器が生み出されることは例示した如くである。土偶についても、北信越の国境地帯は、独自の文化圏を形成していた。（上野、深沢、姥ケ沢）独特な突刺文で飾る手法の土器をこの文化地帯のメルムマークとするならば、阿玉台様式との関連などの問題は、まだまだ今後の研究課題とせねばならないと考えられる。

Ａ地区住居址面出土の土器は、北陸文化圏の影響の終わりの土器で、馬高式の前駆的な形態を示し、文化圏が、さらに細分される事を示すが、次の段階には、この地方は同じ加曽利Ｅ式の影響下でありながら、中部山岳地帯寄りの影響が強まると考えられ、北陸文化圏とは切り離されたと考えられ、連孤文土器などが客体的に見出されたのである。

以上が、縄文中期後葉の初まりまでの姥ケ沢の土器の変遷のあらましであり、今後は、さらに前後関係の確認が待たれているが、坪掘の小発掘から次第に大発掘へと情報量を増す方式が望まれる。

浅学非才のため、試行錯誤、訂正の多い報告書となってしまったが、多くの方々の資料提供などの御援助をいたゞいた。金沢美術工芸大学の小島俊彰先生、長野県史刊行会の樋口昇一、桐原健、宮下健司の先生方、多摩市教育委員会　桐生直彦氏、地元では、松沢芳宏氏などに特にお世話になった。

（檀原長則）

註　引用文献

(1) 松沢邦男　近世末大俣村における堰路引水事業　高井66号　昭59
猶、姥ケ沢の地名はこの浸食谷地形より由来する。

(2) 中野市誌　自然編　第5節長丘丘陵（昭56）

(3) 江坂輝弥・可児弘明他「上野遺跡」　新潟県津南町教委　昭37

(4) 宮坂光昭　長野県岡谷市梨久保遺跡の再調査　長野県考古学会誌第3号　昭40

(5) 樋口昇一他　「上原」　長野県教委　昭32

(6) 中島清　「諸磯b式土器について」「上越新幹線埋蔵文化財発掘報告Ⅳ伊勢塚　東光寺裏」
埼玉県遺跡発掘調査報告書第26条　昭55

(7) 小林達雄　日本の原始美術　縄文土器Ⅰ　講談社　昭54

(8) 今村啓爾　諸磯式土器　「縄文土器Ⅰ」　雄山閣　昭57

(9) 金井正三　中野市立ケ花遺跡の前期縄文土器について　高井41号　昭52

(10) 神田五六　「長野県下水内郡豊井村南大原縄文諸磯式遺跡概報」　信濃Ⅲ3ノ8　昭26

(11) 高橋桂他　「北信濃大倉崎遺跡発掘調査報告　信濃Ⅲ28-4　昭51

(12) 神田五六　「縄文諸磯期に於ける低地性集落と高地性集落」　信濃Ⅲ4-9　昭27

(13) 永峯光一・鈴木孝志　「長野県埴科郡松代町西条地区入組稲葉遺跡　調査概要　信濃Ⅲ9-4　昭32

(14) 関　孝一　長野県埴科郡戸倉町蝶葉遺跡の調査　信濃Ⅲ18-4　昭41

(15) 飯山北高地歴部　深沢遺跡研究概報　昭41

(16) 長野県史刊行会　長野県史　考古資料編　主要遺跡（東北信）　上浅野遺跡　昭57

(17) 金井正三　豊野町豊野東小学校保管の縄文式土器　長野県考古学会誌47　昭57
猶、「下高井」の関係者としてつけ加えると資料集積の少なかった当時は、学校・個人所蔵者を歴訪して調査に当ったため現在とは事情が違う点を考慮されたいと思う。

(18) 小島俊彰　珠洲郡内浦町松波町新保遺跡資料再見　石川考古学研究会誌第20号　昭52

(19) 小島俊彰　北陸における縄文前期末の様相　－編年の確認と土器分布圏について－　信濃Ⅲ20-4
昭42

(20) (4)と同じ

(21) (3)と同じ

(22) 金子拓男　新潟県柏崎市剣野E地点遺跡出土土器について　信濃Ⅲ19-2　昭42

(23) (15)と同じ

(24) 深沢遺跡№17土器（研究概報）は左り巻きが1個ある。

(25) 富山県史考古編123P　昭47

(26) 18と同じ

(27) 22と同じ

(28) 江坂輝弥他　上野遺跡　新潟県津南町教委　昭37

(29) 岡崎文喜ほか　遺跡研究論集Ⅱ　蕨立遺跡を中心とした縄文時代中期初頭集落趾の研究　昭57

(30) 藤森栄一ほか　井戸尻　昭40

(31) 金子拓男　新潟県柏崎市剣野E地点遺跡出土土器について　信濃19-2　昭42

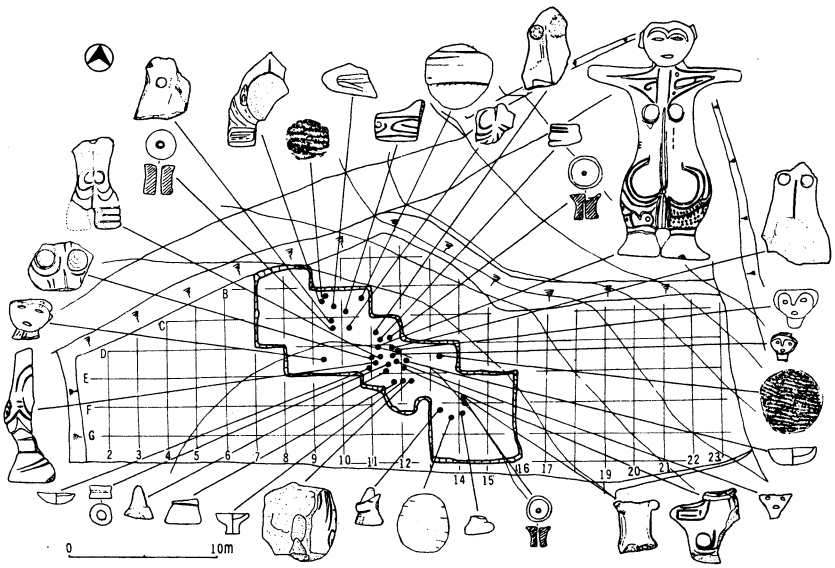
(32) (16)に同じ
(33) 長野県教委「下高井」 昭28
(34) (25)と同じ 119P
(35) 谷井彪 勝坂式土器の変遷と性格についての若干の考察 信濃Ⅲ 29－4 昭52
(36) 谷井彪 勝坂式土器 雄山閣 昭57
(37) 武藤雄六ほか 「曽利」富士見町教委 昭53
(38) 長野県企業局茅野市教委 茅野和田遺跡緊急発掘調査報告書 昭45
(39) 遮那藤麻呂 「月見松遺跡」 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 和48
(40) (14)と同じ
(41) 長野県考古学会 遺跡と遺物 信濃毎日新聞社 昭57
(42) 関雅之ほか 長峰遺跡発掘調査報告書 吉川町教委 昭49
(43) (28)と同じ
(44) 桜井仁吉 新崎式土器のパターン認識Ⅱ 大境第7号 富士考古学会 昭56
(45) 後藤和民 製作実験Ⅰ 伊藤晋祐・増田修製作実験Ⅱ 縄文文化の研究5 雄山閣 昭58

（補註）

昭和51年11月から12月に亘って行われた安源寺遺跡第三次発掘調査の縄文資料（中野市歴史民俗資料館保管）をみると、姥ケ沢遺跡の主体をなす北陸系の土器が、数十片出土しているのが確認されている。

(5) 土偶および土製品

土偶片はA地区から2点、B地区からは27点を得、このうち38図（29）は 3片の復元により、ほぼ完形の有脚立像形（河童形）土偶である。またB地区からは土製耳栓形耳飾4点、土製滑車形耳飾1点、袖珍土器2点、土器片再製の円板3点を検出した。B地区の出土状態を第35図に示し、土偶の概要は第4表にまとめた。なお土器・石器等との伴出関係は第15.36図を参照していただきたい。

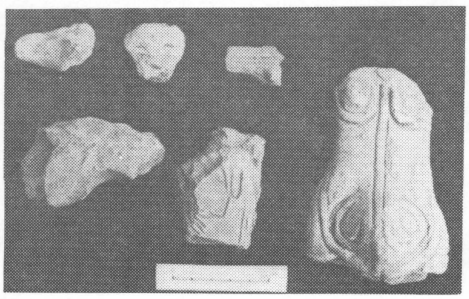


第35図　土偶・土製品出土状況図

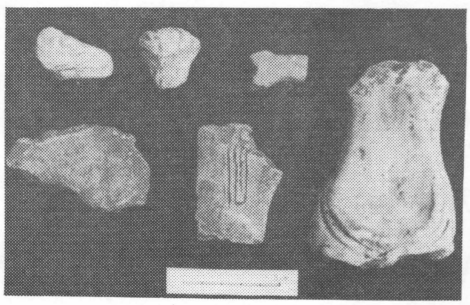
第4表　土偶一覧表

番号	図版番号	分類	部位	胎土焼成	色調	出土地点	摘要
1	1	Ⅰ	頭	B	暗褐色	D－12	顔逆三角形　頭頂欠く　目・口は円形に刺突
2	2	〃	胴	〃	褐色	E－14	左腕残存　扁平　背中板状　細砂混入　右乳房残存
3	3	〃	〃	A	暗褐色	C－9	扁平　背中はほぼ平板　右乳房残存　横腹に2条の縦線
4	4	〃	頭	〃	褐色	D－12	長頭形　頭上扁平　目・口円形　頭上に髷痕残存
5	5	〃	胴	〃	暗褐色	E－11	腹部剥落　腹に1条の縦線　両脚挿込みの枘痕　背黒色
6	6	〃	〃	B	黄褐色	E－14	左乳房剥落　妊娠状態　右眼に浅い縦線2条　砂混入
7	7	Ⅱ	頭	〃	黒褐色	D－12	髪を表現する頭頂から5条の線が垂れる　目円形　口楕円形であどけない表情　雲母を含む
8	8	〃	胴脚	〃	〃		乳房剥落　妊娠状態　横腹に縦1条の沈線　脚挿入の枘あり　足円形　雲母を多量に含む

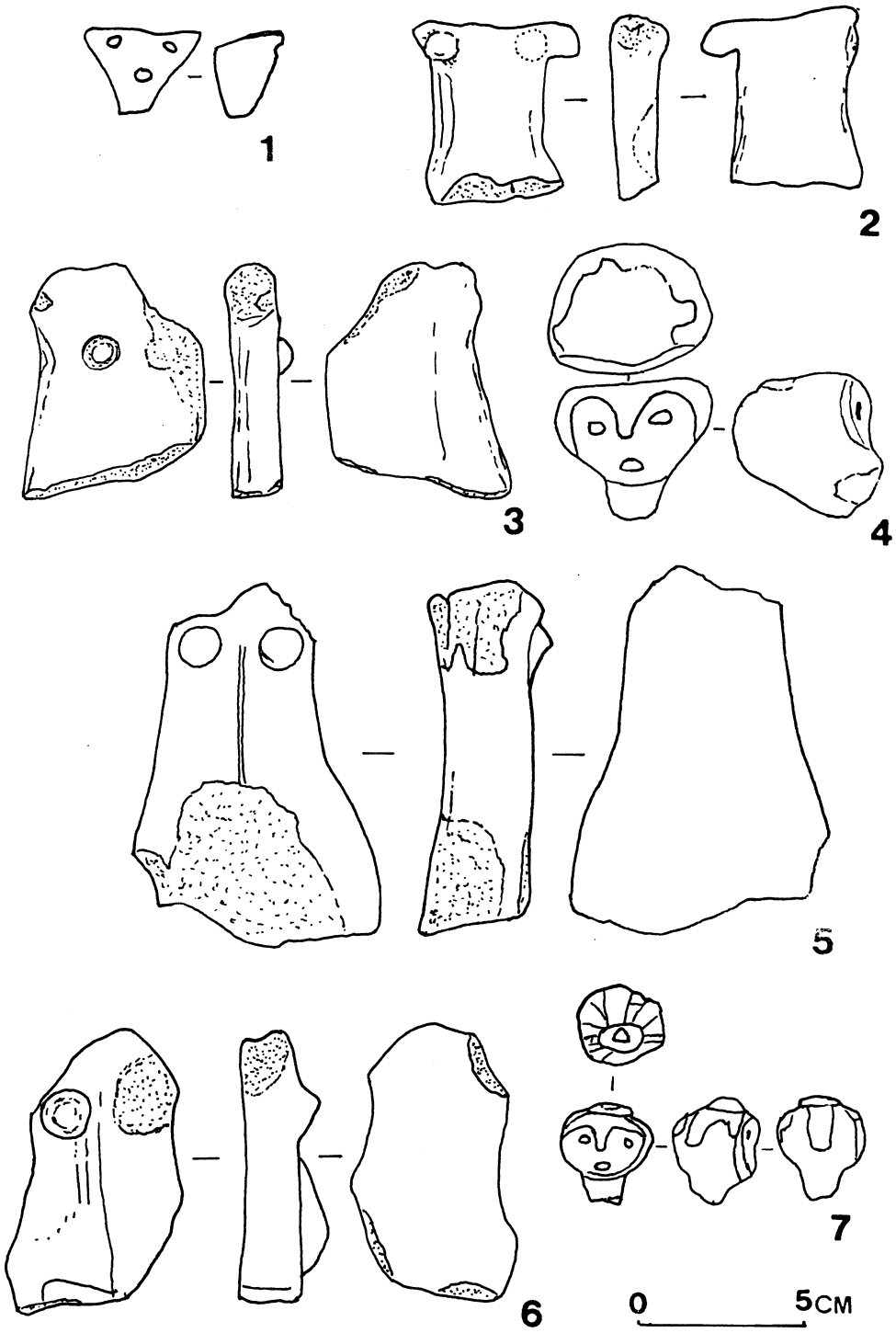
番号	図版番号	分類	部位	胎土焼成	色調	出土地点	摘要
9	9	Ⅱ	足	B	褐色	A－22	足裏円形　雲母・砂粒を含む
10	10	〃	〃	〃	暗褐色	B－9	右腕　表裏に深い沈線横走　雲母を含む
11	11	Ⅲ	頭	A	赤褐色	D－9	眉上に2条の沈線を刻み入墨を表現か　顔面凹状目・口楕円形　頭頂扁平　額上に髷表現を付す
12	12	〃	胸	〃	黄褐色	D－11	両乳房を中心とする胸部剥片　深い条痕文あり砂粒含む
13	13	〃	胸腕	〃	褐色	D－12	上半身で左腕・乳房を欠く　横腹・背中に沈線文様
14	14	〃	足	〃	暗褐色	B地区表採	沈線文横走　足裏扁平　砂混入
15	15	〃	〃	〃	〃	F－13	深い沈線文横走　足裏楕円形　挿入枘（三角錐状）
16	16	〃	〃	B	黄褐色	B地区表採	足首に2条沈線文横走　足裏楕円形　砂混入
17	17	〃	〃	〃	〃	D－11	足裏楕円形　挿入枘（三角錐状）
18	18	Ⅳ	腕	A	褐色	B－10	太形の右腕　上膊部平坦　下膊部彎曲　条痕文刺突文
19	19	〃	〃	B	〃	C－11	細形左腕　条痕文　砂混入
20	20	〃	胴脚	A	黄褐色	D－11	右胴脚　条痕・刻目・渦巻文　足裏扁平　背は後に反る
21	21	〃	胴脚	〃	赤褐色	B－9	妊娠形態　腰ふくらみ腹・臀・脚部に条痕文　脚棒状
22	22	〃	腹	〃	褐色	C－10	腹剥片　（21と22は接合）
23	23	〃	脚	B	黄褐色	A地区	条痕文　足裏扁平　砂混入
24	24	〃	〃	〃	〃	B表採	比較的大形片　条痕文　足裏扁平　砂混入
25	25	〃	胴	A	〃	E－12	大形左腰部　左脚挿入の三角錐状の孔残存　臀部張り出す　表面に黒斑点あり
26	26	〃	脚	A	〃	B表採	中形　条痕文　足裏扁平　砂混入
27	27	〃	〃	B	褐色	F－14	小形　足裏扁平　砂混入
28	28	〃	〃	B	褐色	E-11～12	中形　条痕文　足裏扁平　砂混入
29	29	〃	完形	A	鮮褐色	B－11	復元（破片3個）により完形　高さ19㎝　重さ485 g



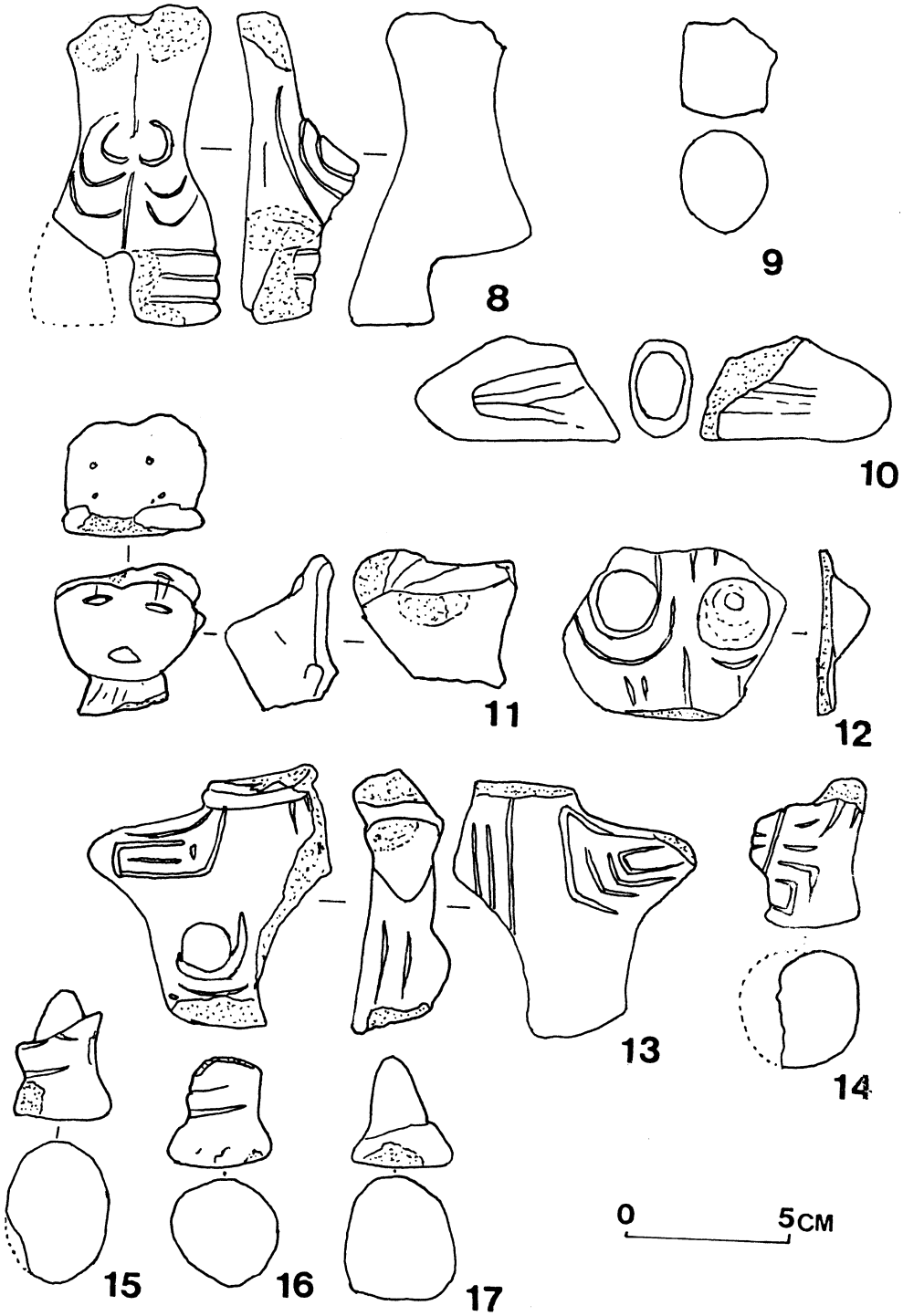
土偶片（表）



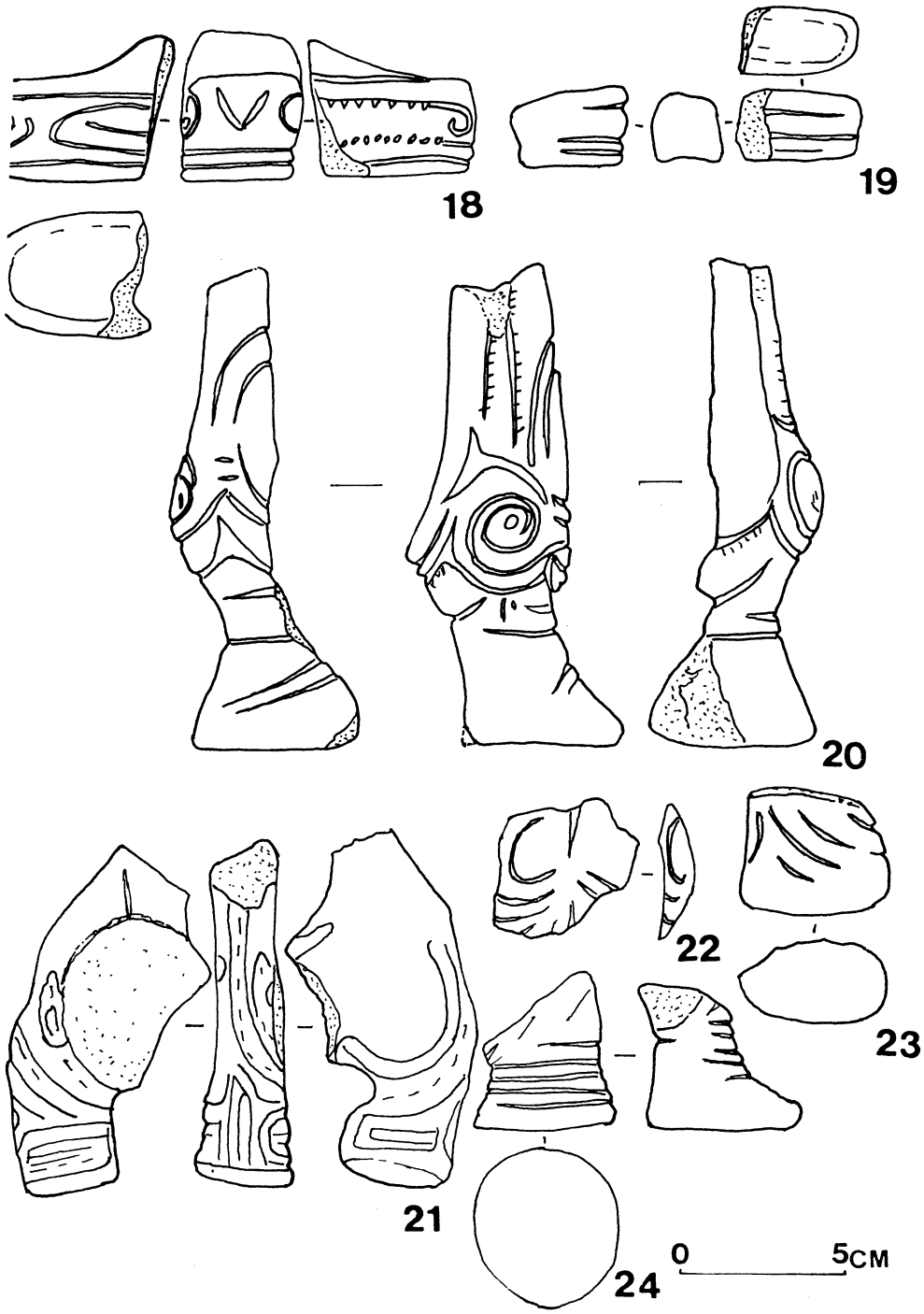
土偶片（裏）



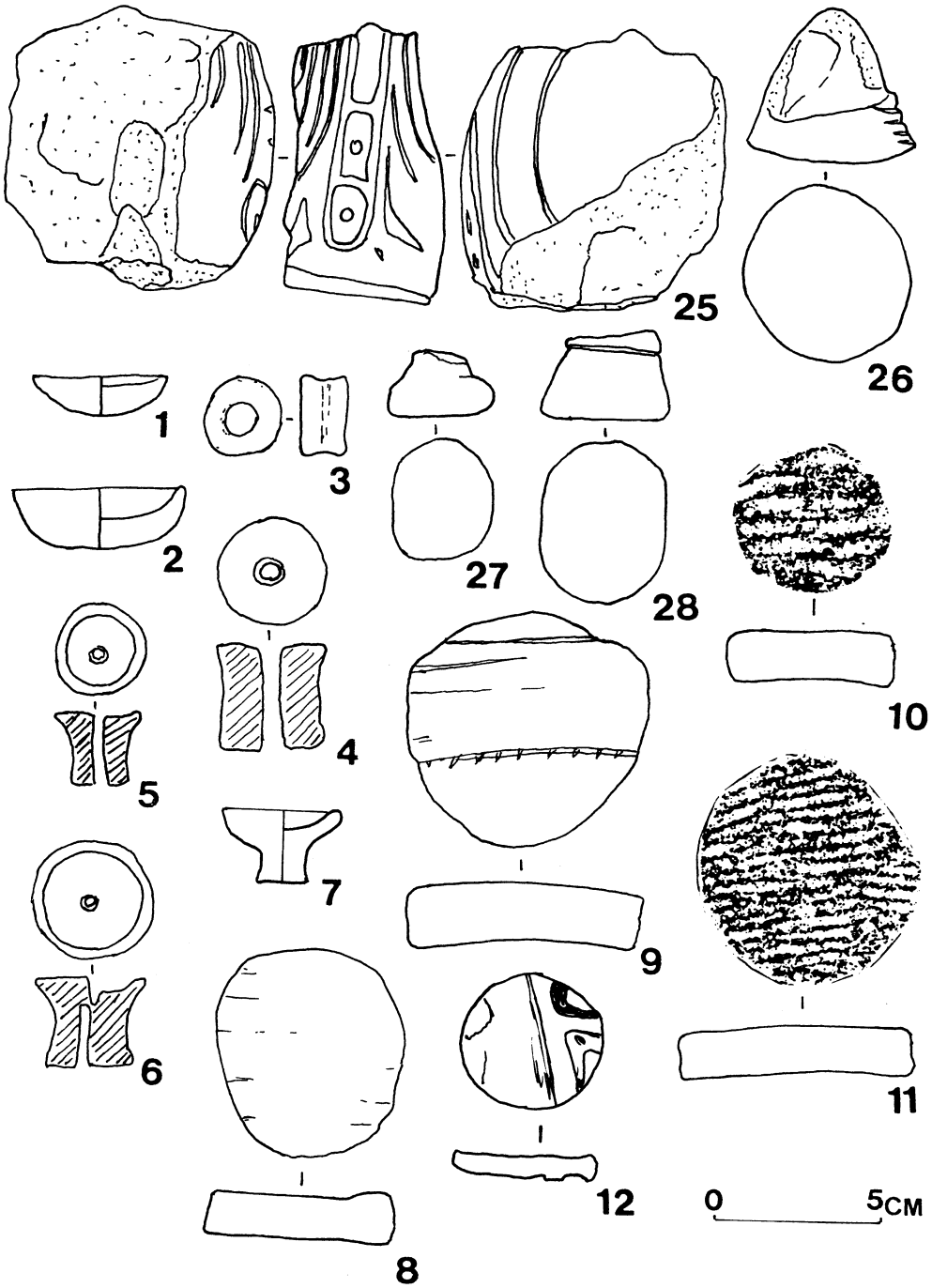
第36図の1　土偶実測図



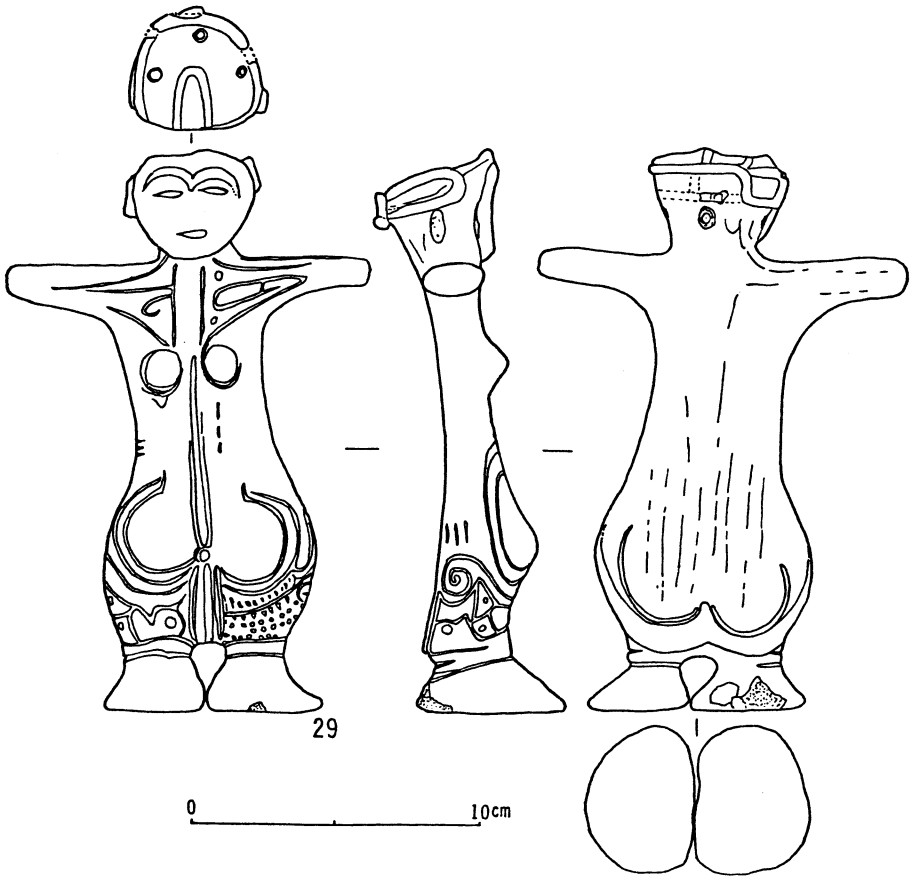
第36図の2　土偶実測図



第36図の3　土偶実測図



第 37 図　小形土器・耳栓・土製円板実測図



第38図　有脚立体土偶実測図

第37図　（1・2）は小形の皿形土器で、胎土焼成とも良好で鮮褐色を呈している。（3）は径2.2㎝の土製滑車形耳飾で黄褐色。（4～6）は土製耳栓形耳飾で有孔、（7）は杯状の土製耳飾で、いずれも褐色である。（8～11）は土器片を再製した円板である。

第38図　（29）は30㎝範囲から3片の検出をみ、復原によって、高さ19㎝、重さ485㌘の立像形（河童形）土偶で、像は直立状であるが正面からみると左へ2°、後へ5°かたむいている。

頭上は扁平の皿状を呈し、額上部には粘土紐によるU字形の髪結形を、横髪から後頭部にかけて粘土紐2条の結髪状の造形があるが一部は欠落している。頭頂には径4㎜の円形の孔が3個うがたれ、前の2孔は左右の耳孔へ縦に貫通し、後頭部の1孔は頂へ縦にぬけている。顔面はほぼ円形であるが扁平、頬から下は少しこけている。眉毛は粘土紐をもって造りだし、眉から鼻梁をあらわす5㎜の三角の垂れ下りがある。目および口は工具を右から左へ動かして、1㎝の長楕円の陰刻で表現し、柔和な相を呈している。

両腕は大きく水平に開き、一見鳥のはばよく様相を示し、両手先までは12.5㎝を測り、上膊部

は平坦につくられている。胸部には横1.5㎝、縦1.8㎝、高さ8㎜の乳房を表現しているが左はやや小さい。胴は割合に細く、長く、それに続く腹部には円形刺突で臍を描き、下腹部をふくらませて妊娠の状態を表現している。

腰は太くたくましく、背中は平板状であるが臀部は誇張した美事さがある。臍の直下には3条の縦の陰刻沈線は性器をあらわしたものであろうか。胴長に比して極端に短い両脚の下には、長さ5㎝、最大幅4㎝の扁平で楕円形の足裏をつけている。腰から脚へかけて左右異なる沈線と刺突文を附す。

土偶の製作にあたっては、あらかじめ破砕する意図のもとに、粗像をつくり、生乾きの時に良質粘土を上塗りして成形し、焼成は良好である。鮮褐色を主調としているが、顔の一部・腹部中央・右足の一部には黒褐色の部分がある。

分類ではN類とし、千曲川沿えに分布する深沢（飯山市）上野・沖ノ原（越後・津南町）遺跡出土の土偶に近似し、縄文中期中葉に位置づけてよいのではあるまいか。なおその源流は新崎遺跡（能登）にもとめられる。

第4表にみるように、分類をⅠ～Ⅳとした。（1～6）は小形粗製の板状を呈し、素朴無文である。Ⅱ類は小形ではあるが立体化の傾向がみられるが無文（7～10）。Ⅲ類（11～17）は中形立体像で施文し、足裏扁平で立つ造形で、中期前葉末と考えたい。Ⅳ類（18～29）は中形を呈し、立つ土偶（深沢・沖ノ島Ⅳ）として念入りに造られ文様を施す。中期中葉と推定される。今後他地域の土偶と対比して位置づけを明確したい。（金井汲次）

◎中期前葉末の中期中葉まで継続性を土偶の特徴として位置づけられていることの重要性長期にわたり神聖な場所であったことを示唆する。

(6) 縄文石器

磨製石斧（75.76）2点出土したが、いずれも定角式の磨製品である。そのうち75は、下半の刃部を欠く。他の1点は頭部側辺部のごく一部である。共に蛇紋岩で、前者は牛乳にうす墨を流した紋様、後者はうす緑に黒緑色を混入した状態の紋様である。76はやや小形で刃部を欠く、定角式の磨製品である。表面はよく磨かれており、灰色のしぶい光沢がある砂岩の石斧である。

打製石斧（1～36・39～55）　多量の103点に及ぶが、そのうち半数は一部または半分を欠除している。便宜上から形態分類してみる。大別して短冊形58点（形の不明分も含む）、撥形40点、分銅形5点である。ほとんどが粘板岩か硬砂岩である。短冊形石斧（1～43）1～7までは比較的大形で、13㎝以上の長さである。中央の断面をみるに、いずれも楕円である。また14～25は、平板状で完形品である。26～30は中央の断面が楕円状のもの、31～36は平板状をなす。これらは共に中央部から折れた石斧で、中形というよりはやや大きい部類である。39～43は比較的小形で、長さ6㎝前後である。中央の断面は楕円に近く、完形品が多い。打製石斧を総合的にみると、大中小の大きさや、平板状と楕円状のものでは、かなり保存

状態に差があることに注目したい。長くて約13㎝で、8㎝前後のものが多い。中央の断面は平板状で、楕円状のものはごく少ない。分銅形（52～55）、いずれも約13㎝である。中央の断面は平板状である。

三角柱状石器（37・38）長さ約10㎝で三角柱状をなし、柱状の側面は刃状をなし、使用痕が認められる。

礫器（56～74）出土数19点であるが、そのほとんどは、扁平な河原からなる。河原石の周辺部を、1～2か所加工して刃部としているのが大部分である。ほとんどが径が約6㎝である。56～65は1か所に集中的に加工されている。(66～72)までは、2か所に分かれて集中的な加工がみられる。(73・74)は断面が楕円状であり、加工部は刃状をなしていないので、目的が異なるとみられる。この礫器は、B地区特有な石器で、A地点から1点出土しているが、B地点の関係品とみてよい。またこの種の石器は、この遺跡の下流約4㎞の段丘上深沢にも類例をみる（註1）。

石鏃（78～83）いずれも無柄の石鏃で、黒耀石である。(83)は外側部に対になった突起をみせている。

大型石皿（95～97）3点とも安山岩の大きな石皿である。表裏の両面に凹部を持つ破片であるが、それぞれの特色がある。(95)は片口式とみられるが、奥部の約半分の凹部を残した両面石皿である。(76)は片口部を残し、奥部を欠く。裏面も凹状をなすが浅い。約3㎝の小さな凹が周辺部に15以上残している。この小凹は特殊な目的をもつもので、山ノ内町伊勢宮にもその例をみる（註2）。(97)は前者に類似した石皿であるが、全体の四分の一の残片である。

小型石皿（94）凹石に類似しているが、形状の差や他の類例から小型石皿とした（註3）。94は凹部5.0×4.6㎝、深さ0.7㎝である。やや不完全だが片口状の凹部をつくっている。当遺跡の今回出土の凹石よりやや小さく、大人の拳大である。やや扁平で、変形円状の河原の自然石を利用している。低面は自然の平面をなし安定している。もう1点は幼児の拳大の河原石であって、完全な片口式の小皿である。皿部は幅3.2㎝、長さ4.9㎝で、深さは中央部で1.0㎝である。底面は安定をはかるためか、中央部に径2㎝、深さ0.3㎝ほどうがってある。

凹石（90～93）(90・91)は両面2穴のもの2点、(93)は両面1穴のもの1点、片面1穴が2点である。共に河原石を利用した、長楕円形で、表裏ともに平面状となっている。

砥石状石器（89）砂岩質で灰黒色をなす。上部及び下部を欠き、残りは台状の4面使用の痕跡を残す。表面は磨かれておりなめらかである。

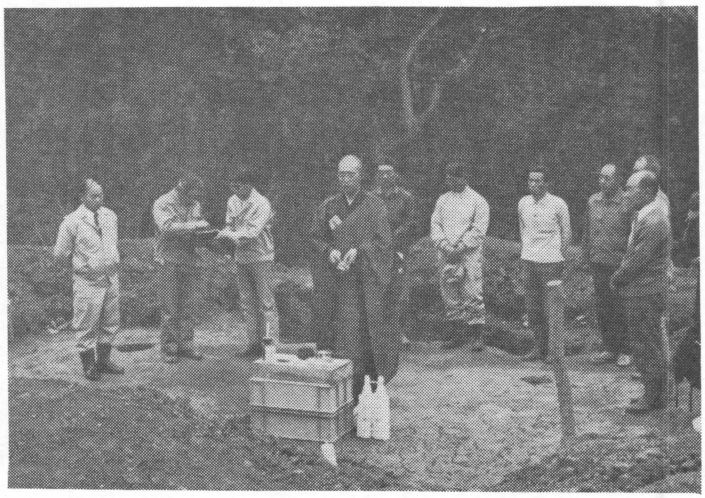
磨石（84～86）ほぼ円形に近い。(84)は4.5㎝、(85)は3.5㎝、(86)は2.5㎝である。いづれも河原石で灰黒色をなす。特に(86)の小磨石は、表面に黒煙状のものが附着している。また中央に深さ0.3㎝の小穴がある。したがって前二者とは、異ったところの磨石である。

石匙（77）サヌカイト質のものである。つまみの部分が中央上部にあって、略三角形をなす。

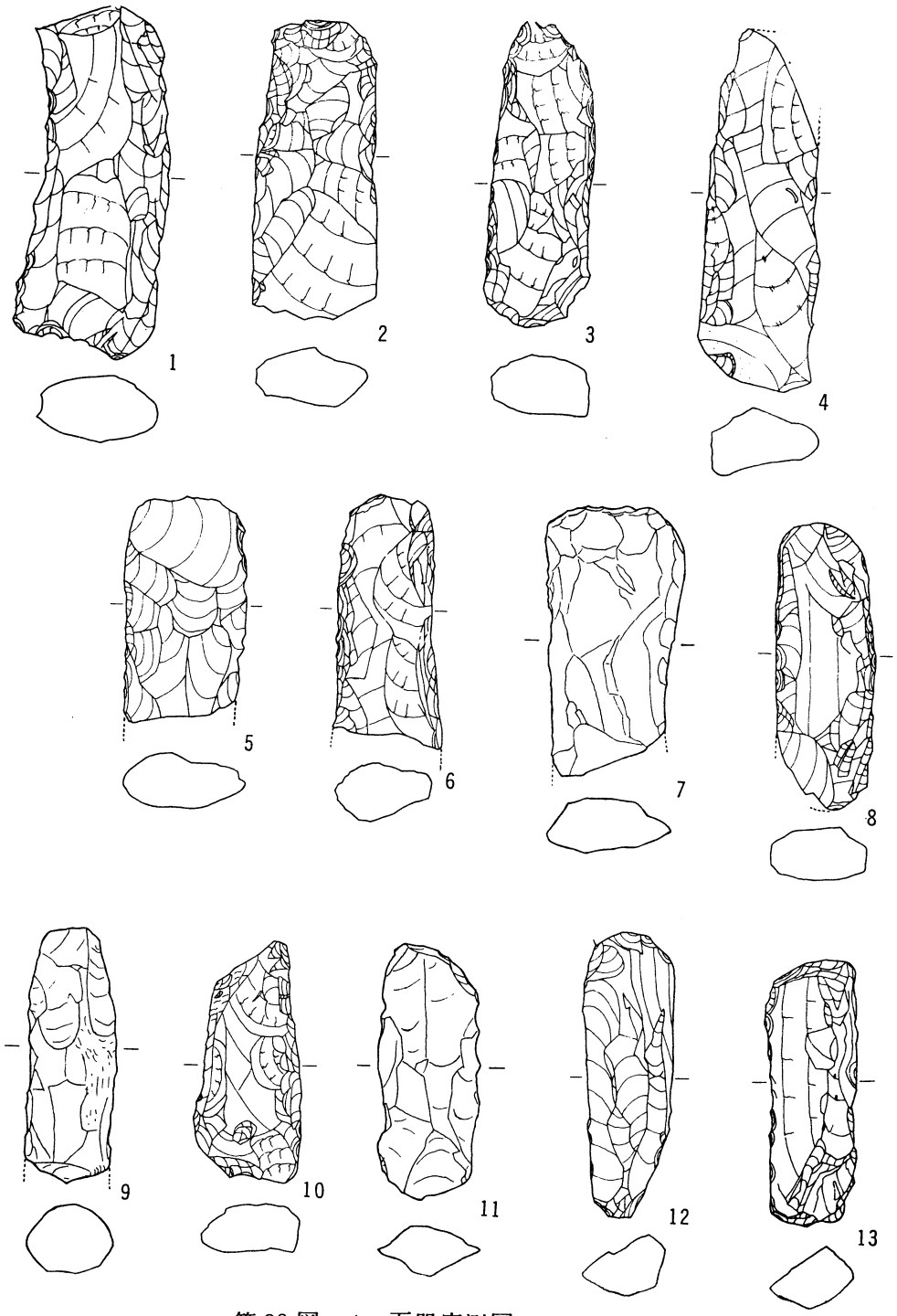
以上はＢ地区出土の石器であるが、出土品の種類と量において豊富であるといえる。特に打製石斧は100点を越えている。また礫器に特色があり、特異な存在である。大型石皿の裏面の小穴も単なる石皿とは考えにくい。小形の磨石(86)が黒色の毬状をなし、中心に1穴あるのも特殊な例といえる。さらに小形石皿は、単なる実用品とは言いがたい。これらの遺物の特色は、石器以外の土製品や、遺構との関係からとらえ、総合的に考察する必要がある。しかしながら、かなりの祭祀的な色彩の強い遺物であるといえよう。

(田川幸生)

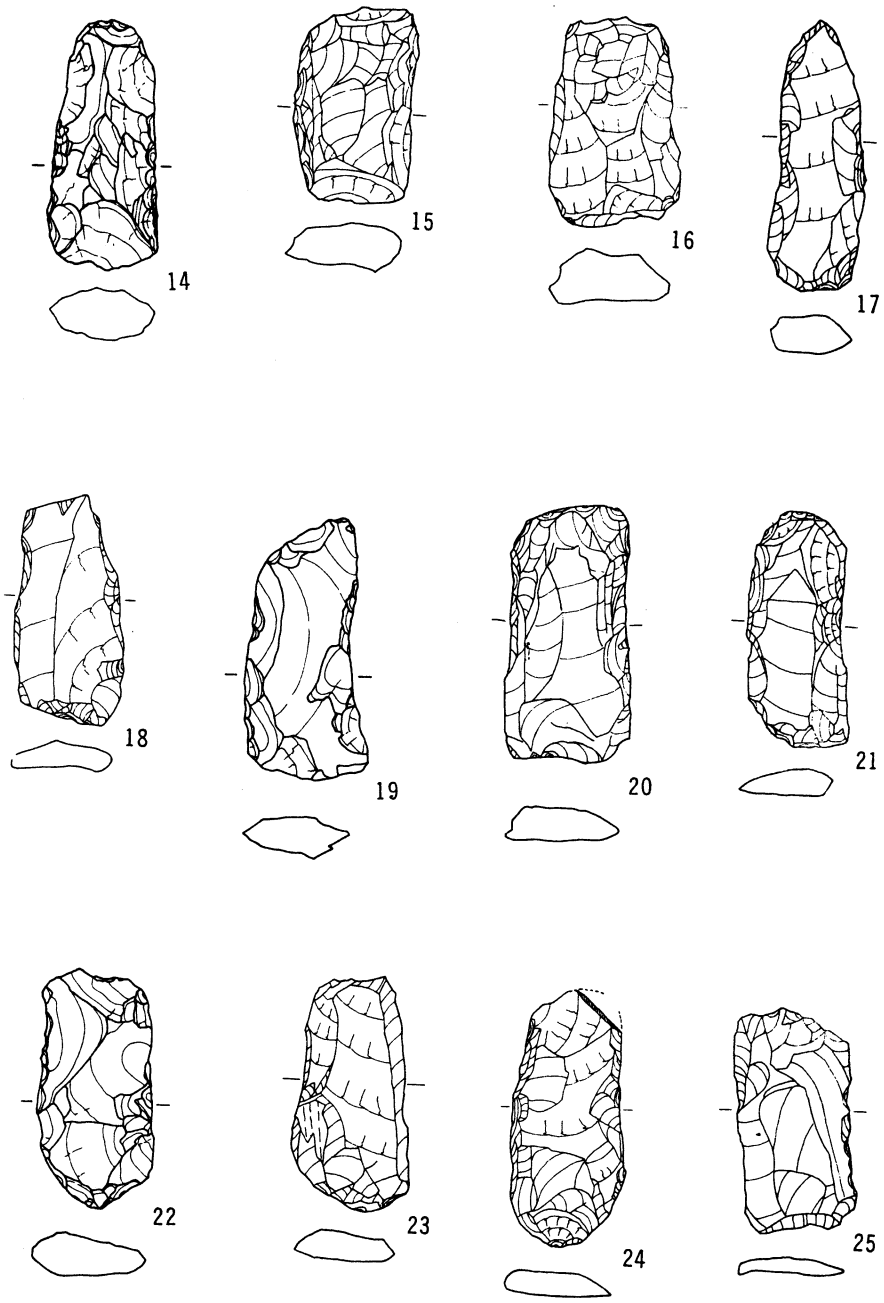
註 1. 飯山市深沢遺跡出土の石器の筆者実見
2. 下高井郡山ノ内町伊勢宮遺跡の遺物の筆者実見
3. 同上及び新潟県長岡市教育委員会所蔵遺物を筆者が実見



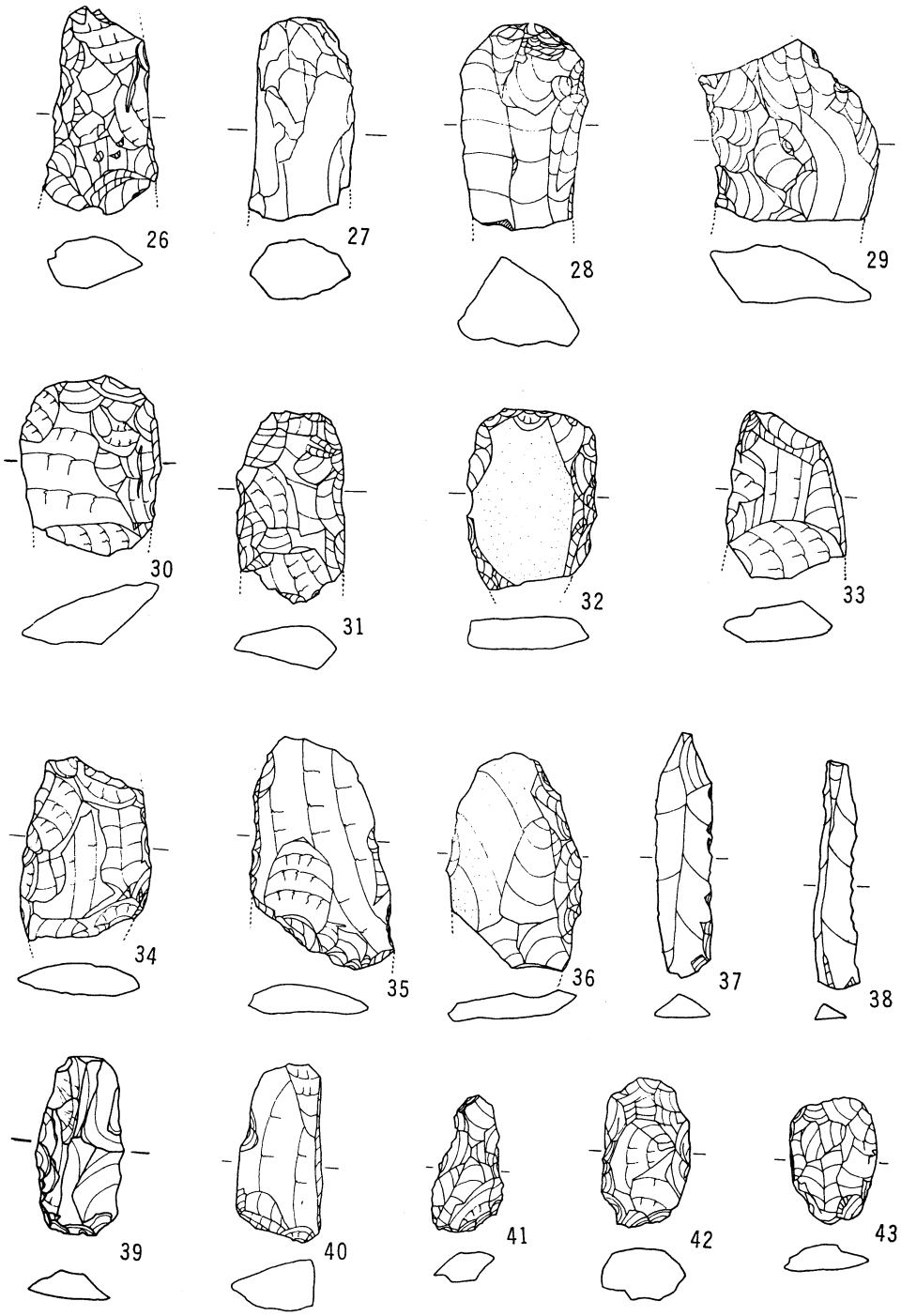
鎮 魂 法 要



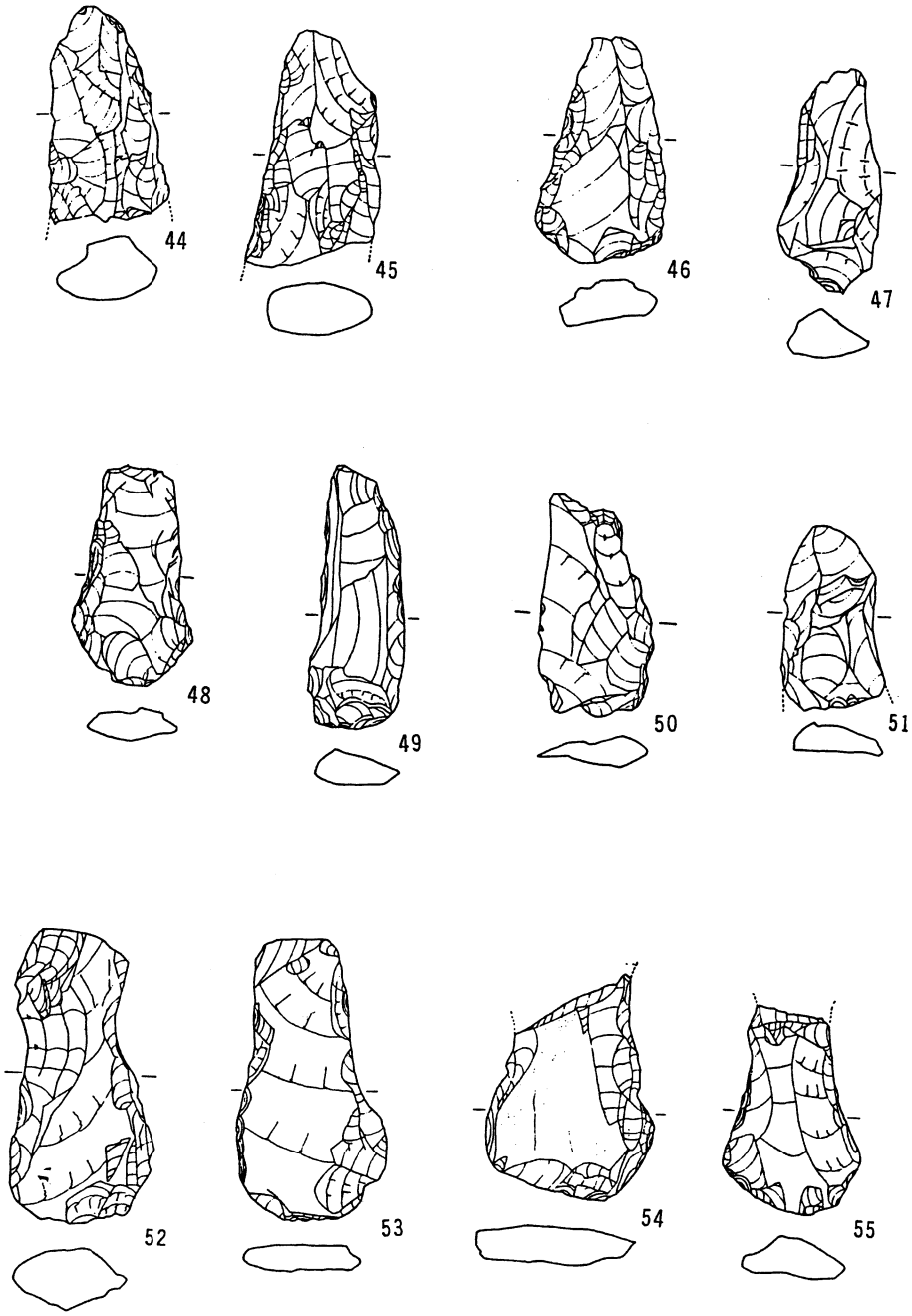
第 39 図の 1　石器実測図



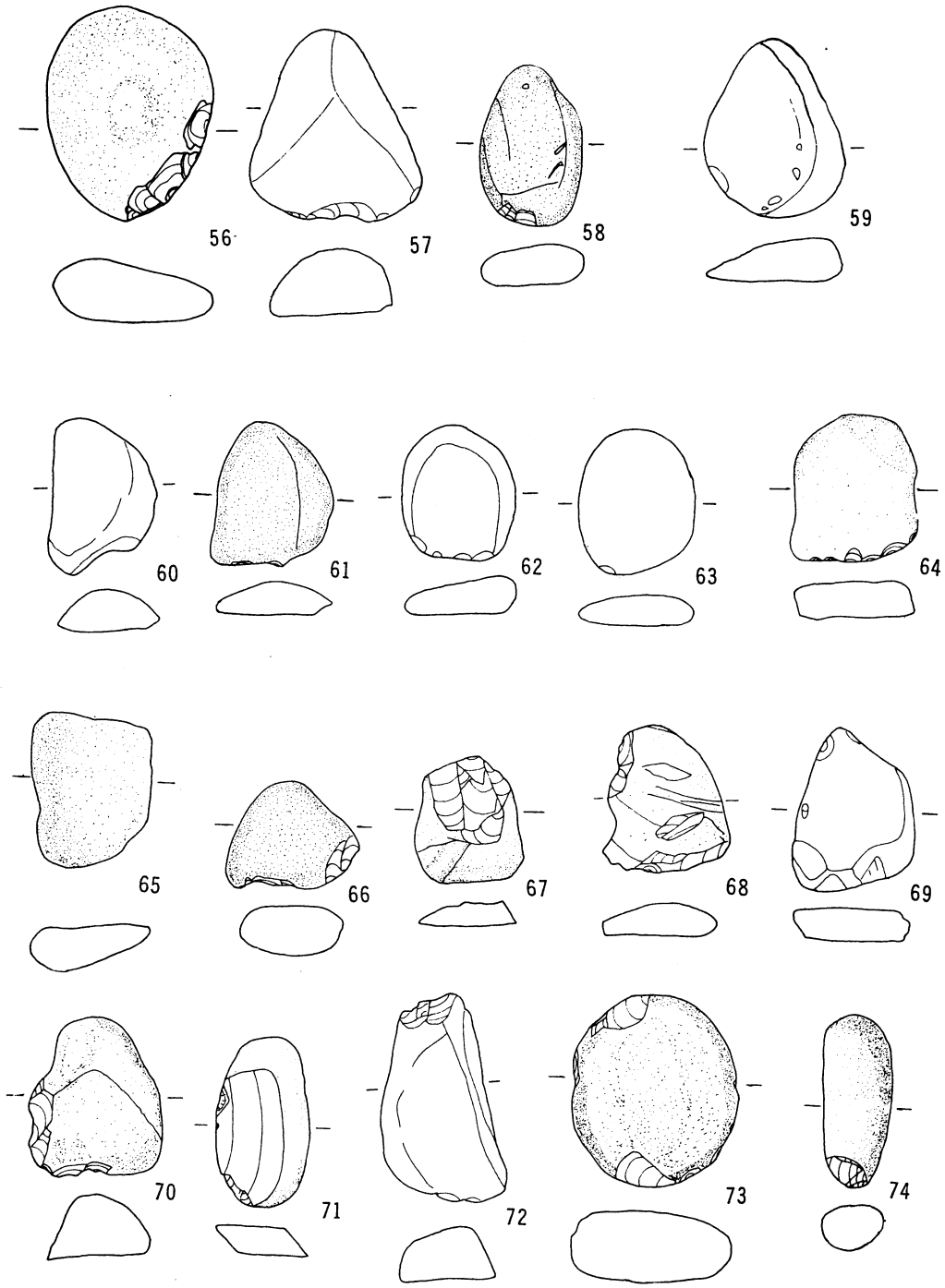
第39図の2　石器実測図



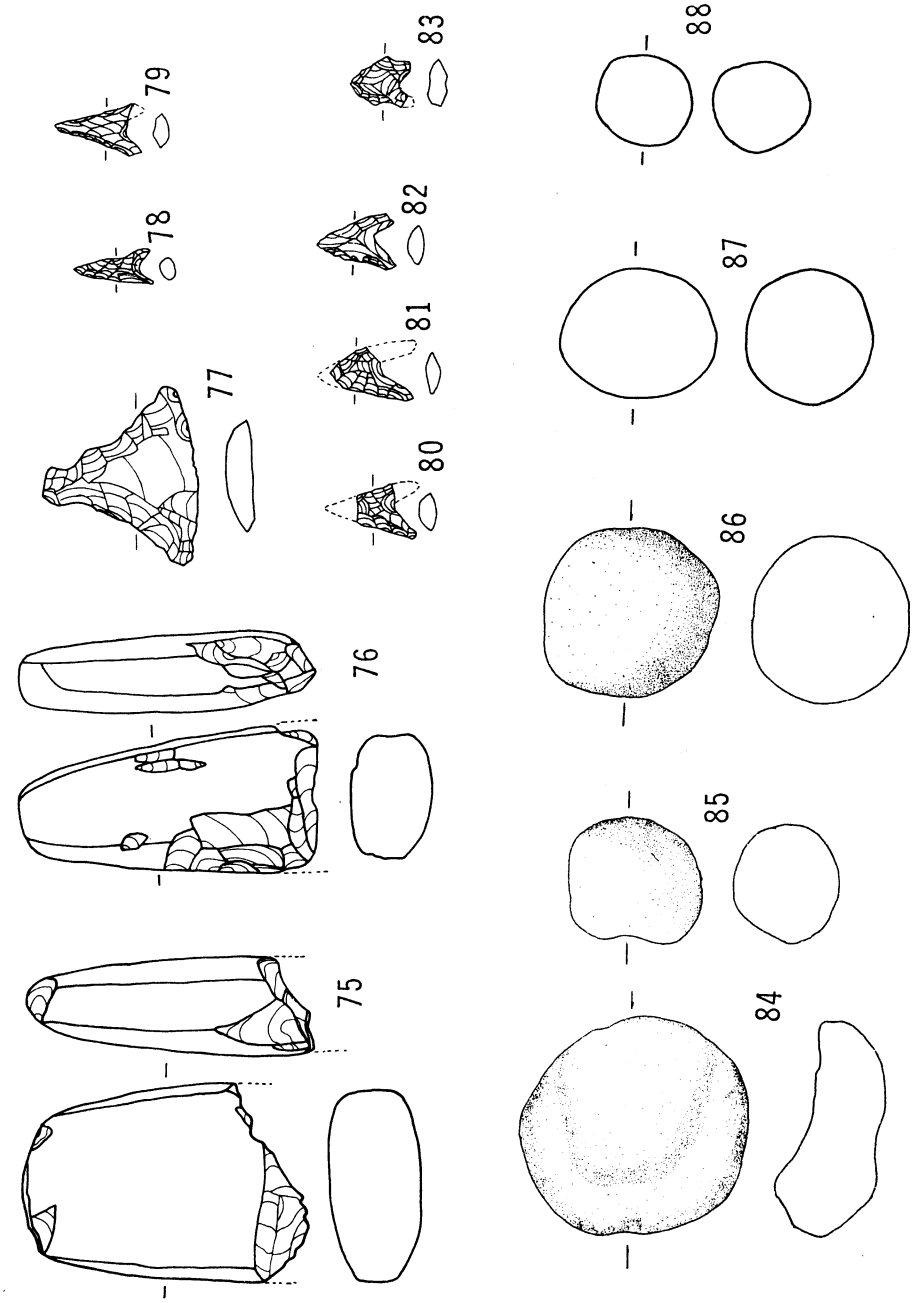
第39図の3　石器実測図



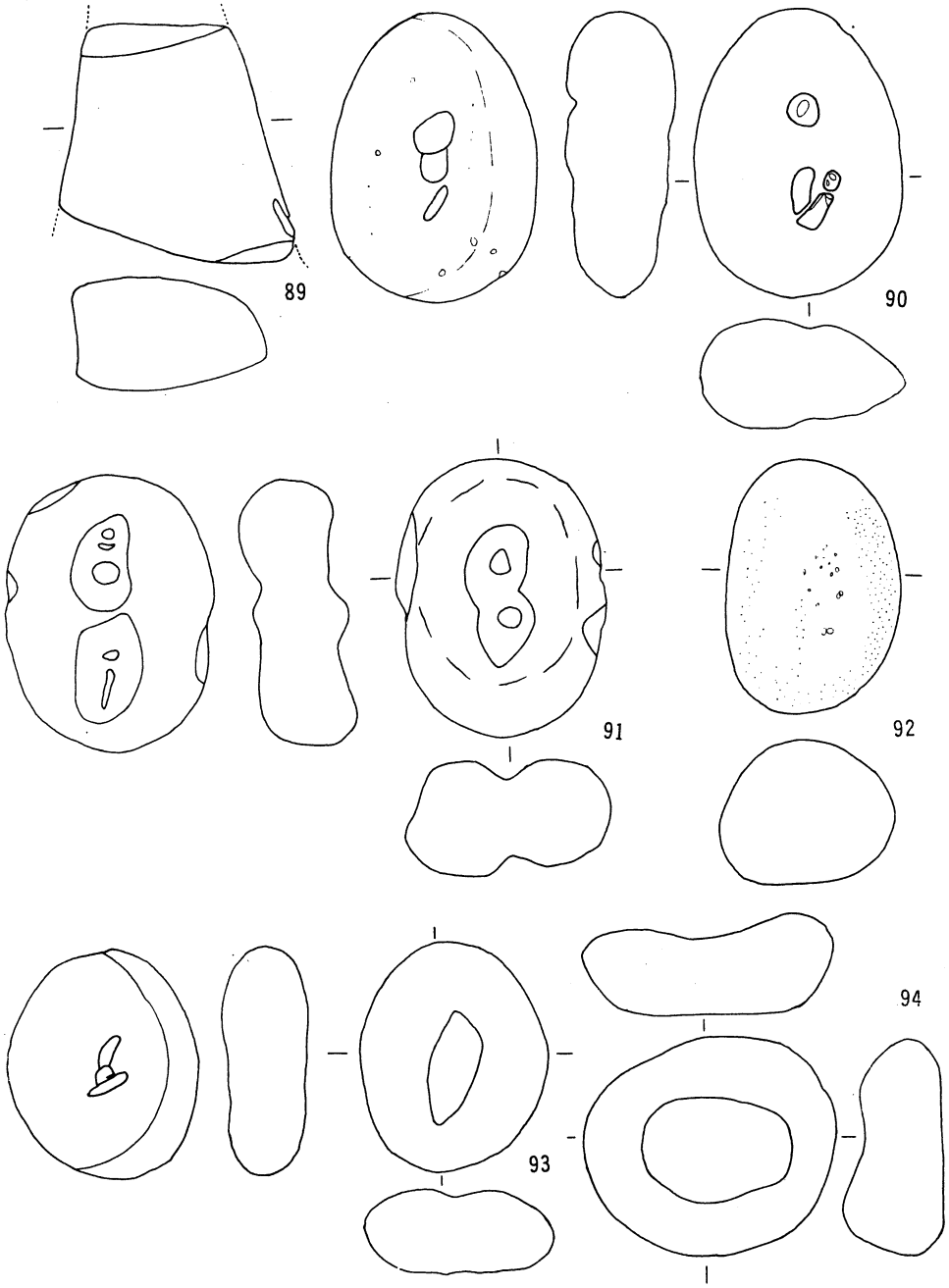
第39図の4　石器実測図



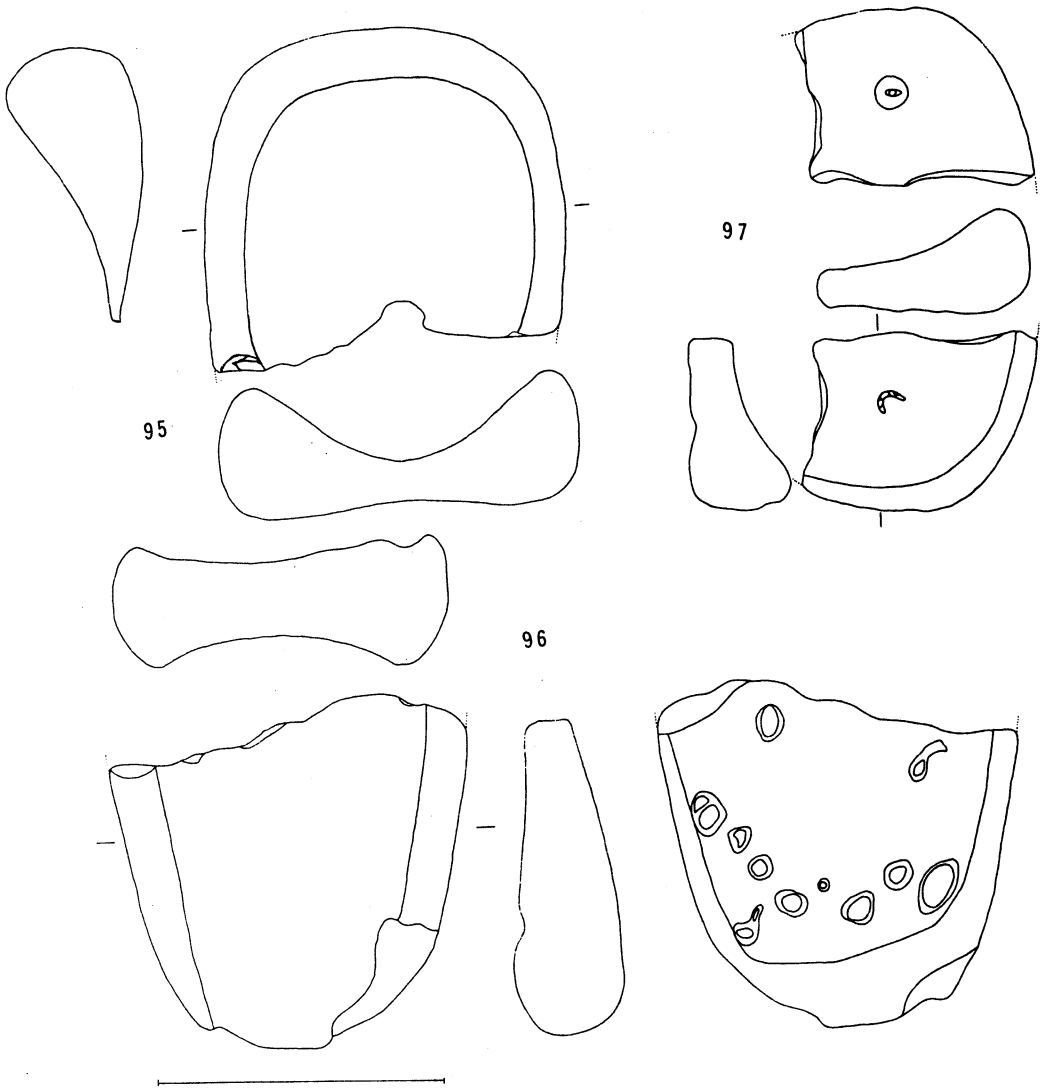
第39図の5　石器実測図



第39図の6　石器実測図



第39図の7　石器実測図



第39図の8　石器実測図

V　おわりに

調査は昭和57年4月6日から5月10日にわたり発掘を行った。地形や所有者の違いからA・B区にわけ、A区は湧水地で小峡谷の北側にあるテラス状台地の畑1300㎡のうち96㎡を発掘し、B区は小さな丘に三方を囲まれ、西へ扇状に展く凹地の畑800㎡のうち105㎡を発掘した。

A区からは、縄文中期の住居址1戸を検出し10個の柱穴と石囲炉址が出土し、床面には土器・石器等の遺物を検出した。また、その北側にプランは不明確であったが古墳時代初期の住居址1戸と土坑1基を発掘し、床面に柱穴状ピット5と焼土群3か所と少量の土師器片を検出した。

B区からは柱穴状ピット5と焼土群3か所を発掘し、おびただしい土器・石器類とともに土製品（土偶・土製耳飾・土製円板等）を検出した。西へ約10度の緩傾斜する地山にある柱穴状ピットは住居址遺構とは観取されず、土偶片22点が帯状に分布し、その周辺に在る打製石斧78点・ミニ土器・土製耳飾等から祭祀址と推定される。

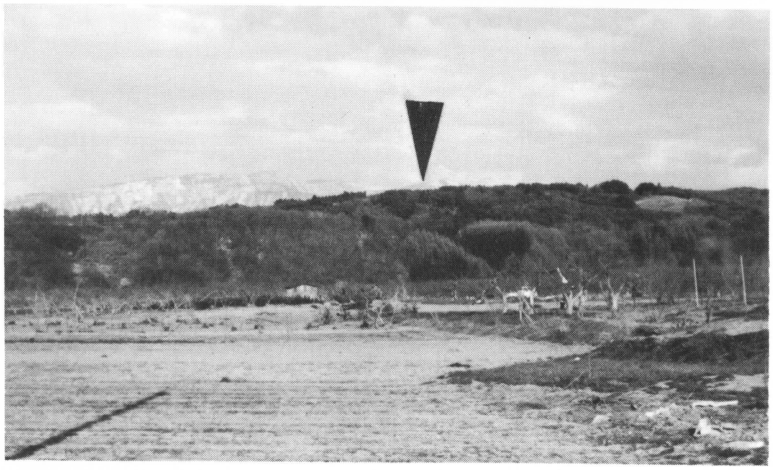
土器は縄文前期前葉は僅少で、前期後葉から中期前葉に至ると次第に量を増し、中葉が主体で後葉初頭（A区の住居址）にかけて数量とも多く、この土器編年を第3表（80頁）に提示した。この姥ケ沢の土器は、基調は北陸文化圏からの影響下にあり、五領ケ台式・阿玉台式・加曽利E式（関東）の影響下に変容して、姥ケ沢の特色ある土器文化が形成されたもののごとくである。本遺跡から北へ7㎞に所在し、立地条件も略々同じ深沢遺跡（飯山市）とは同一文化内容を持つものと思われる。今後、この種の資料の累積によって究明を深めて参りたい所存である。

春のアスパラガス栽植前にもかかわらず地主の阿藤宗司・阿藤安広氏は発掘調査の便宜を与えてくだされ、予期以上の成果をあげることができたことはお二方の御懇情によるもので、深く感謝を申しあげる次第である。末筆であるが御教導くださった先学諸賢をはじめ発掘調査に御協力くださった方々に心からお礼を申しあげたい。

（金井汲次）

図　　版

図版1



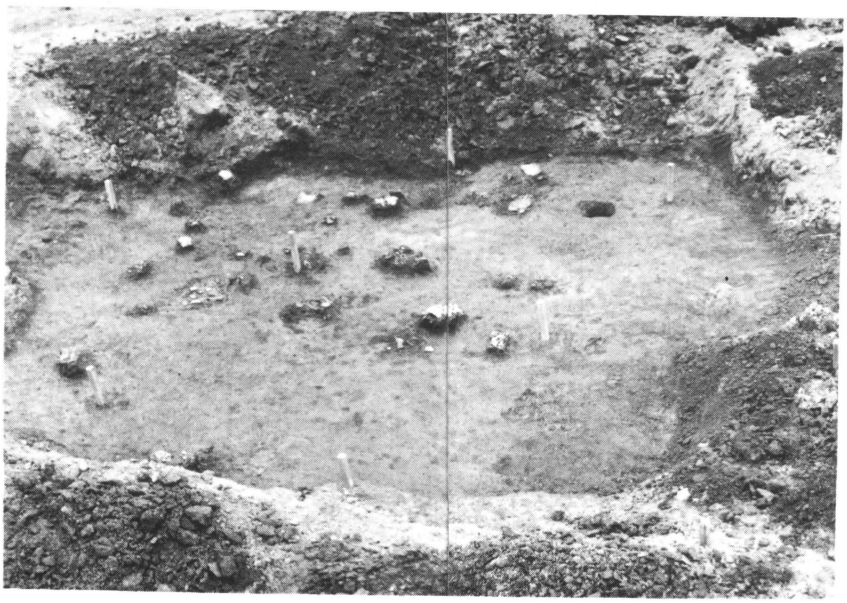
姥ケ沢遺跡

姥ケ沢の湧水地

姥ケ沢B地区

図版2

縄文住居址

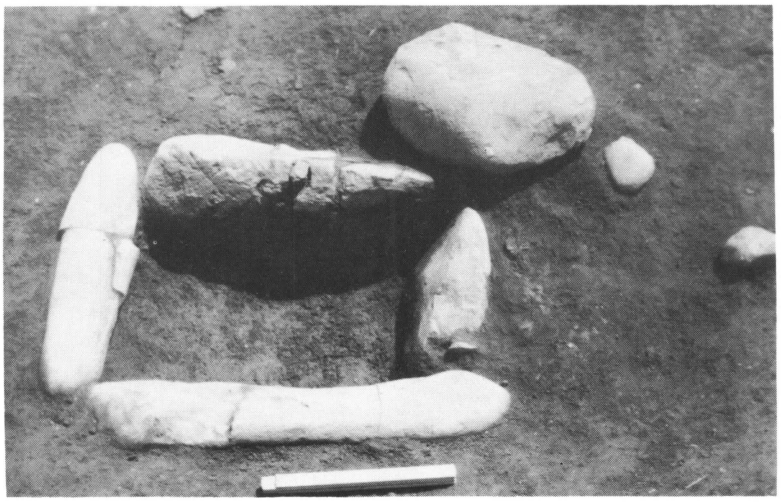


古代住居址

図版3

住居址床面

炉址上の土器片

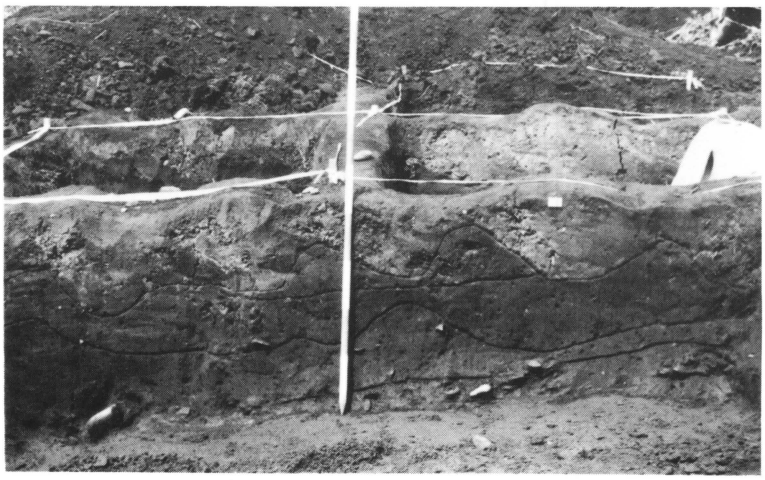


石囲炉址

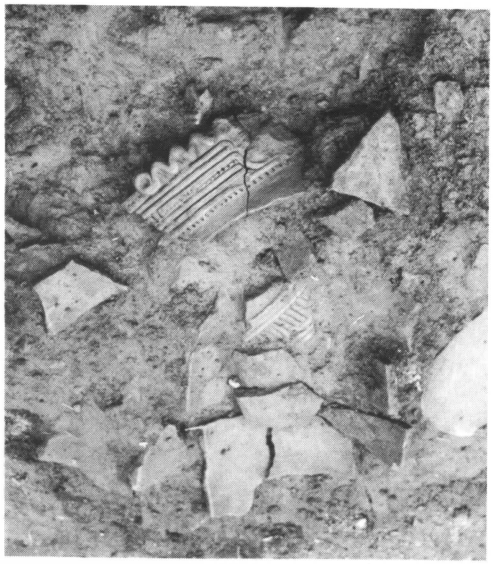
図版4

B地区

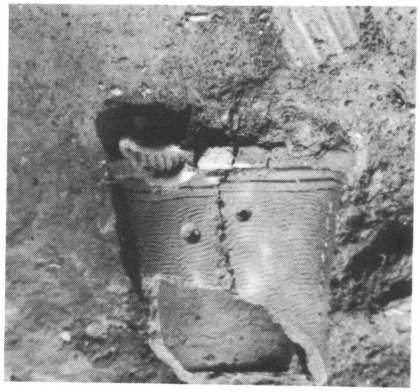
遺物出土状況（B地区）



土層（B地区）



土器出土状況（B地区）



土器出土状況（B地区）

土偶出土状況

土偶出土状況

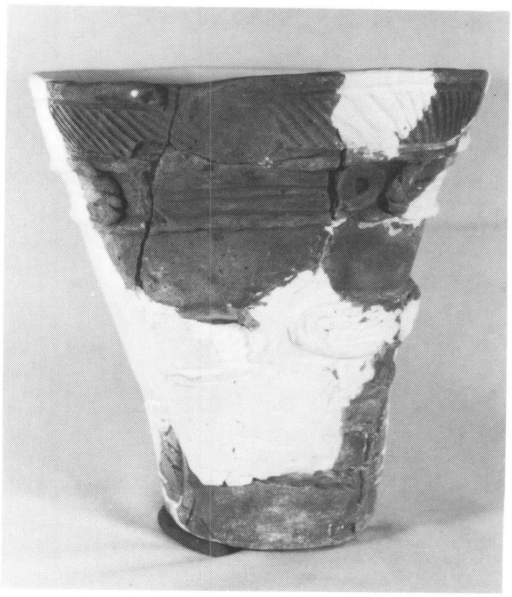
縄文中期土器

図版6

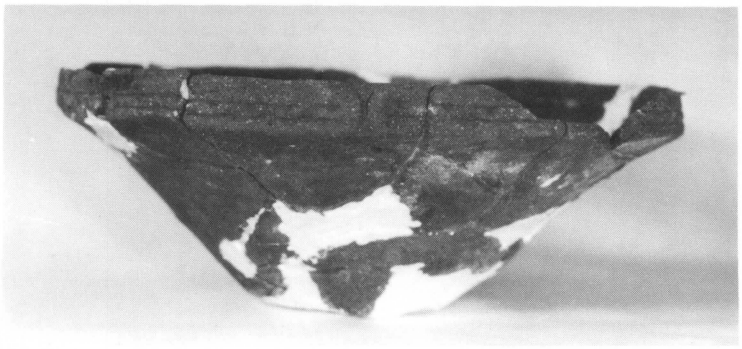
縄文中期土器

縄文中期土器

縄文中期土器



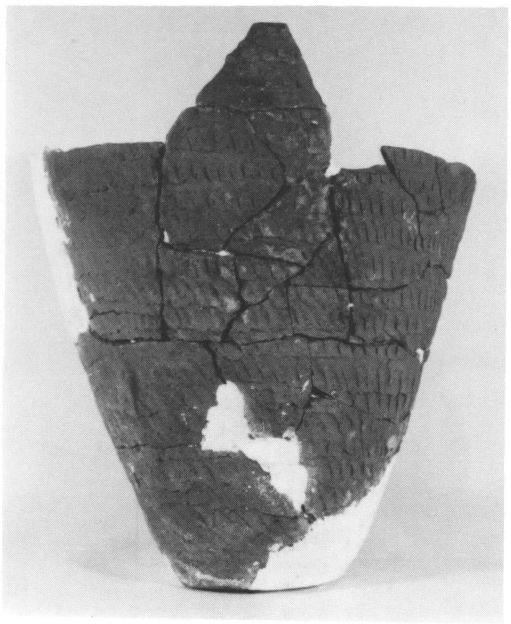
縄文中期土器



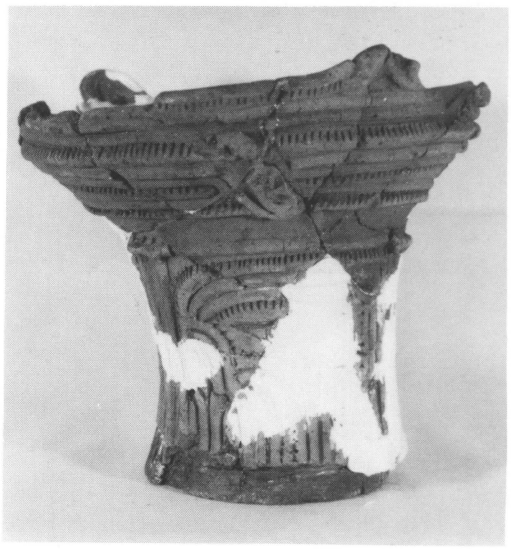
縄文中期土器

縄文中期土器

縄文中期土器



縄文中期土器

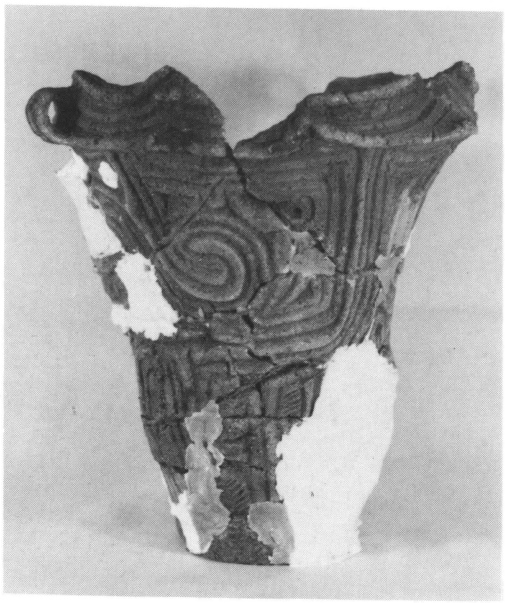


縄文中期土器

図版8

縄文中期土器

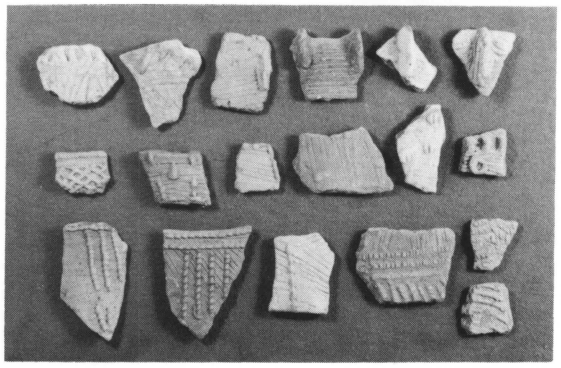
縄文中期土器



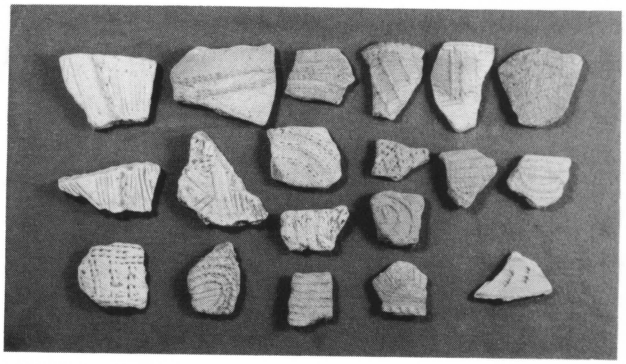
縄文中期土器

縄文中期土器

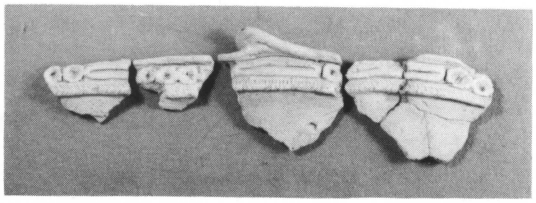
図版9



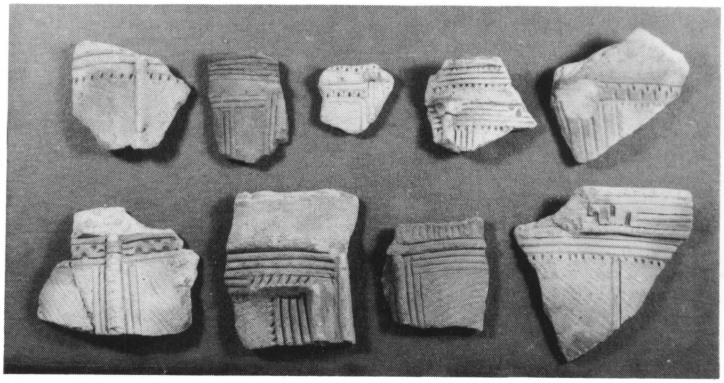
縄文前期末土器



縄文前期末土器



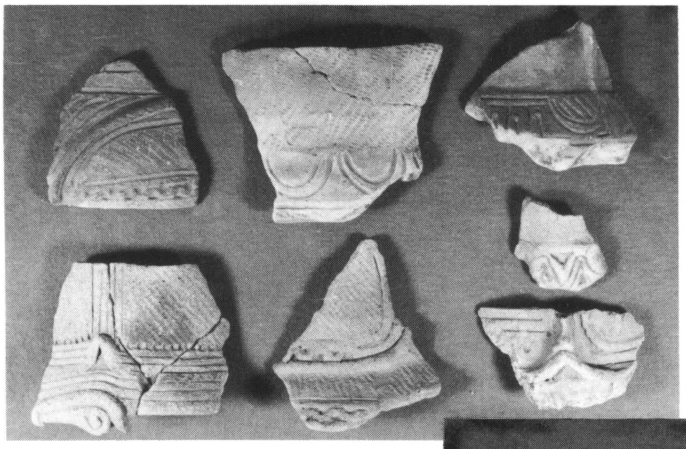
縄文前期末土器



縄文中期土器

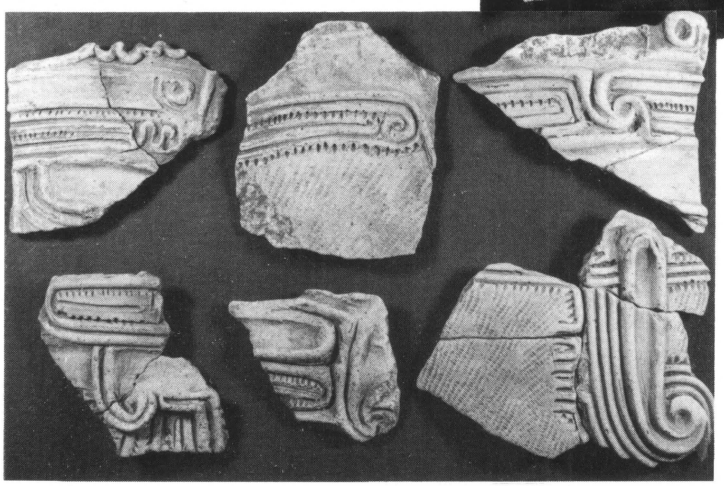
縄文中期土器

図版10

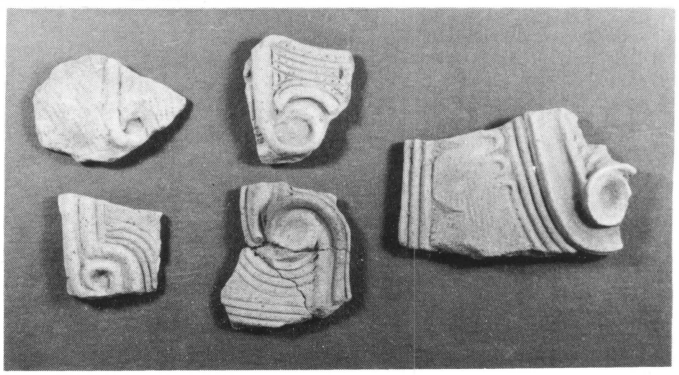


縄文中期土器

縄文中期土器

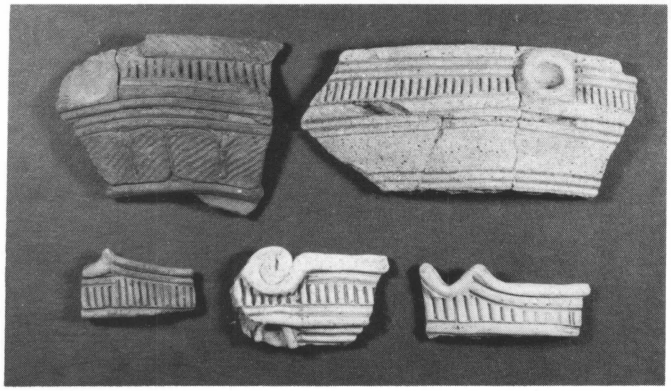


縄文中期土器



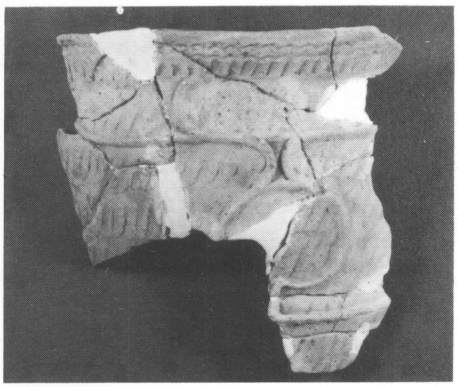
縄文中期土器

図版11



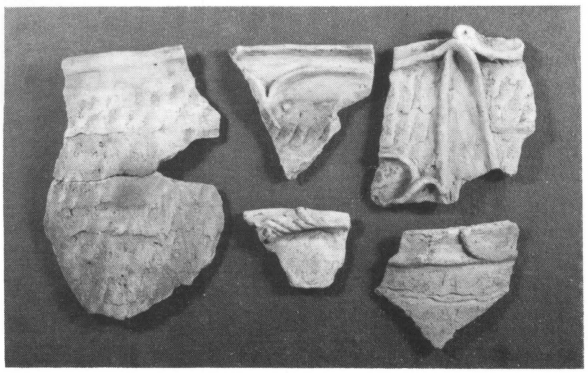
縄文中期土器

縄文中期土器

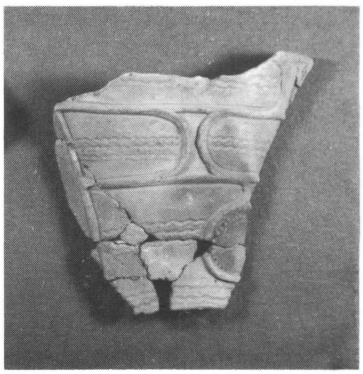


縄文中期土器

縄文中期土器

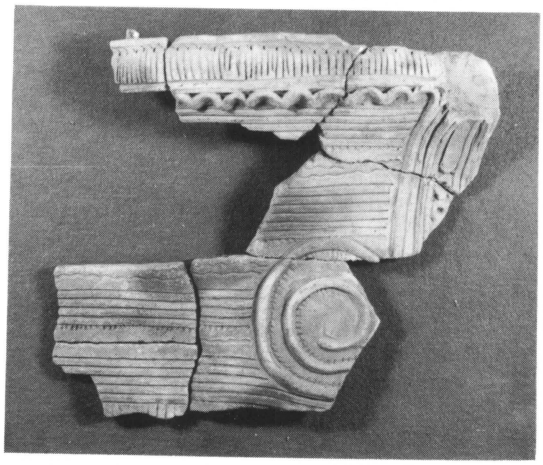


縄文中期土器

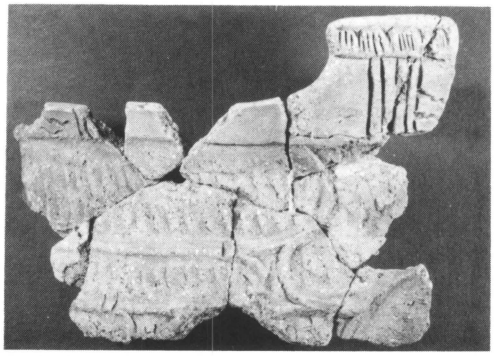


縄文中期土器

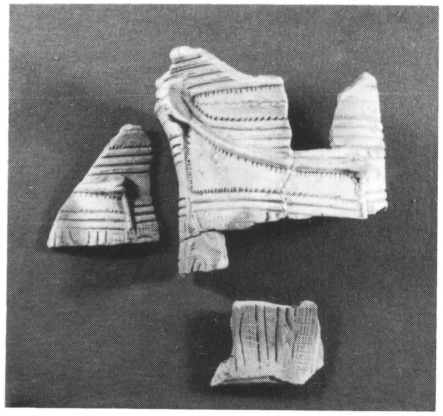
図版12



縄文中期土器



縄文中期土器

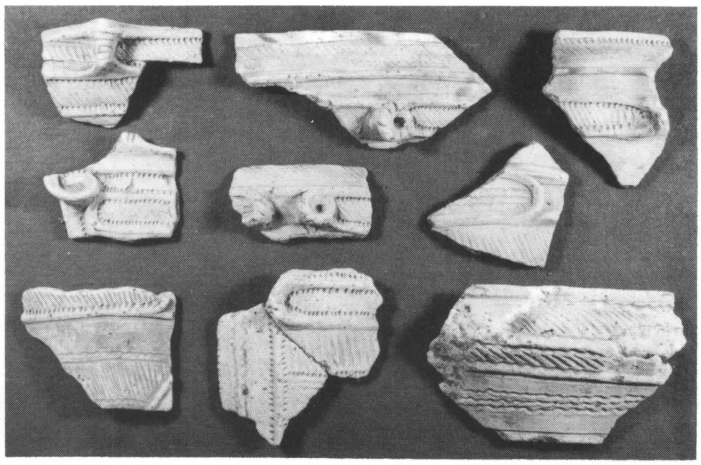


縄文中期土器

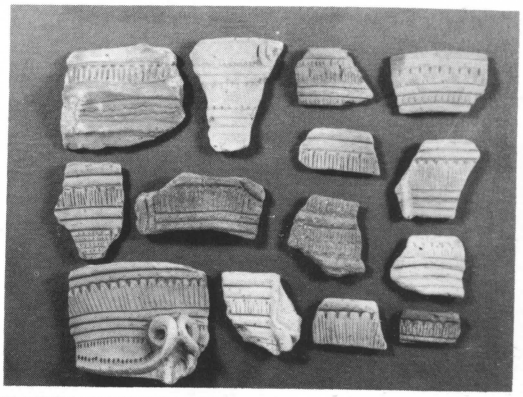
縄文中期土器

縄文中期土器

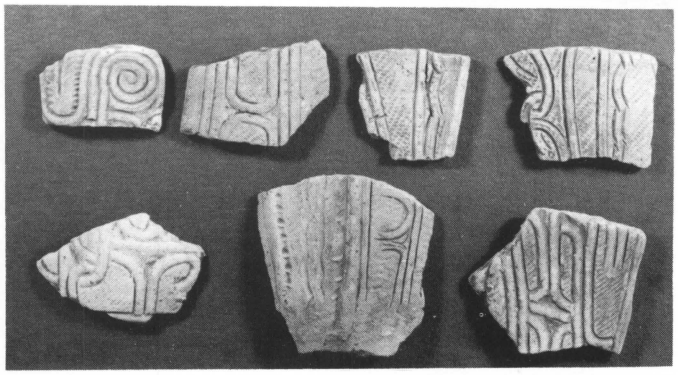
図版13



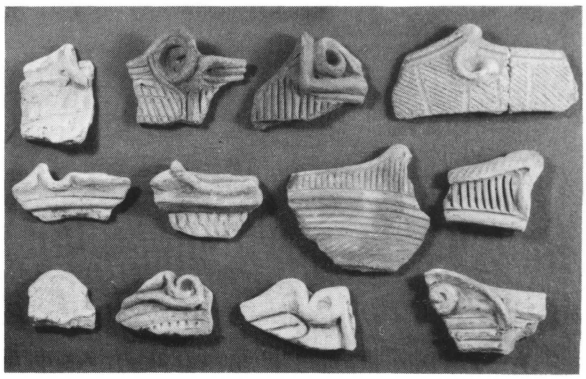
縄文中期土器



縄文中期土器



縄文中期土器



口縁部集成

図版14

土偶（表）

土偶（裏）

打製石斧

姥　ケ　沢

1983年3月

発行　中野市教育委員会

印刷　カナイ美術印刷